

立川流匠家雜術

倭繪樣集

第一號

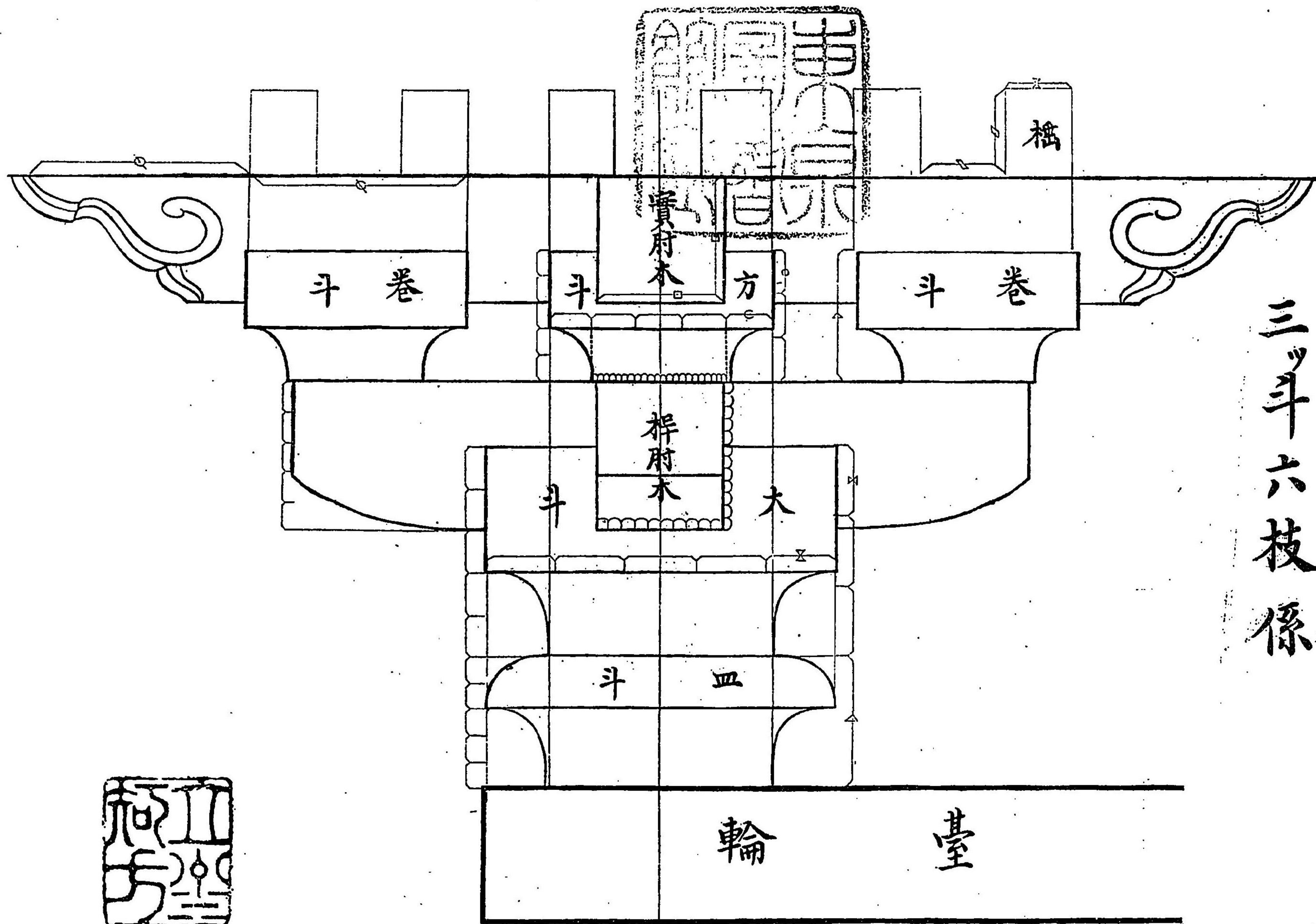
けしんかき

古く曰く良匠は規矩を離るるに能はずと宜るる哉凡そ物もれ
 けしん則ち規矩の常ならず斯道に於ては殊然と云故を
 以て夫古くは本邦建築の業頗る進歩の域に達せし者あり
 其人多くは家傳秘法と稱し廣く人に傳へたる許さず同種
 の著書も亦少くは其載する所難級疎策し唯其梗
 概を述ぐる過ぎずしかる子弟の模範あり完ん後其力
 を勞し日子を費すたるのみならず實際に便かるる者も稀か
 り是れ最可惜限なり我曾祖立川小五衛尉曆の昔に在り
 工部式に精巧な所謂立川流を以て稱せし者も傳へ
 ず今に至りては其遺るる建築之をきり流るる一朝先頃の如き震災
 遭ふの不慮あり其毀壞亦將測れざらん故を以て
 因襲の久しき皆未造を單用せし今も拙土氣候等に適
 合せる職由より故に祖父知方従来の著書多きは簡略
 失し且其形極小之が應用を計るる頗る難き業あり成
 懐み移年程の繪様を上梓せんと欲し終ら果せず
 て歿すを度予其意を承け大奉書及美濃紙に彫
 大して方圓曲直等墨繩を加順次出版せよ要は直之
 を印地し用ひしむるを得るに在り庶幾は斯業後
 人の此須臾の閑く可ざるを繼ぎしむるに益
 餘師ありん

甲午小暑号

立川通雄謹

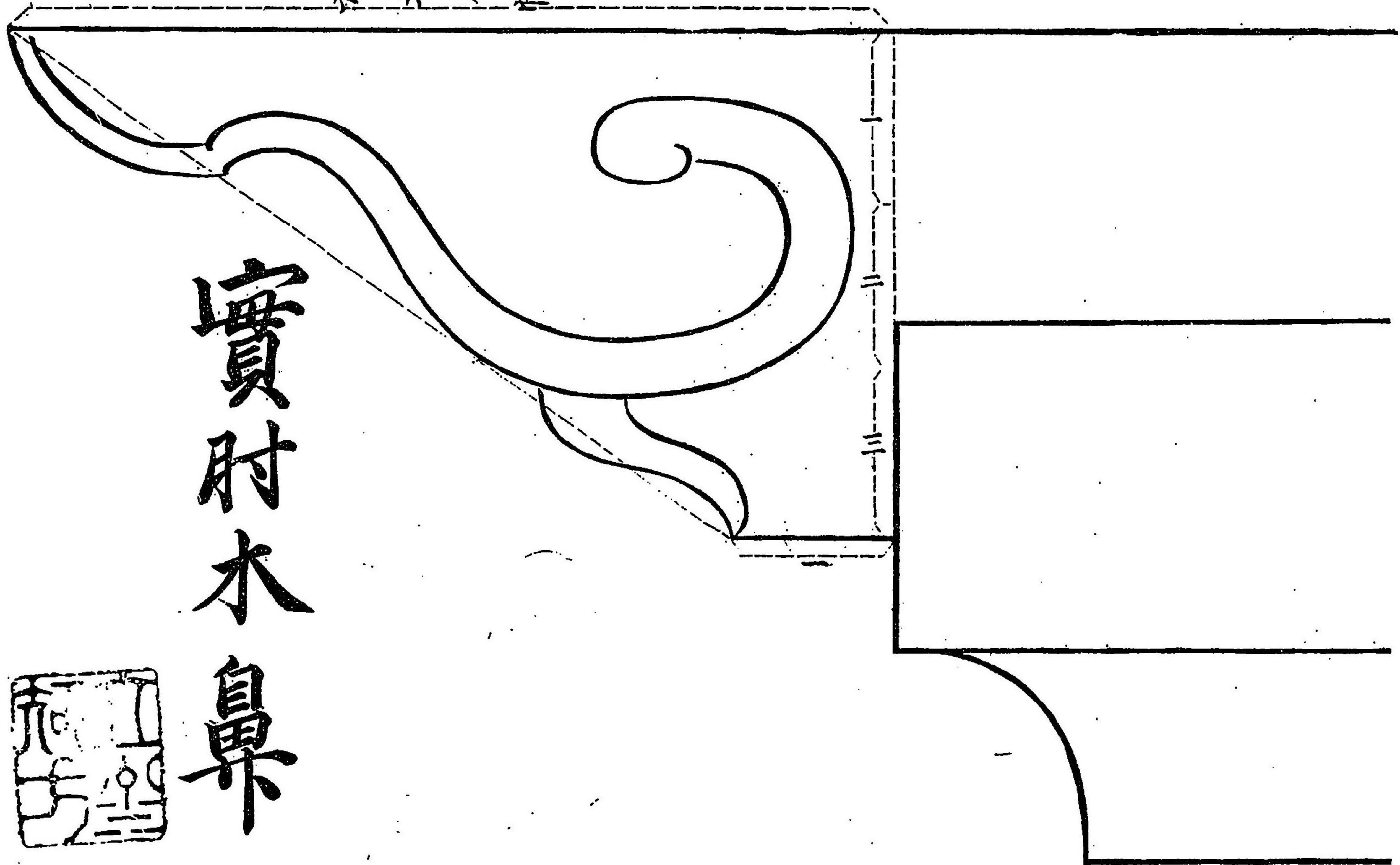




三斗六枝係



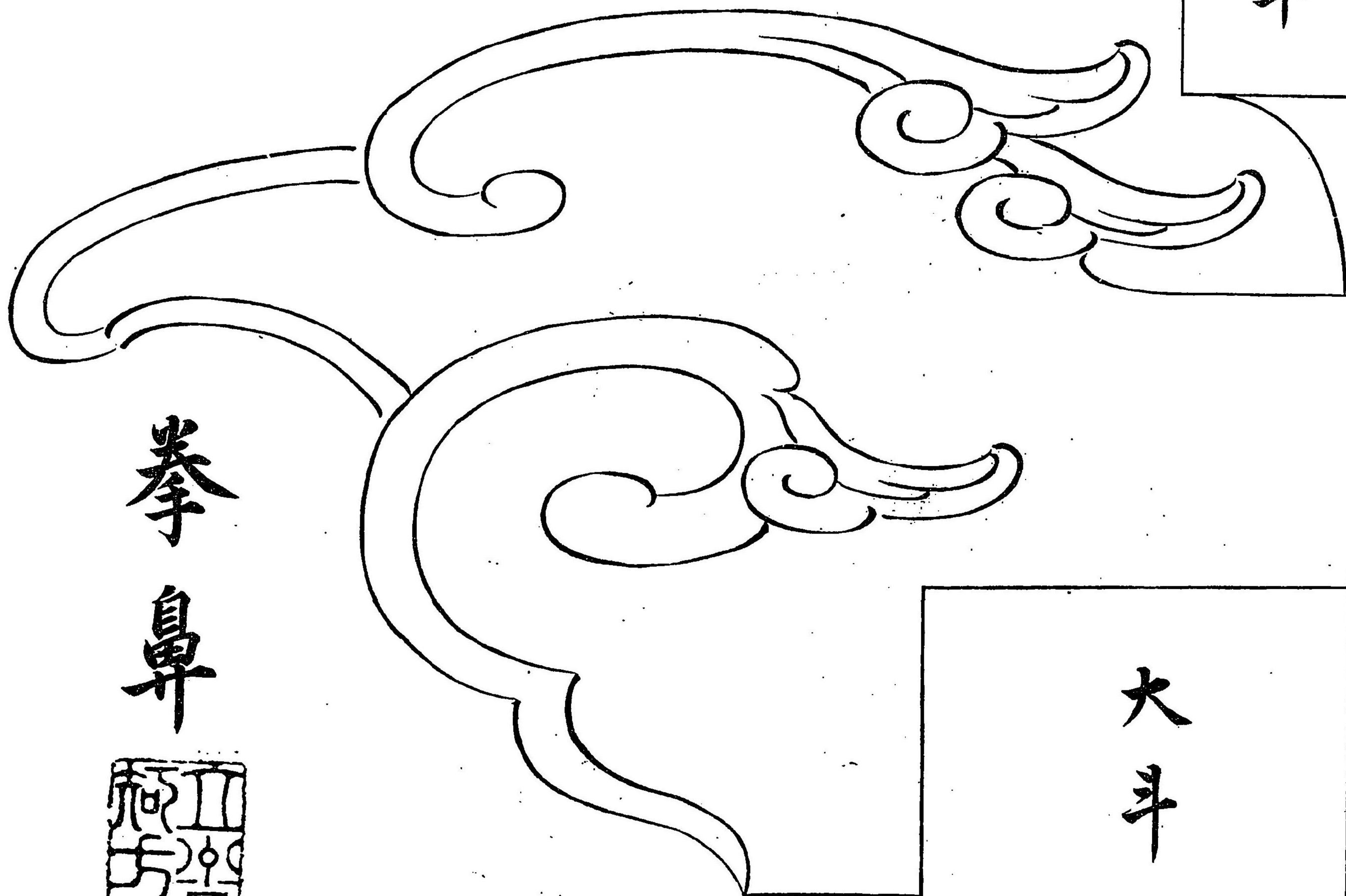
和斗、細



實肘木鼻



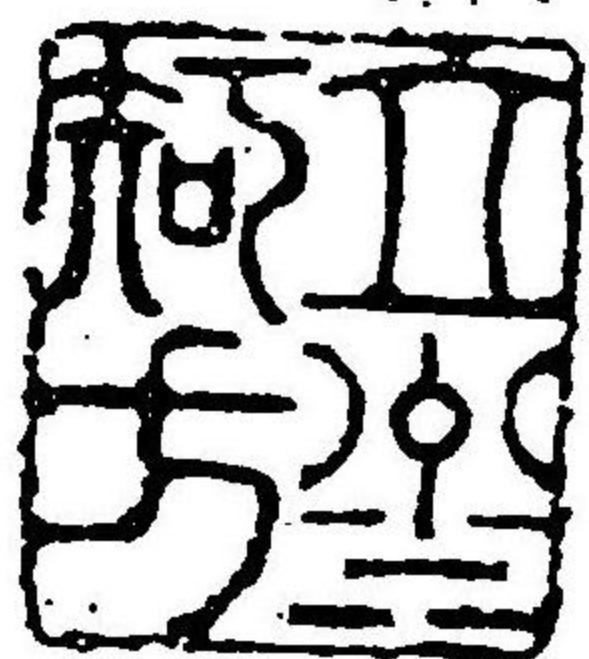
卷斗



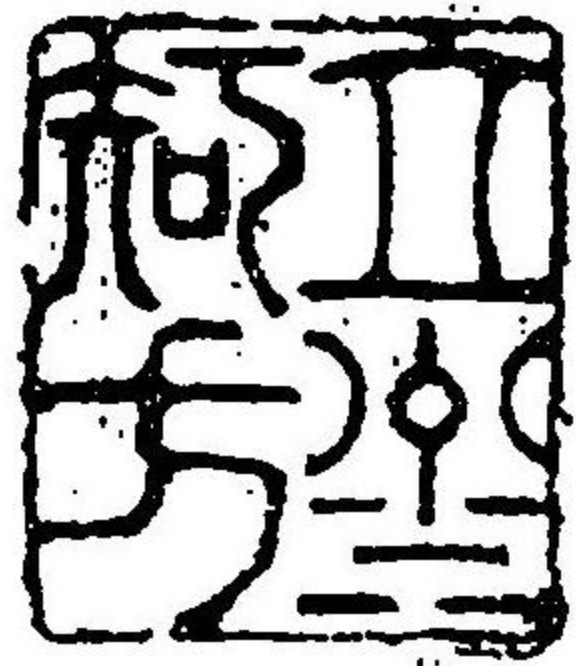
捍肘木

大斗

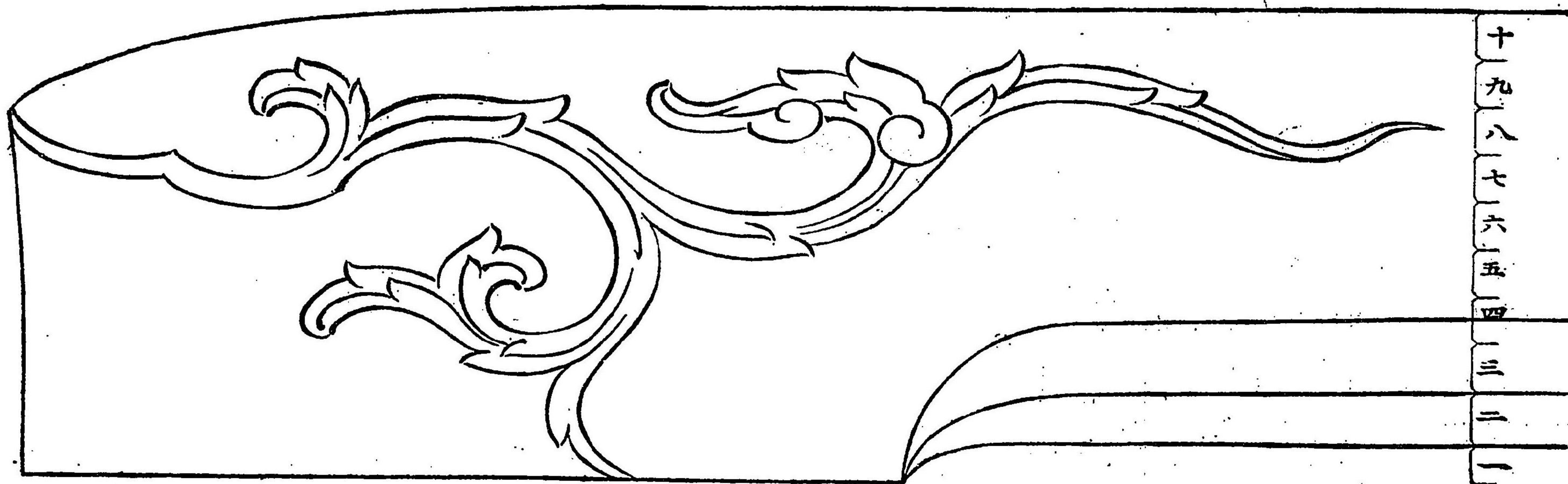
拳鼻



虹
梁



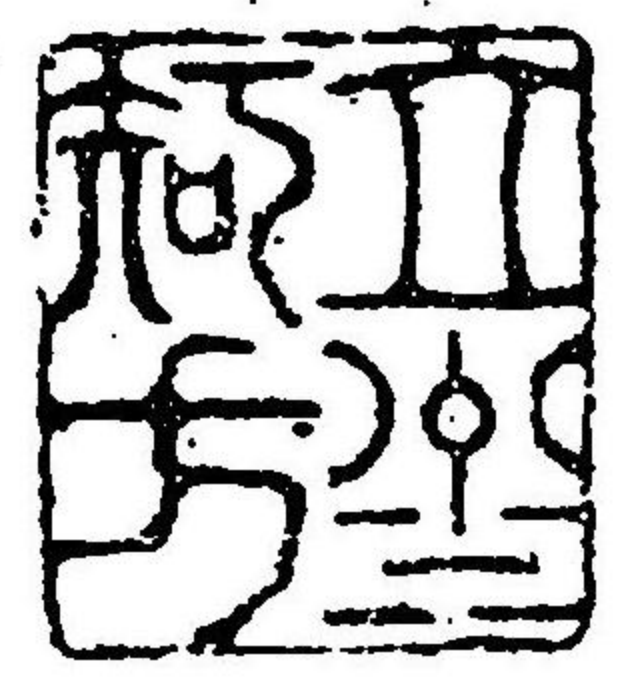
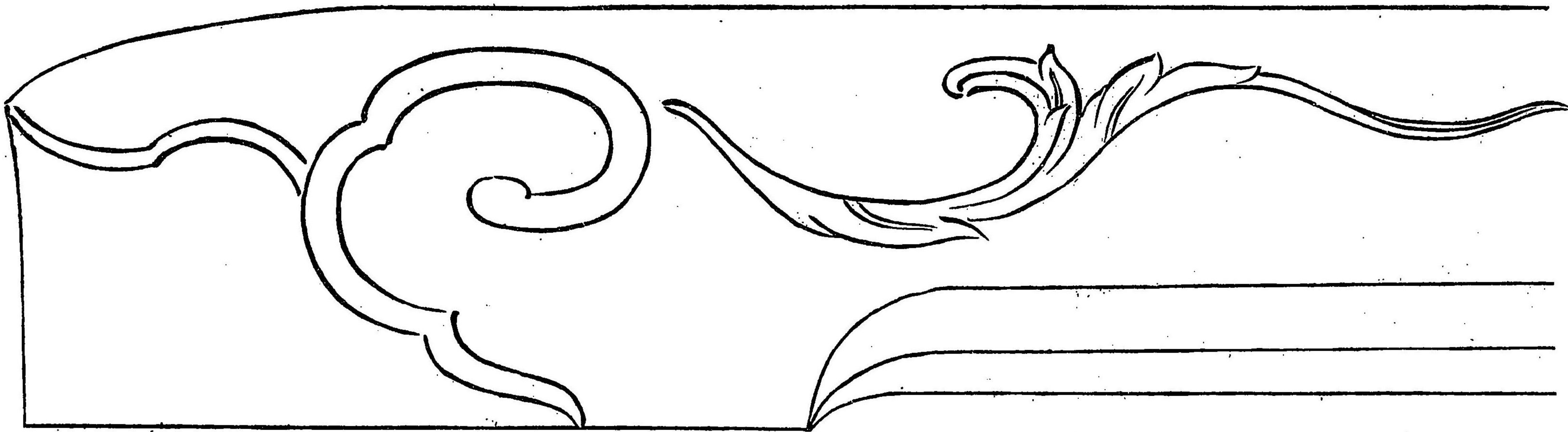
虹梁

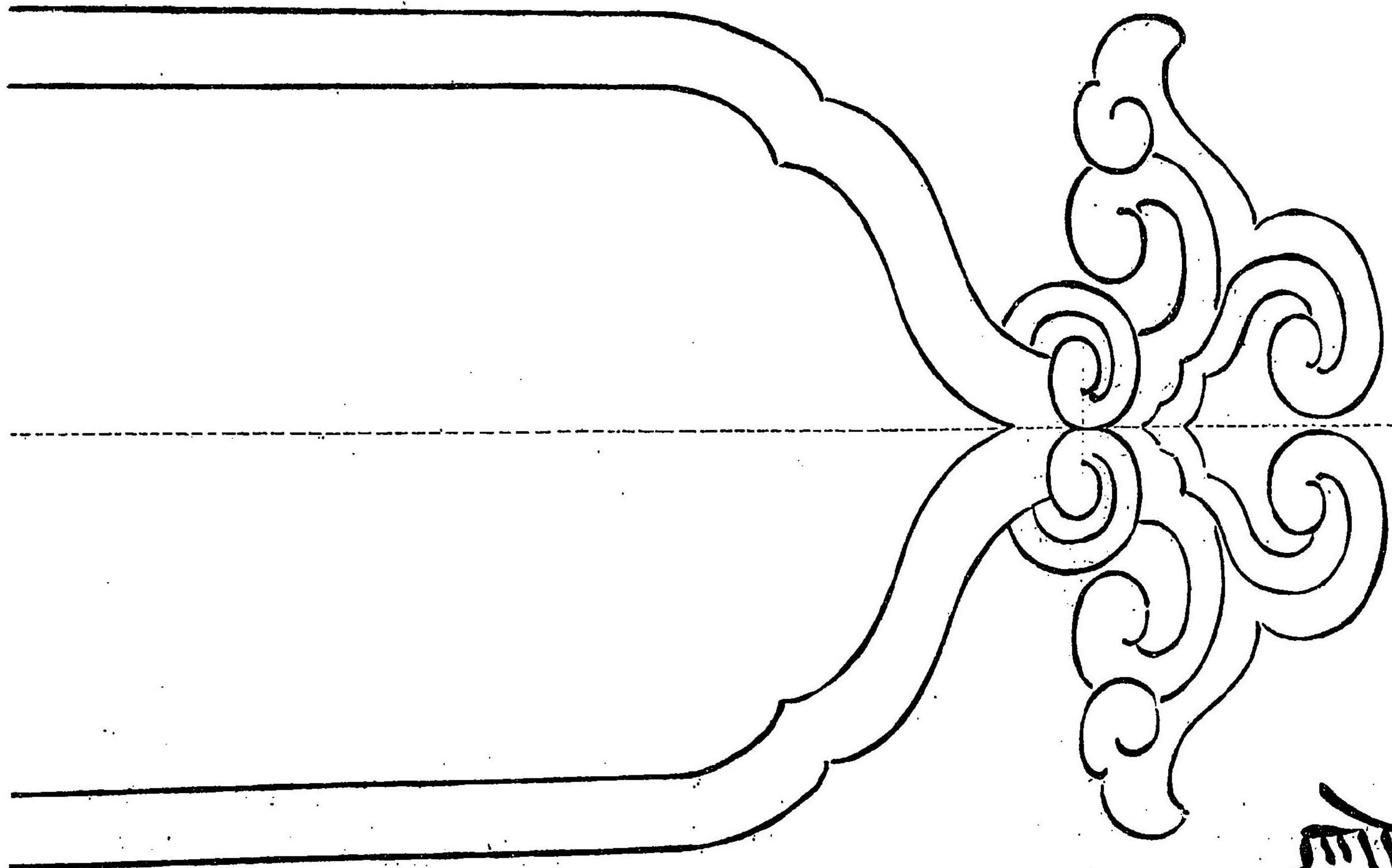
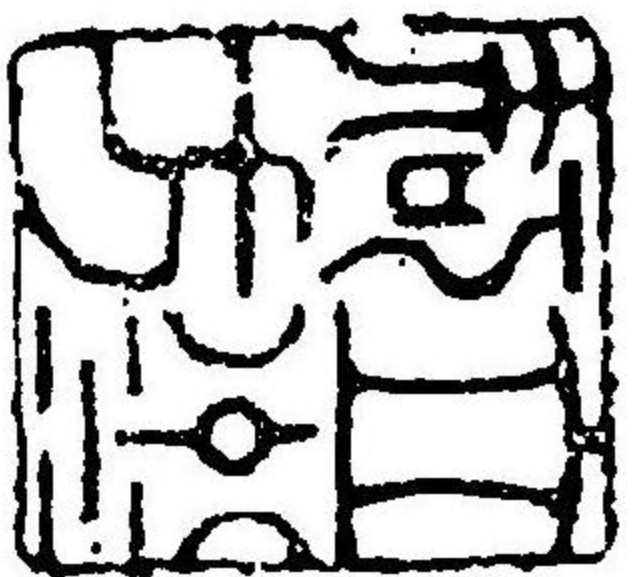


十九
八
七
六
五
四
三
二
一

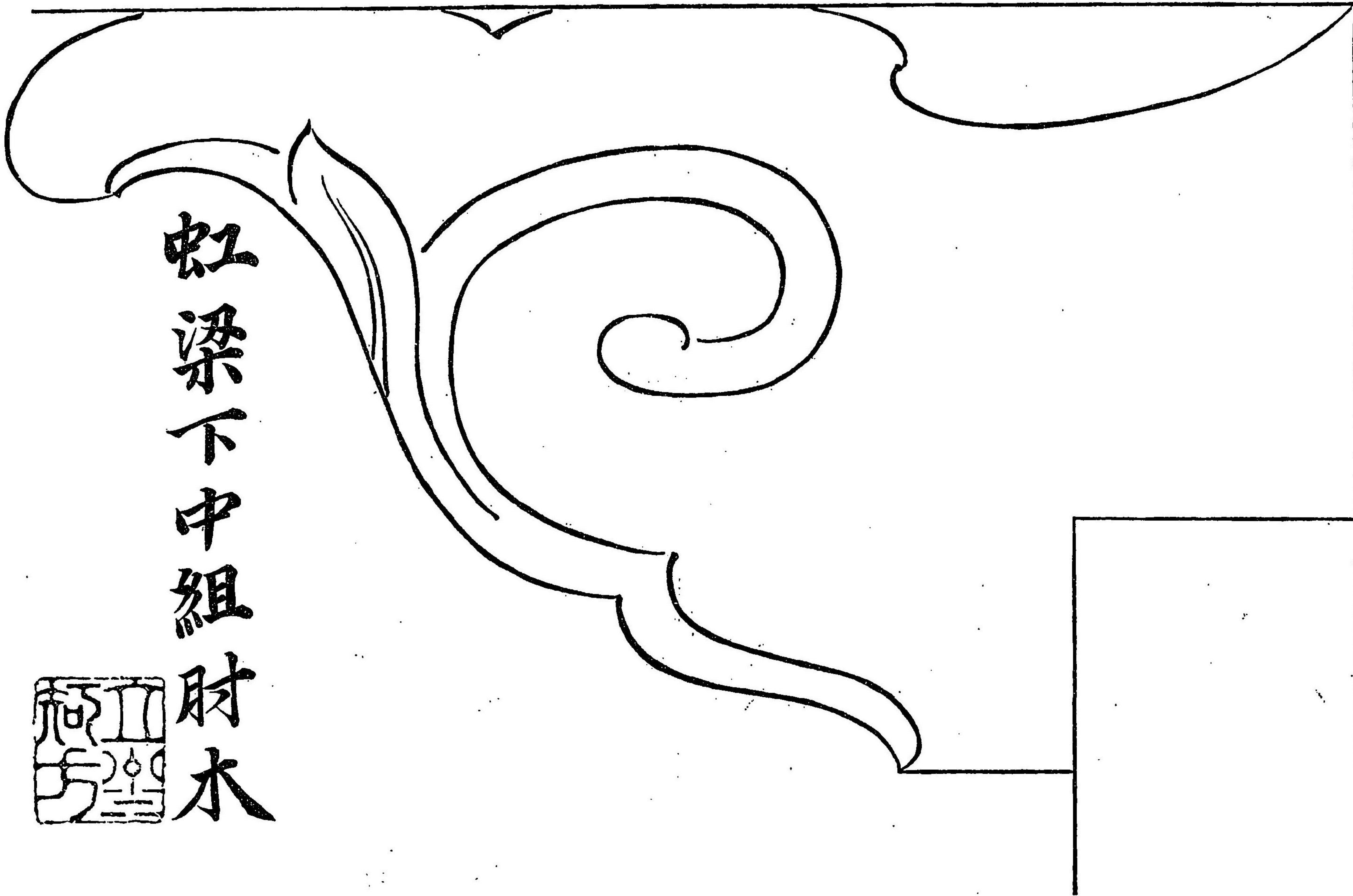


虹
梁

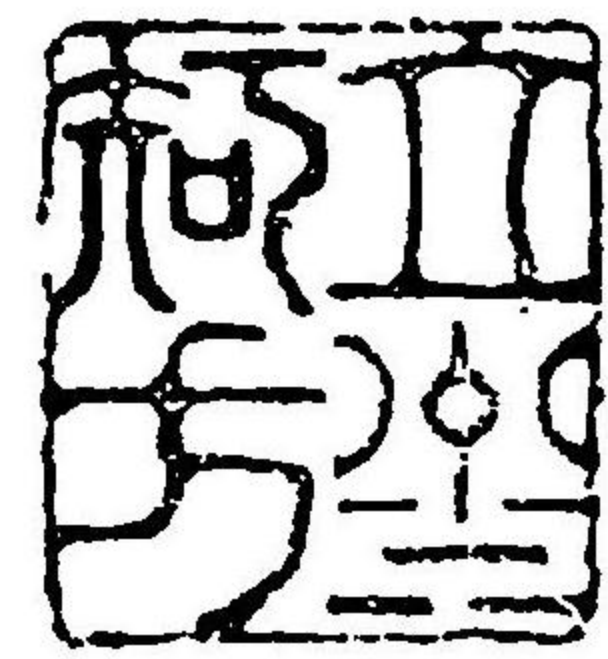




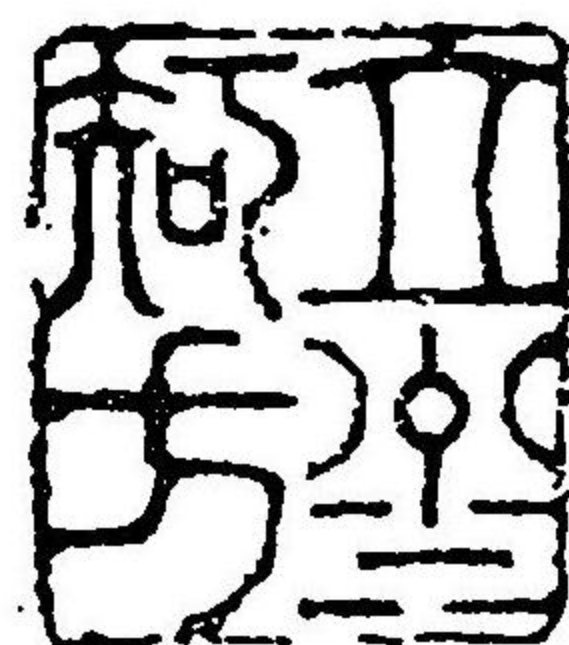
眉

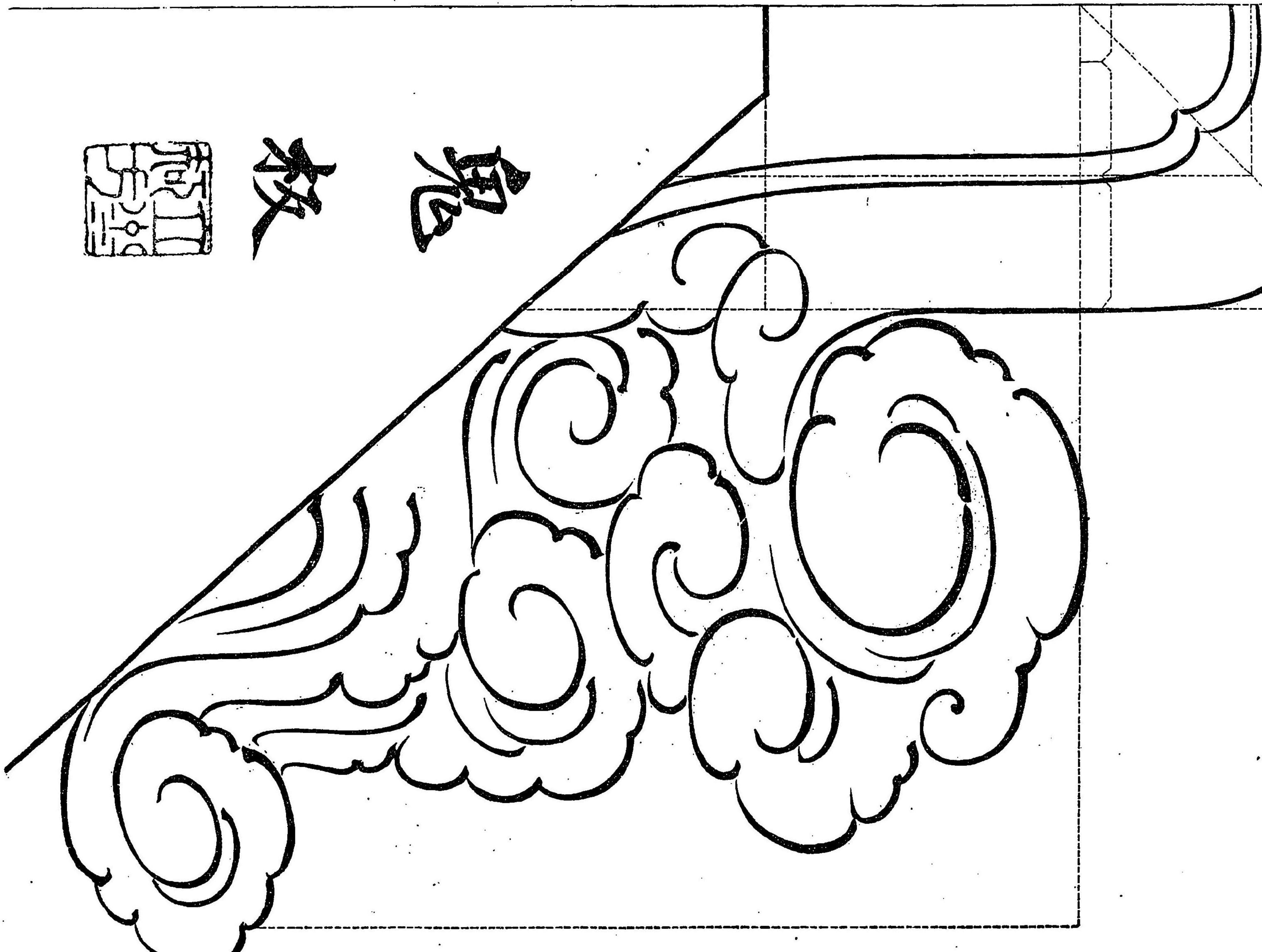


虹梁下中組肘木



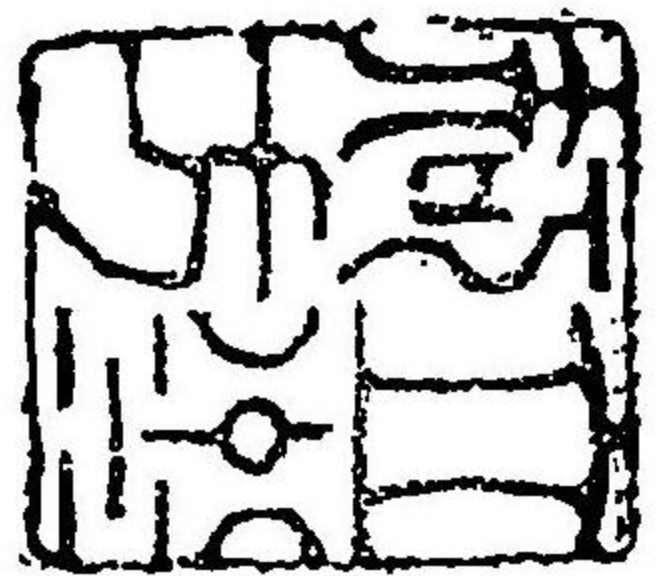
暮
股



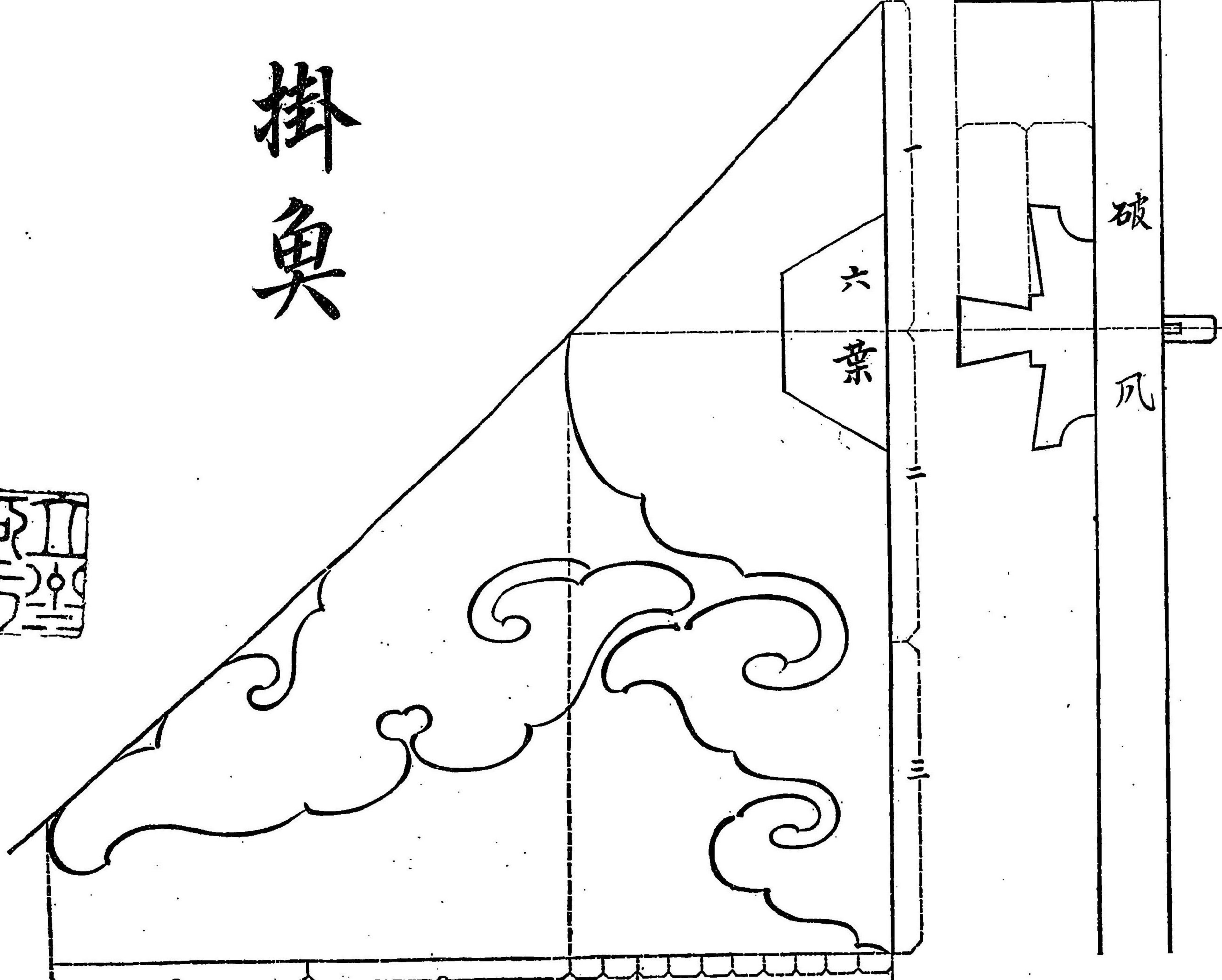
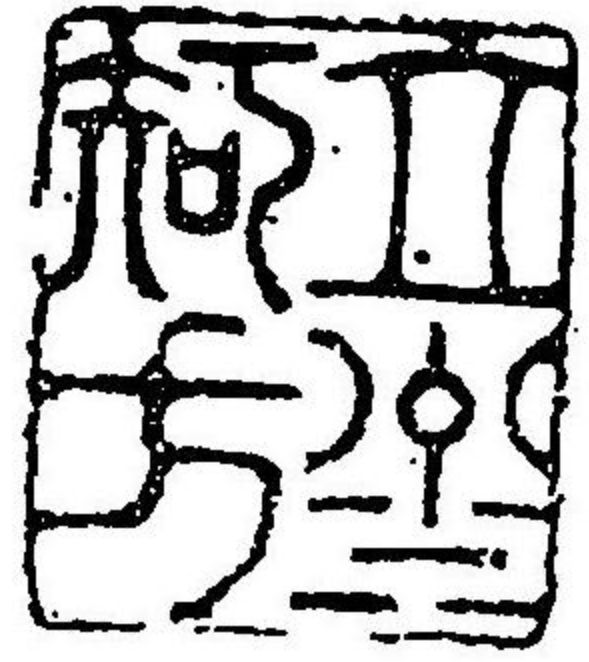


鬼

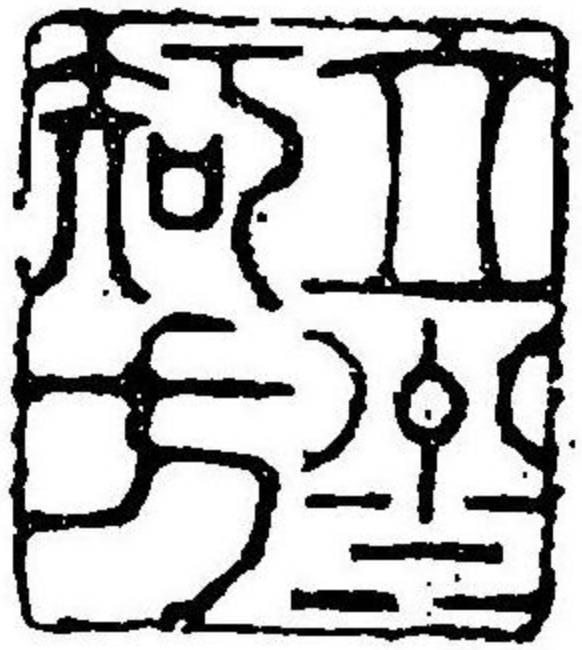
叔



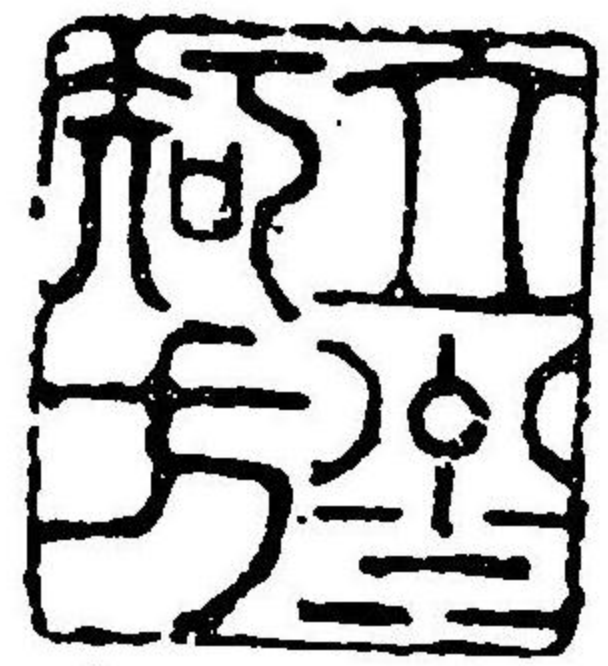
掛魚



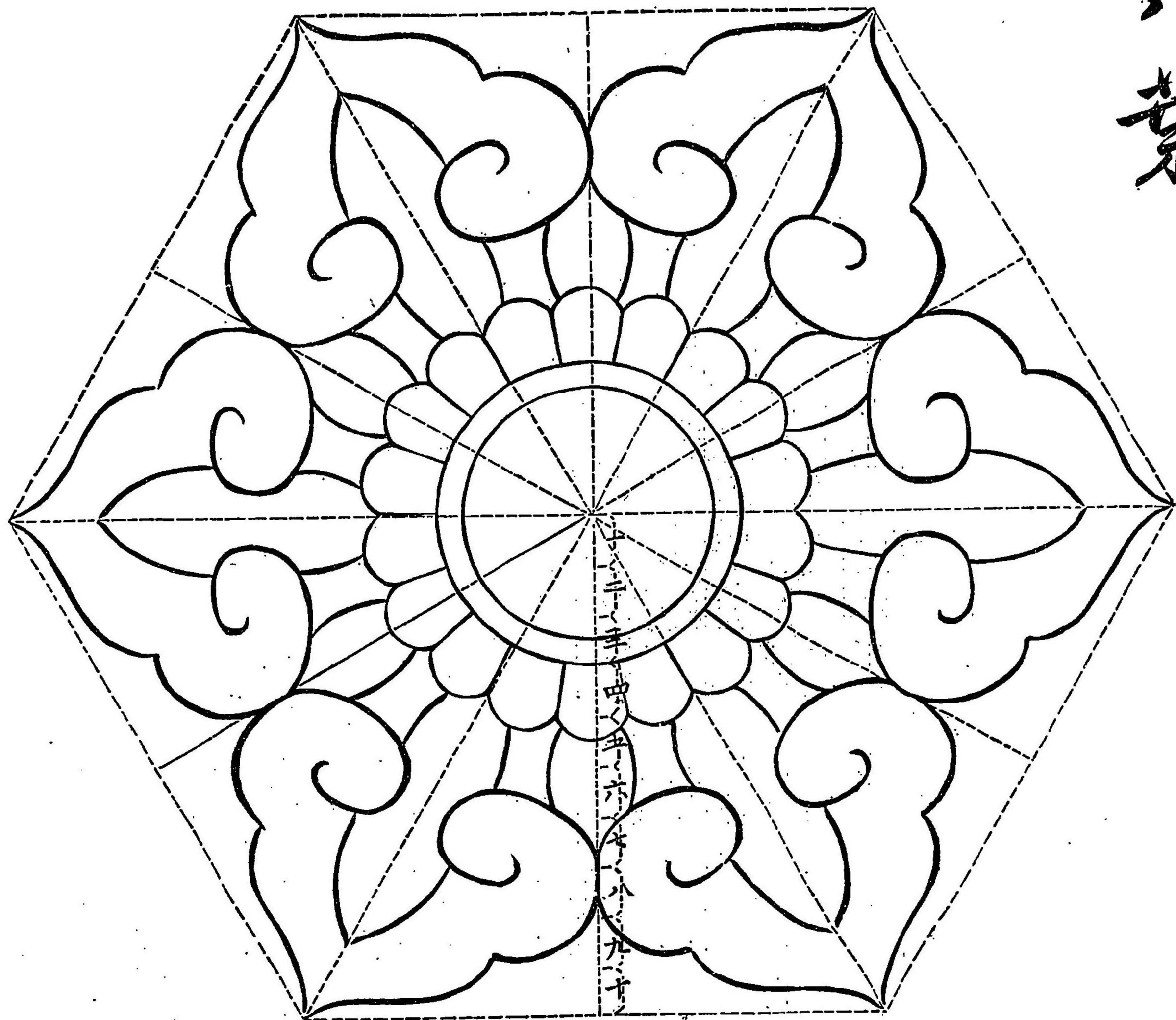
掛
魚



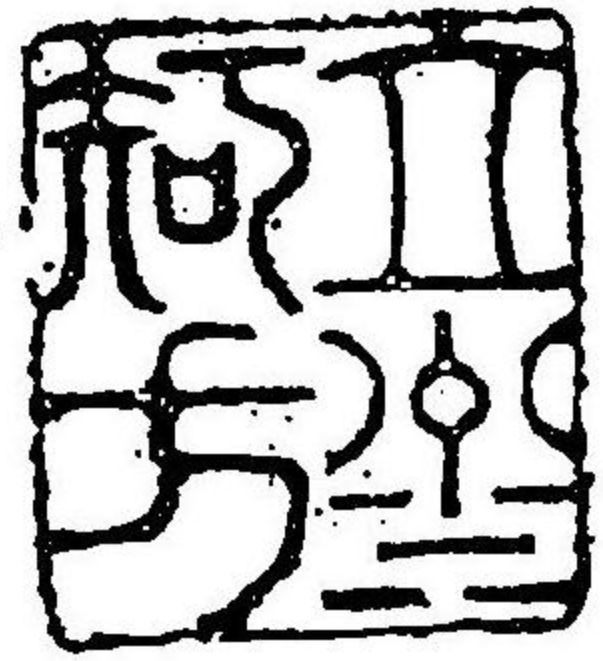
切懸魚



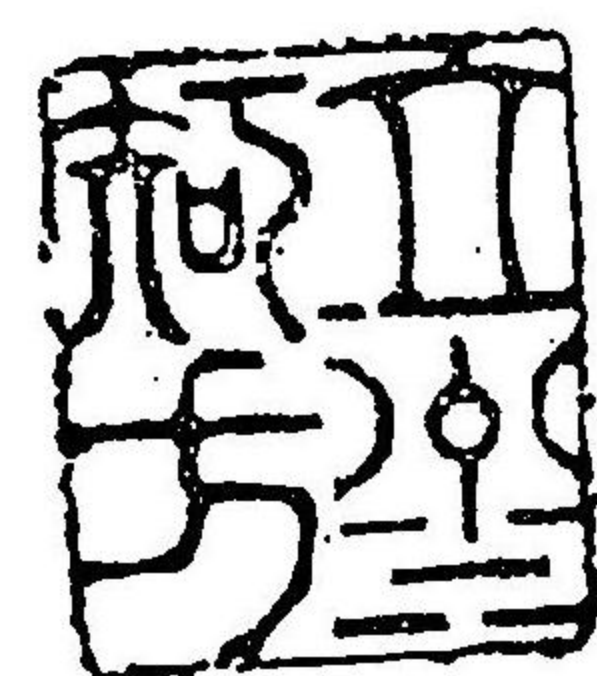
六葉



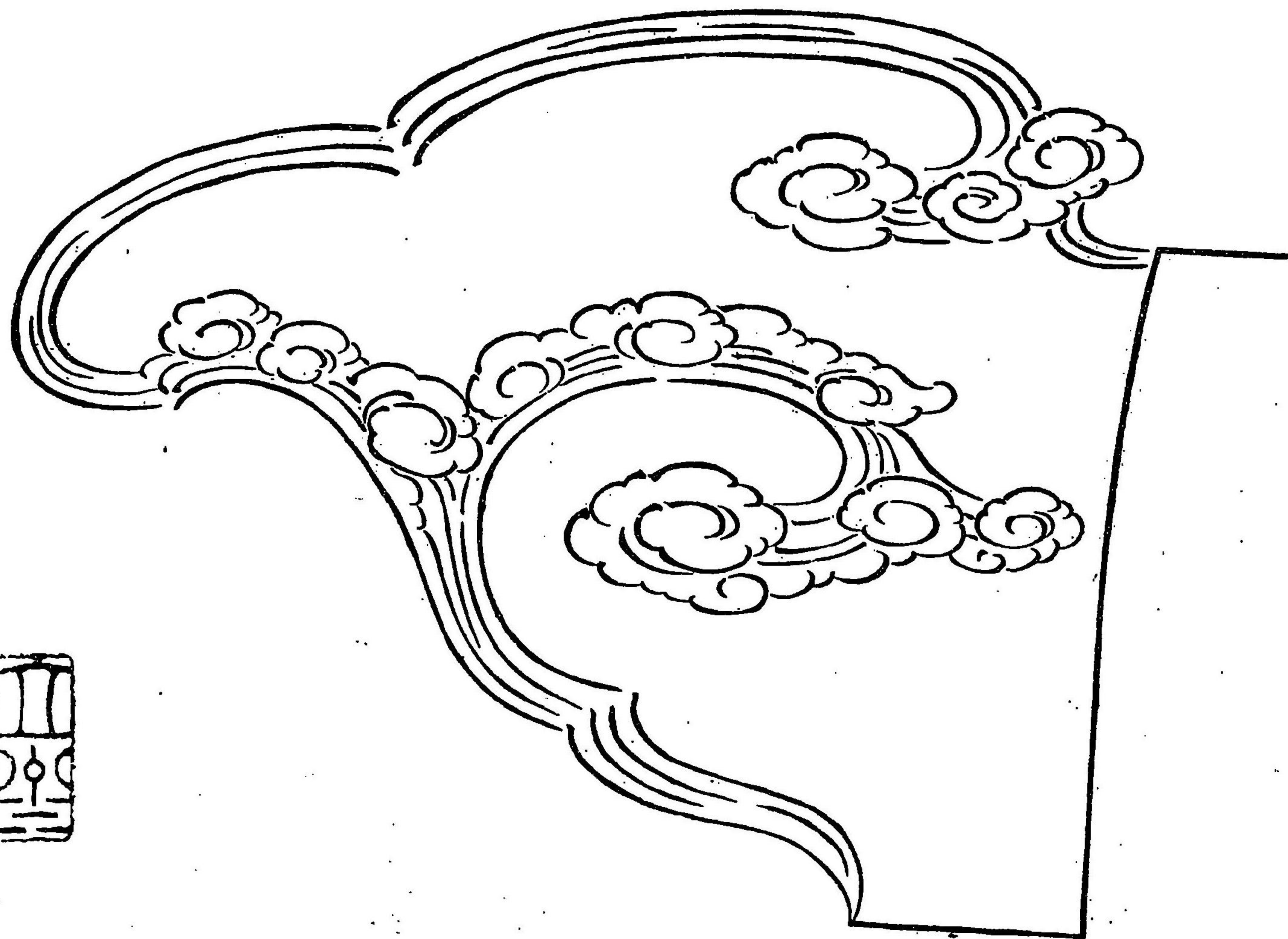
飛龍
想魚



合掌齋



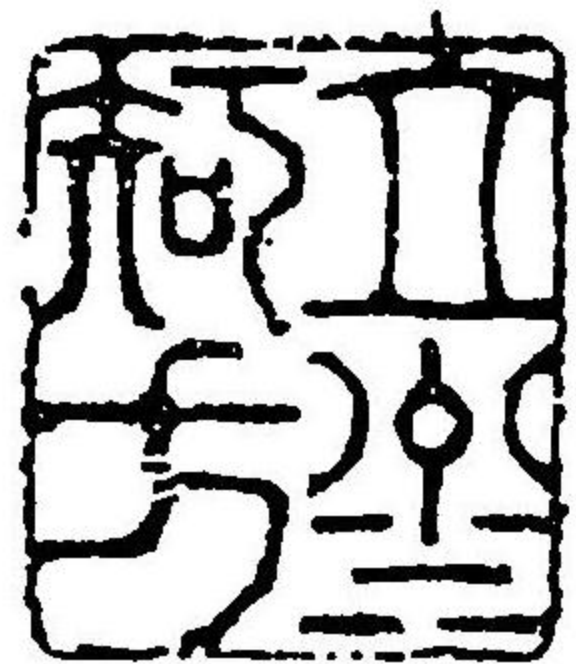
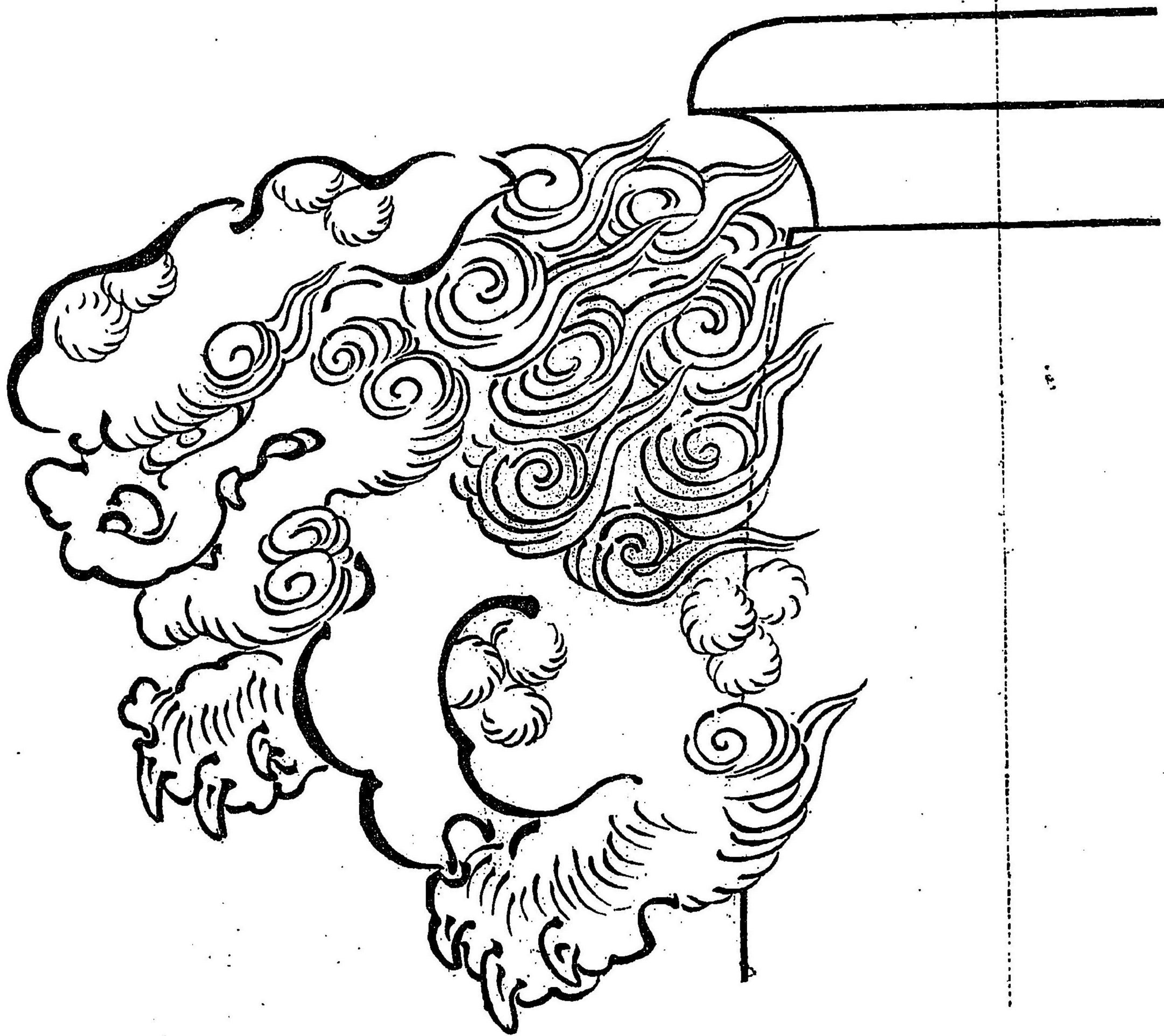
雲拳鼻



獅子木鼻



獅子木鼻



特送



明治二十七年七月廿四日印刷

明治二十七年七月廿七日發行

定價金六拾五錢

東京市京橋區瀧山町拾壹番地

編纂者 故立川知方

全市全町全番地

發行者 立川通雄

全市全町七番地瀧關舎

印刷者 島田用定

全市全町全番地

印刷所 瀧關舎

64
253

64
353

立川流匠家雜術

倭繪樣集

築貳號

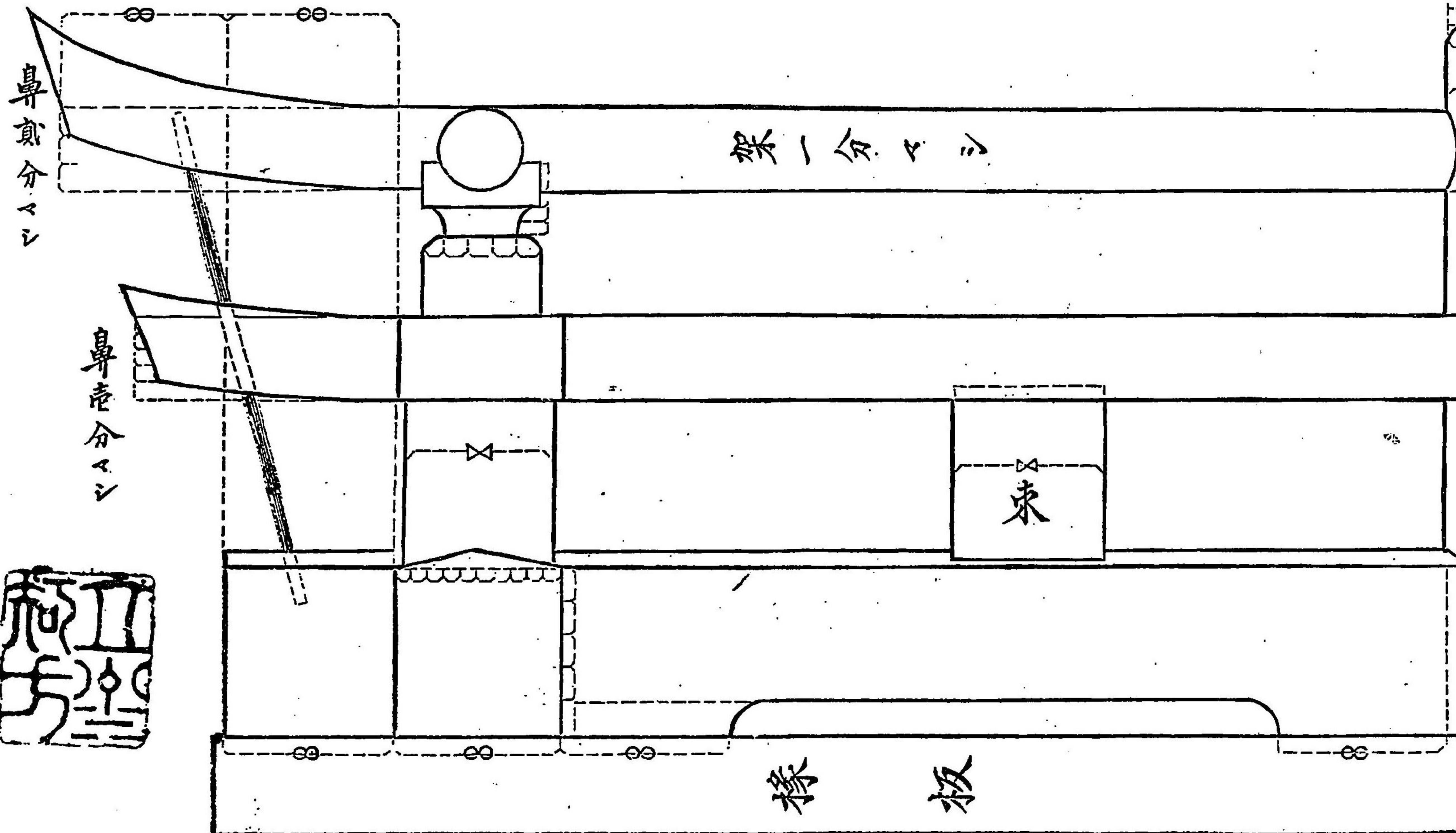
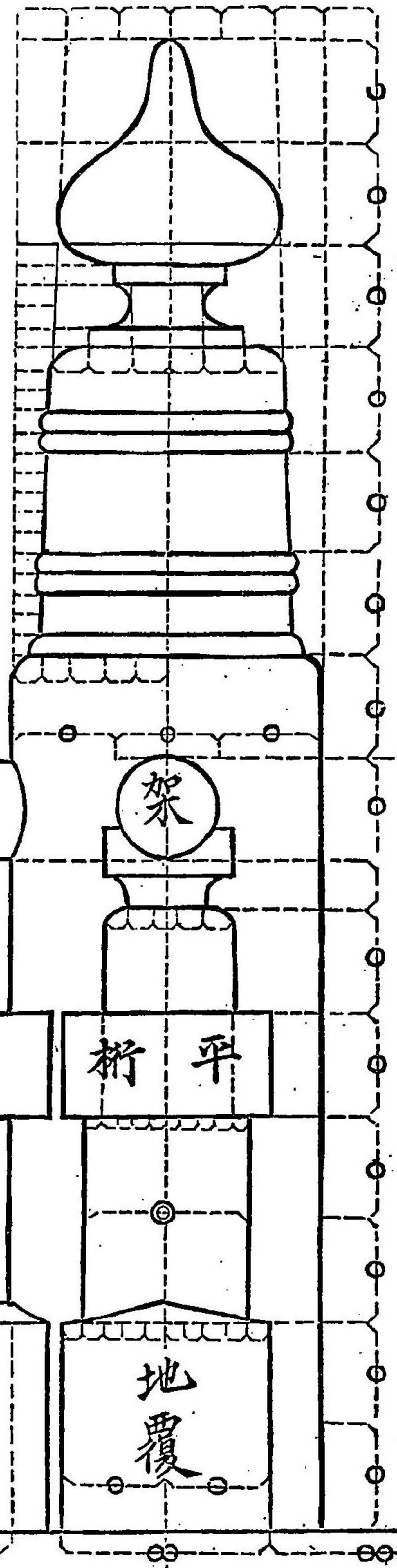
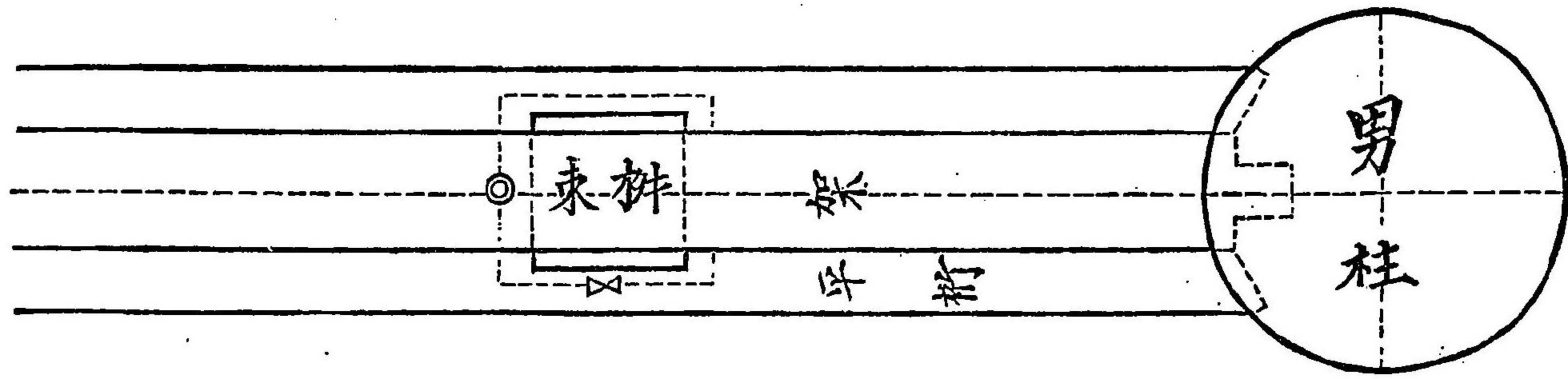
けりかき

古く曰く良匠は規矩を離るるに能はずと宜るる哉凡そ物あり
 には必し則ち規矩の常にして斯道に於ては殊に然りとす故を
 以て夫れ古くは本邦建築の業頗る進歩の域に達せし者あり
 ども多きは家傳秘法と稱へ廣く人に傳へずる許さず同種
 の著書も亦少く流布せし難し其載する所雜駁疎策しと雖其梗
 概を述ぶるに過ぎずいかなる子弟の模範も亦完人後真力
 と努め日子を費すもの多しとて實際に便かるる者甚か稀しか
 るに最可惜限しとて我曾祖立川小丘衛尉曆の昔に在り
 工匠の技、精巧な所謂立川流を以て稱せし者も亦傳へ
 ざる今に至るに其の久しき及び猶隆盛を極む古來我邦と
 雖も亦石造等の建築之を以て流布し一朝先頃の如き震災
 に遭ふの不幸ありんか其毀壞亦將に測れざらんといふ故を以て
 因襲の久しき皆木造を常用せし是れ今も乳土氣候等に適
 合せるに職由り故に祖父知方従来の著書多くは簡略に
 失し且其形極小之が應用を計るる頗る難き業ありんか
 憾み積年種々の繪様を上梓せんと欲し終に果せず
 て歿するに度予其意を承け大奉書及美濃紙に彫
 大して方圓曲直等墨繩を加順次出版せし要は直に之
 を印地に用ひしむを得るに在り庶幾は斯業後
 人の此須臾に關し可いざる懸懸も亦於て益
 餘師ありん

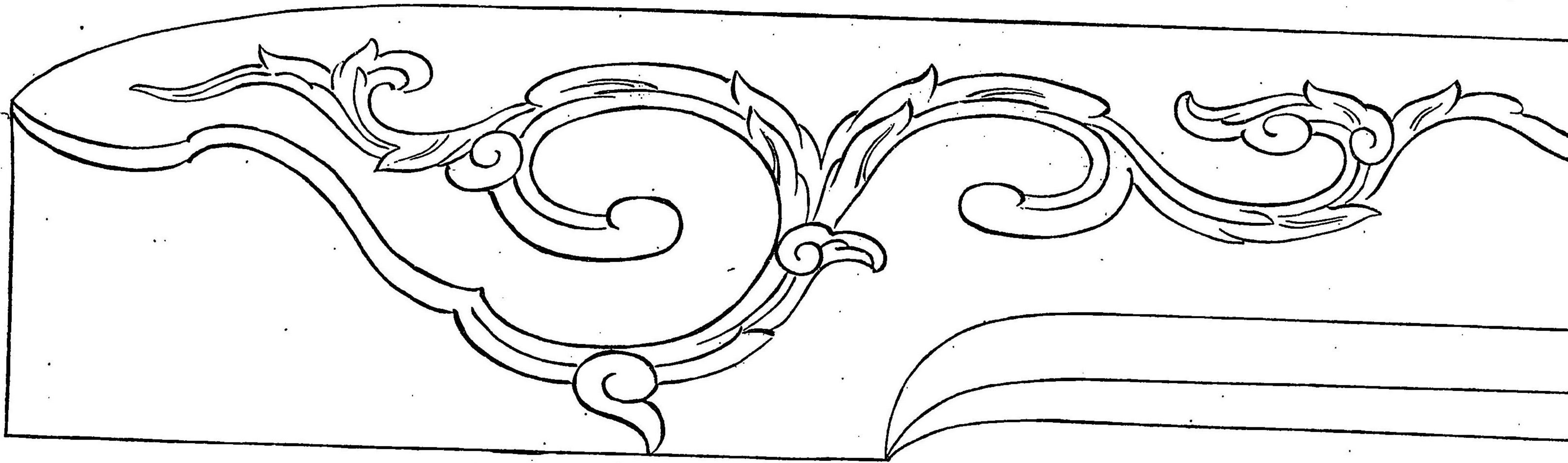
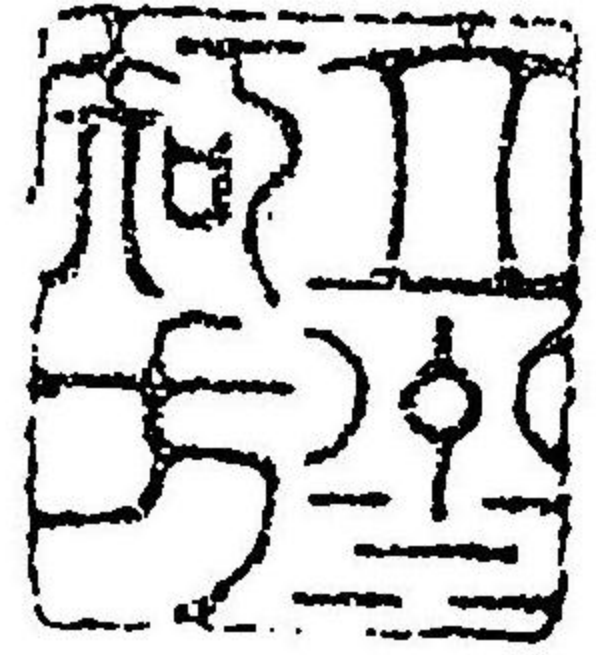
甲午小暑序

立川通雄談

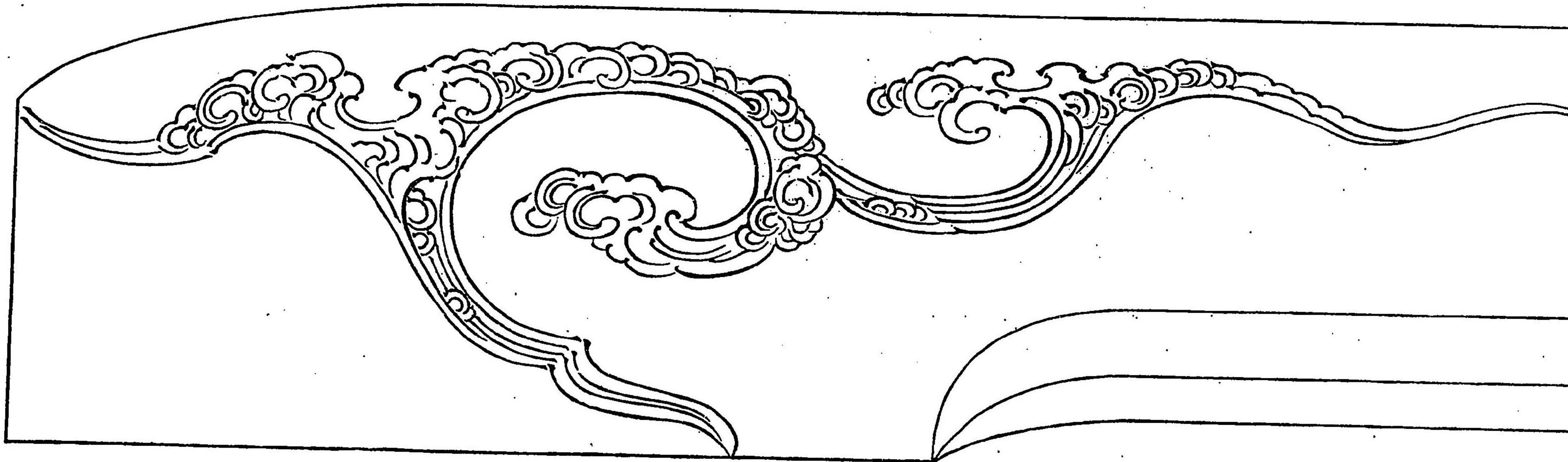
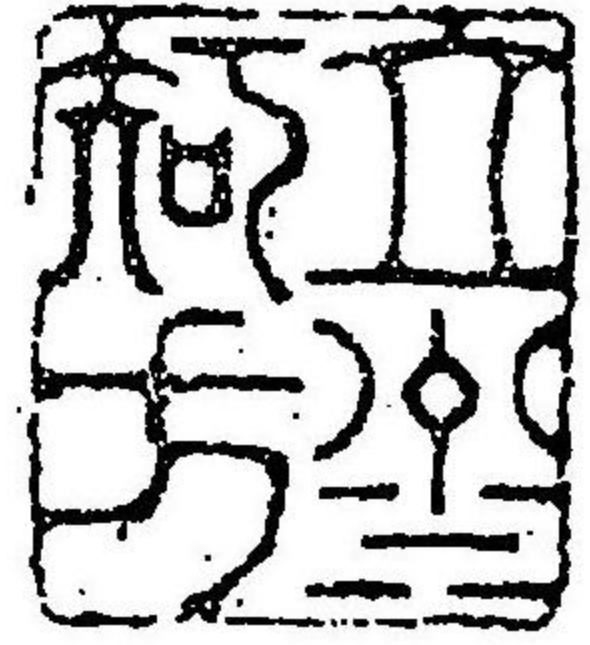




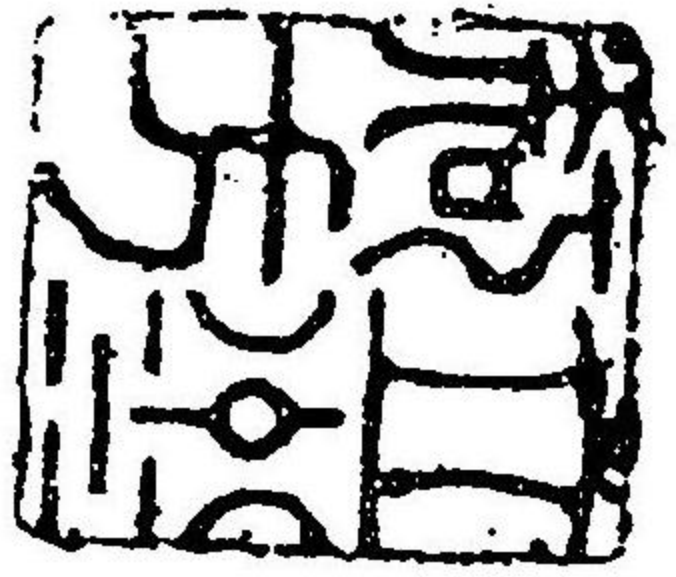
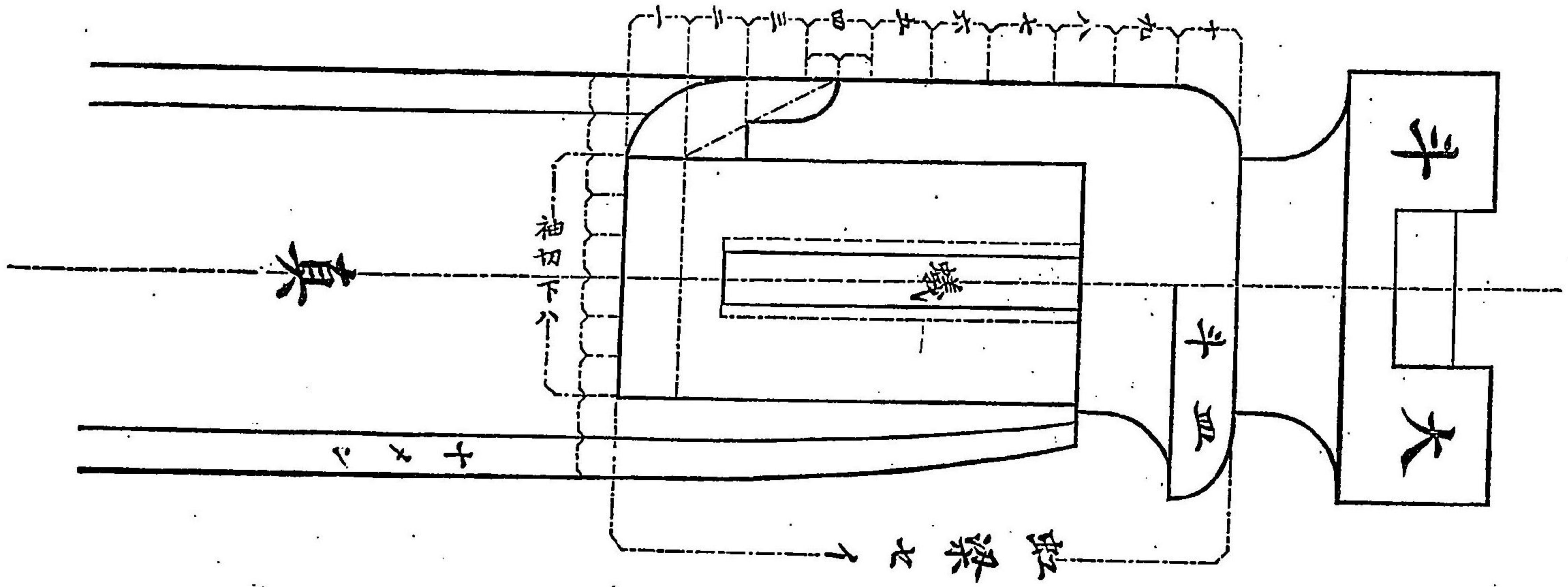
虹
梁



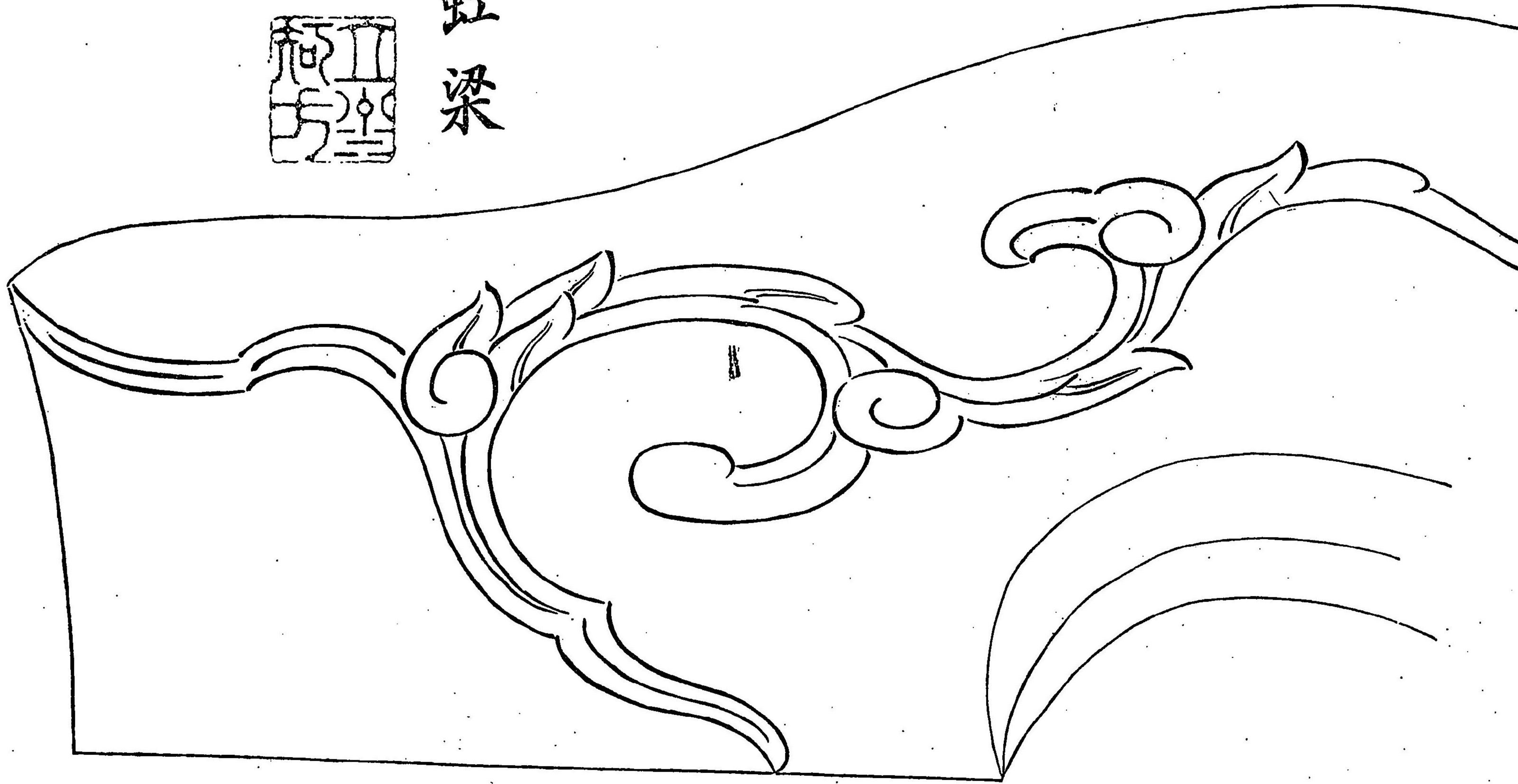
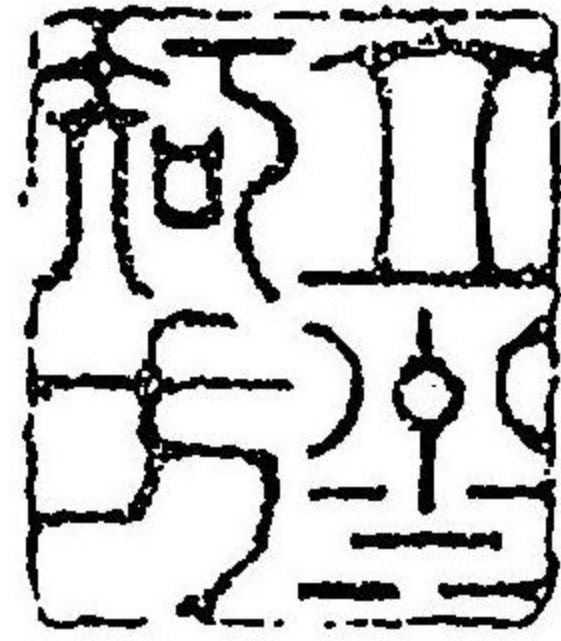
虹梁



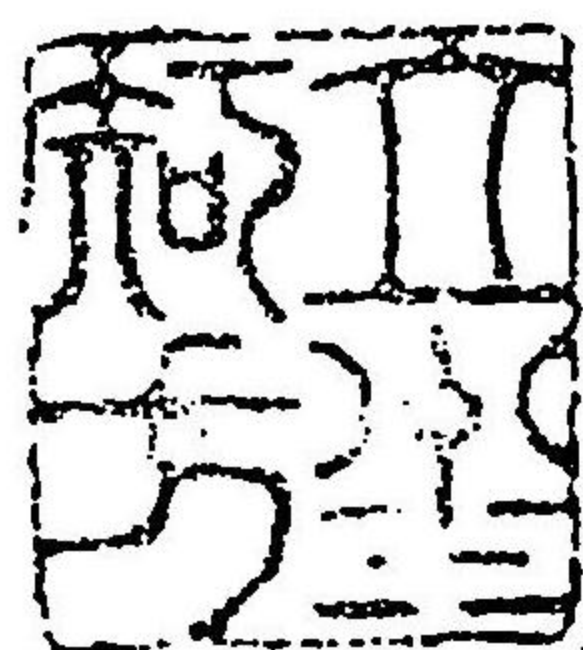
輕梁水口割ノ圖



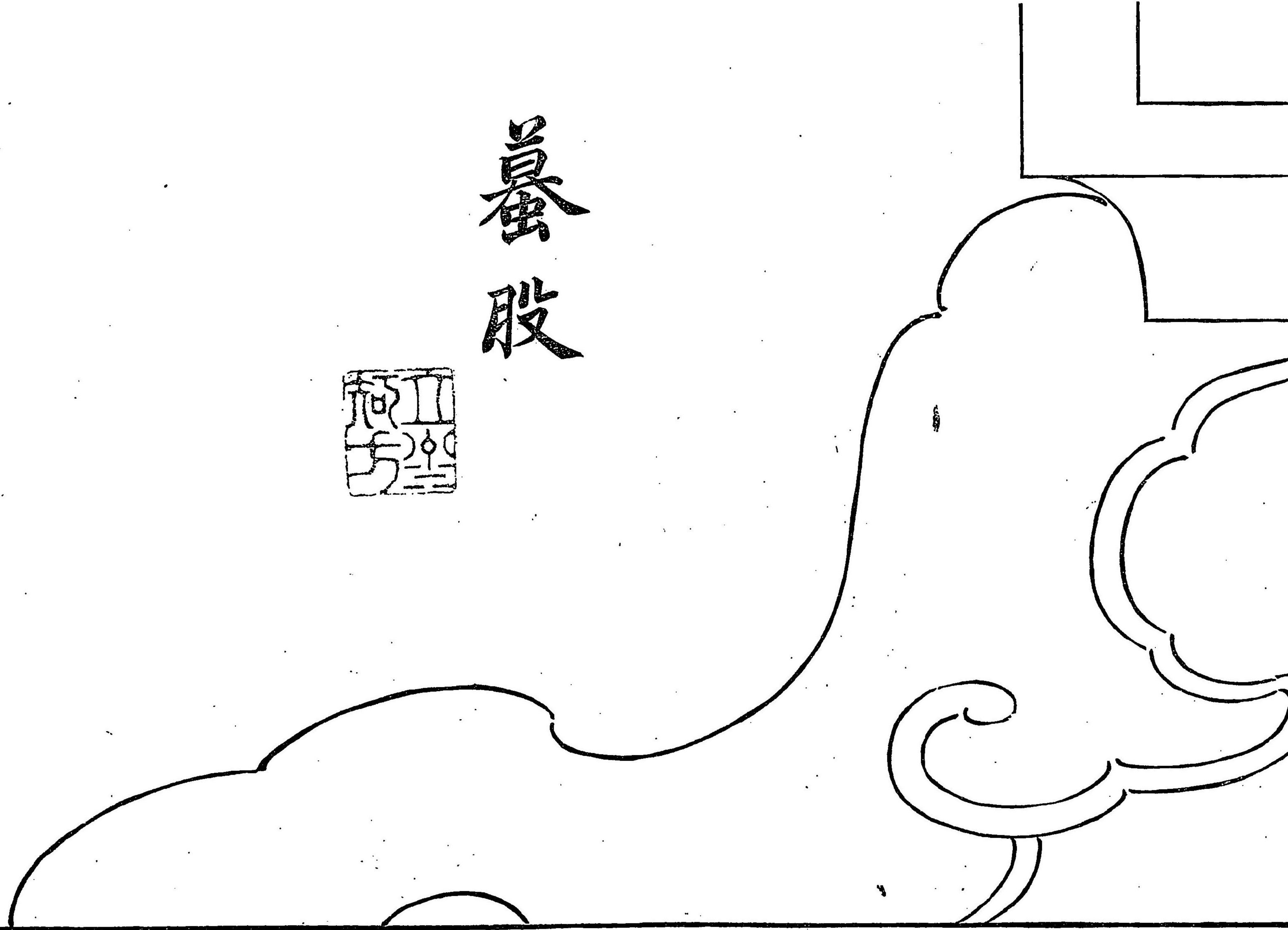
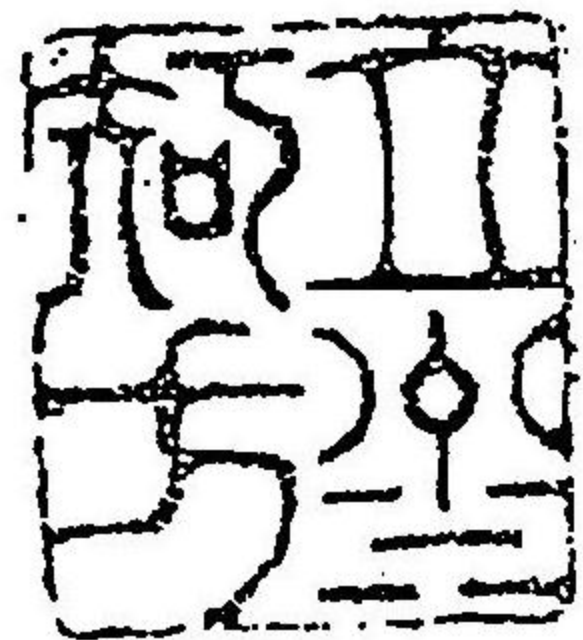
海老虹梁



墓股

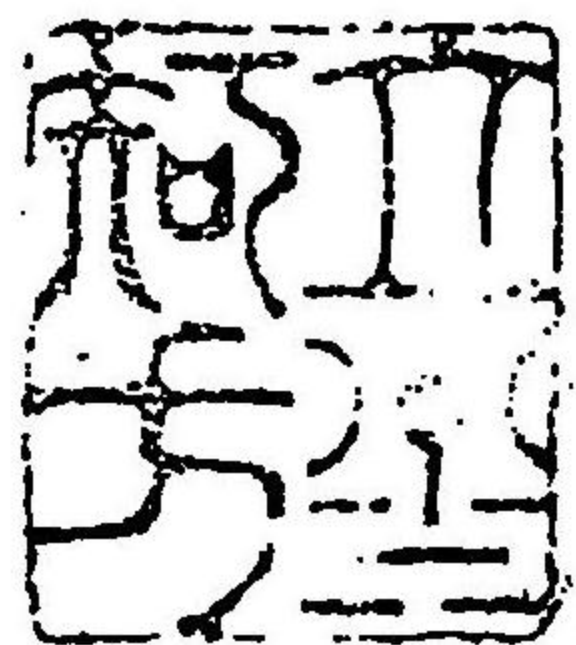


暮
股





雲拳鼻

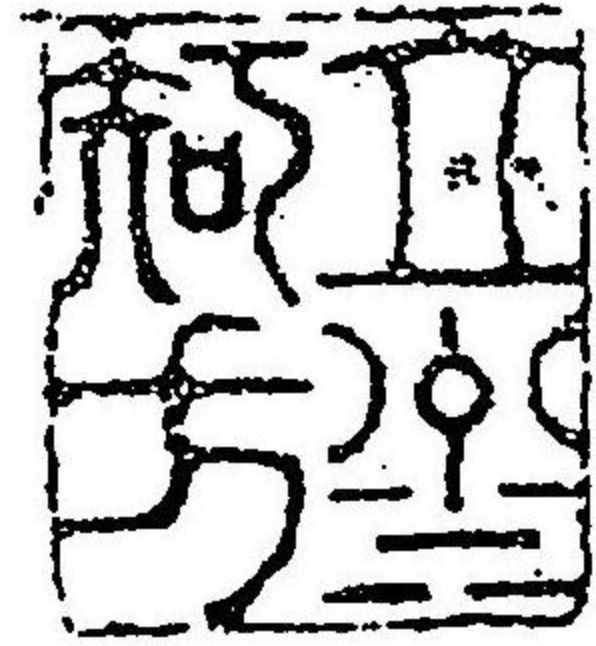


腕木鼻

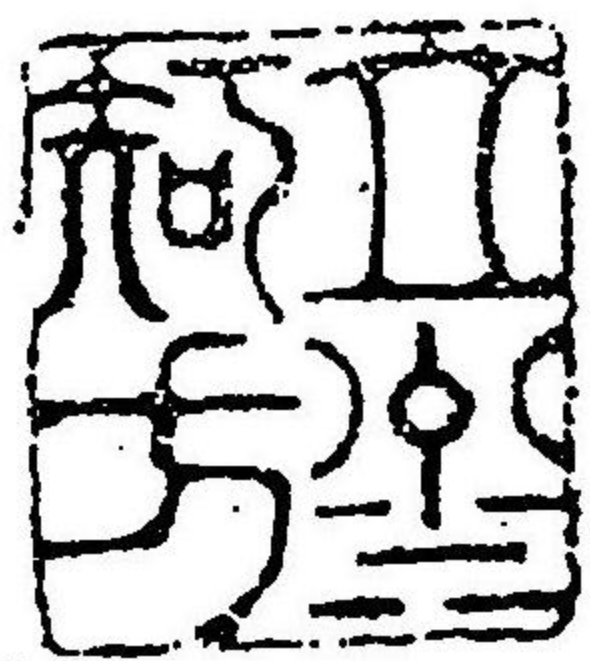
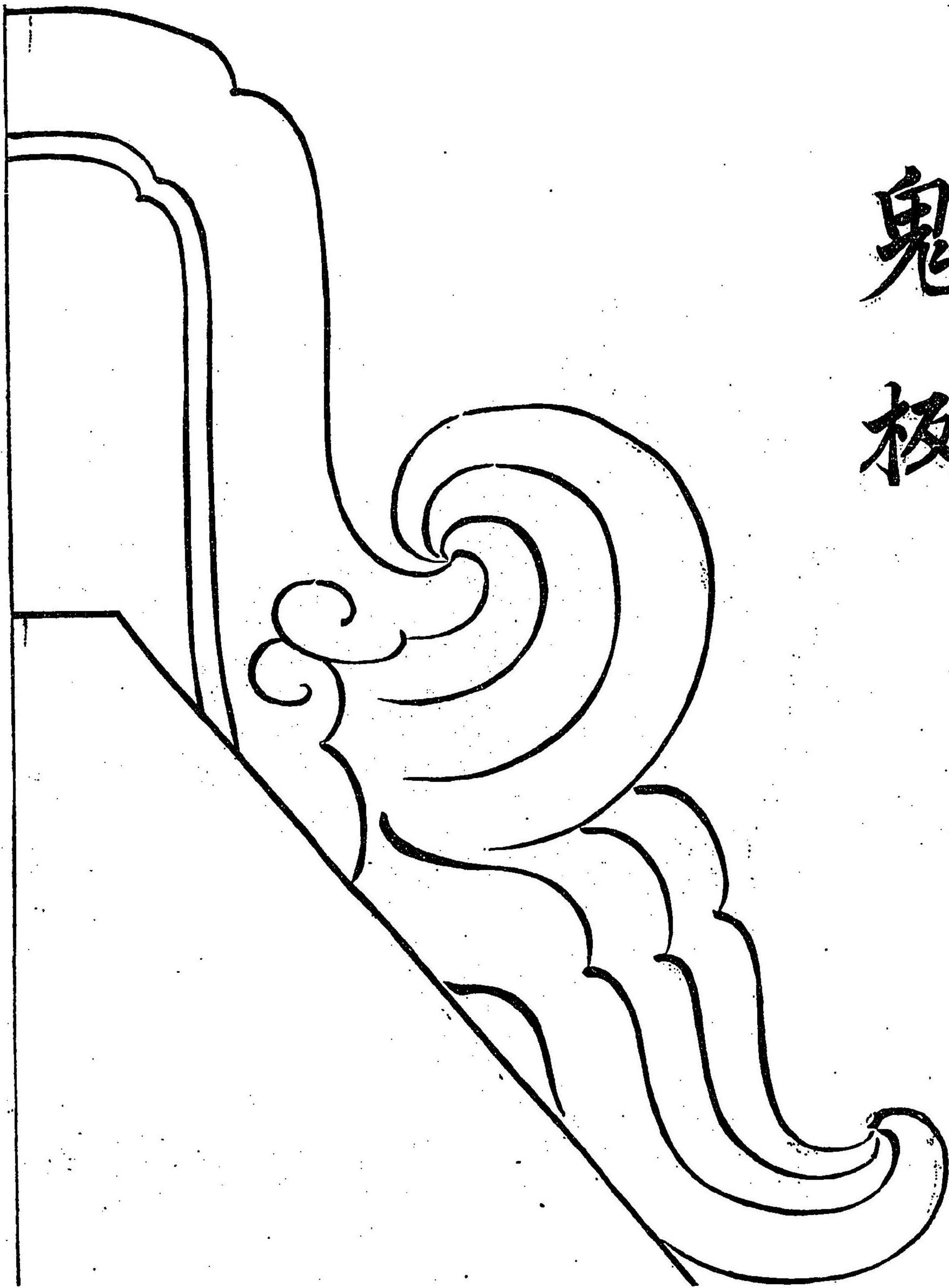


鬼

板



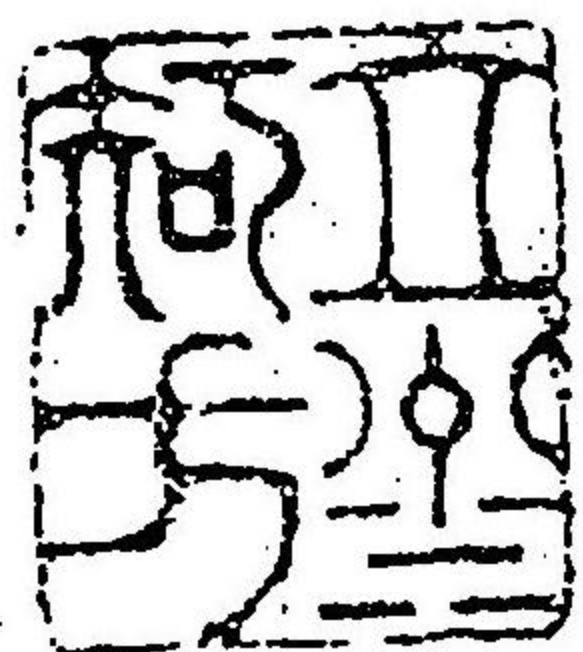
鬼板



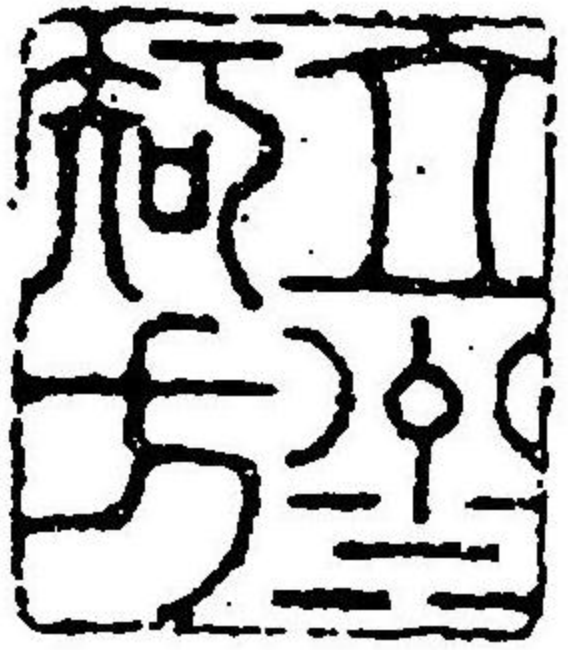
破風

鼻

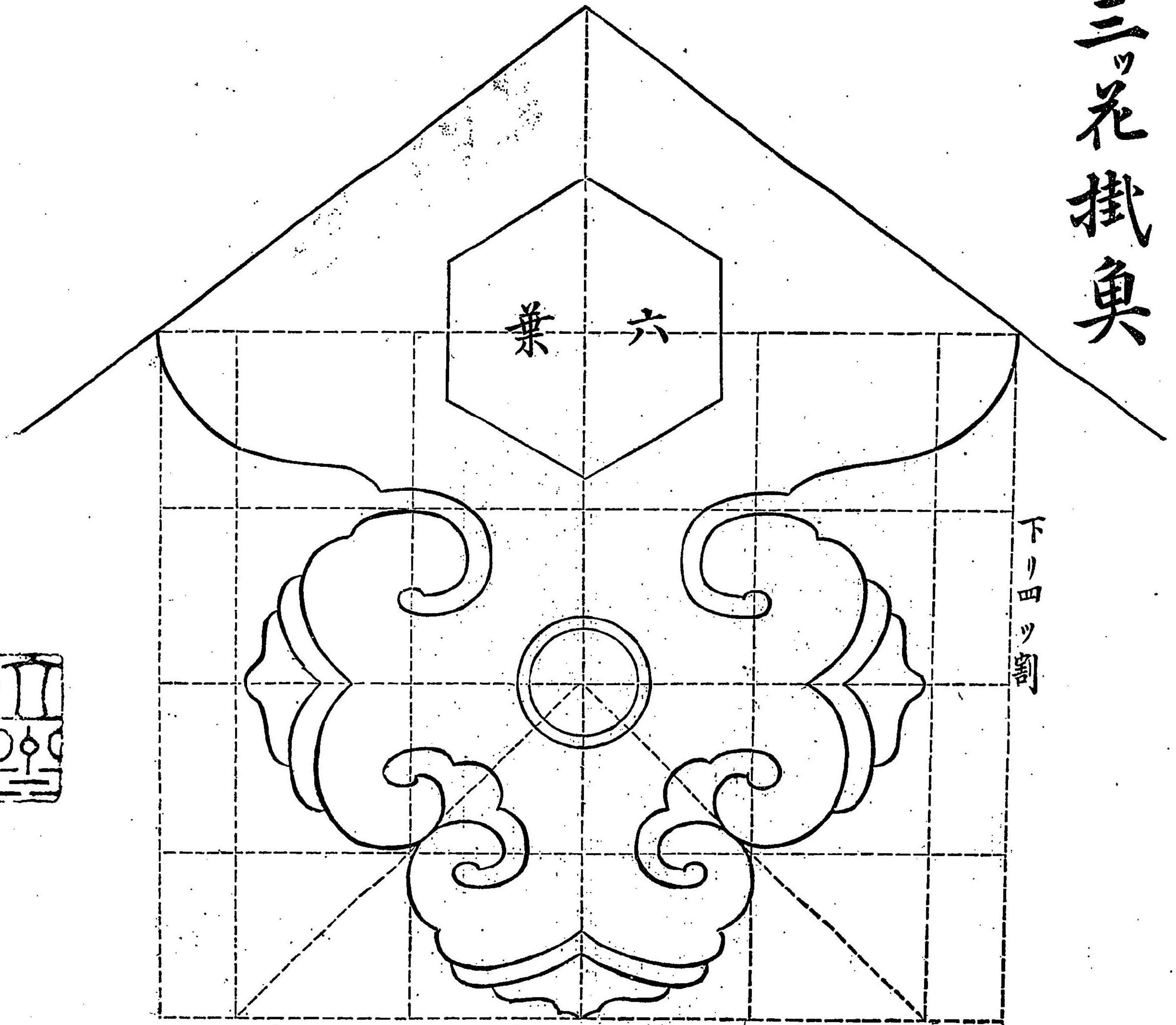
渦若葉



下り掛魚

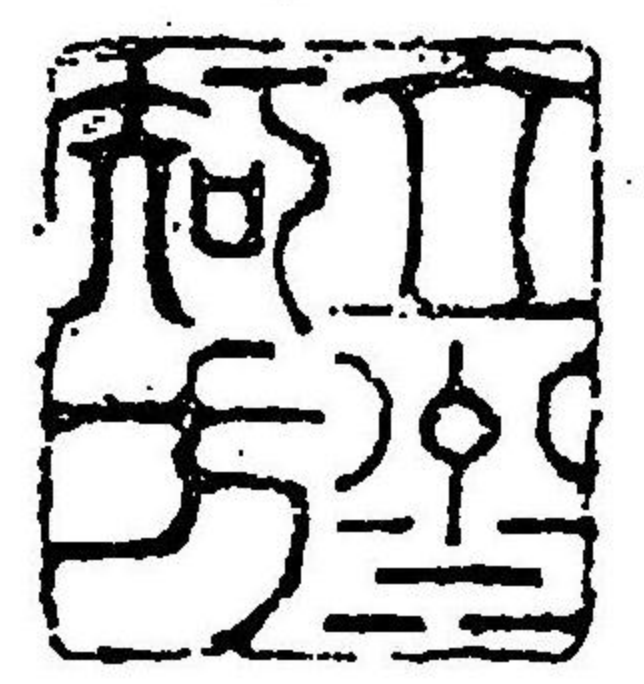


三ツ花掛魚

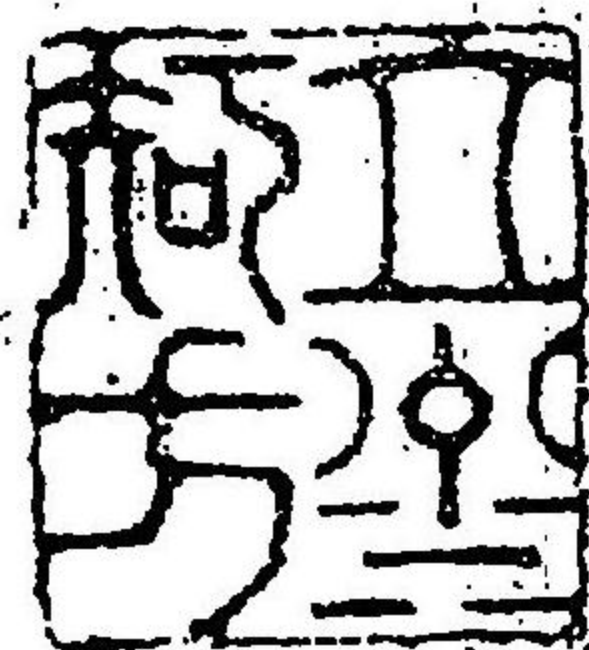
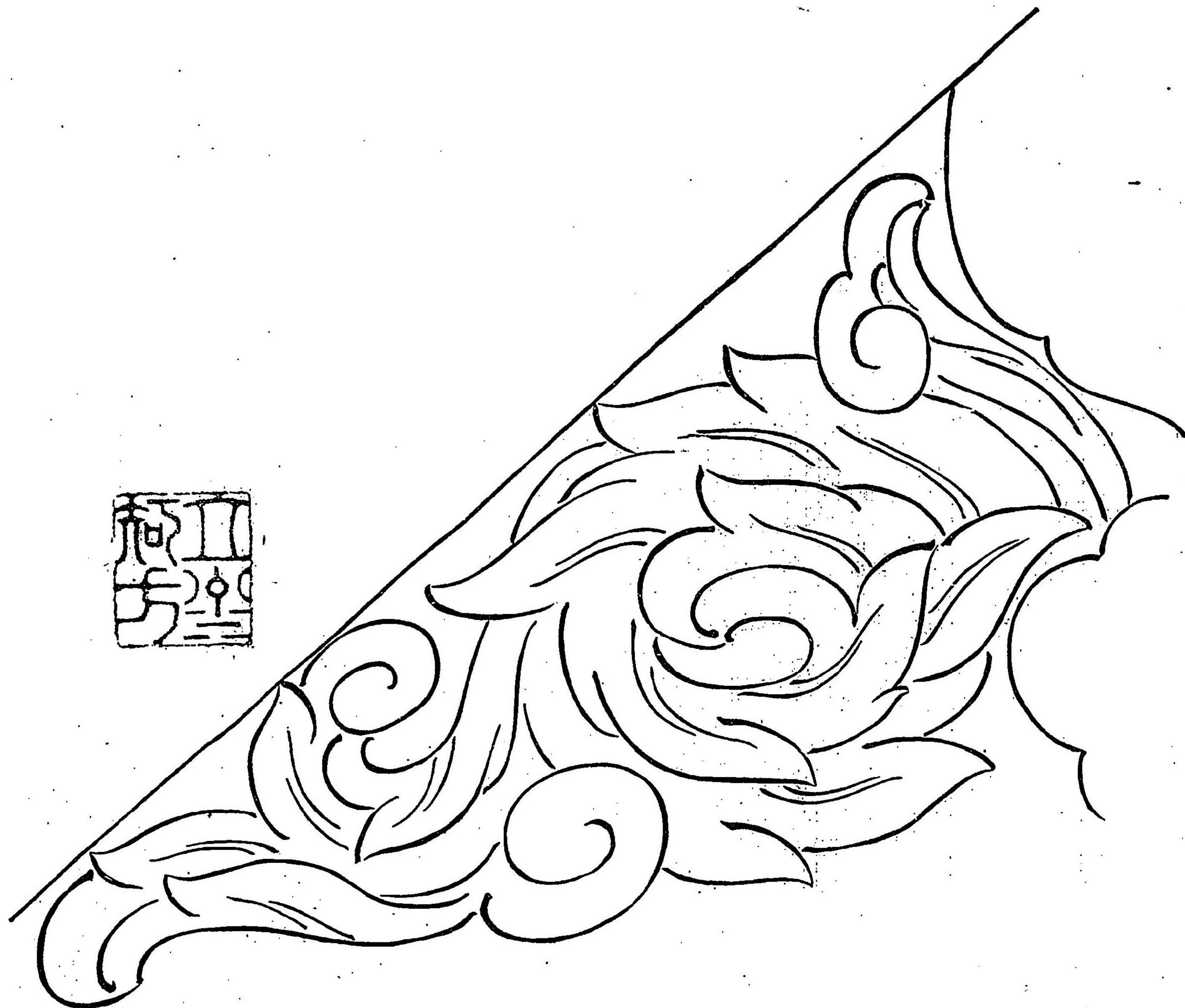


下リ四ツ割

五ツ割

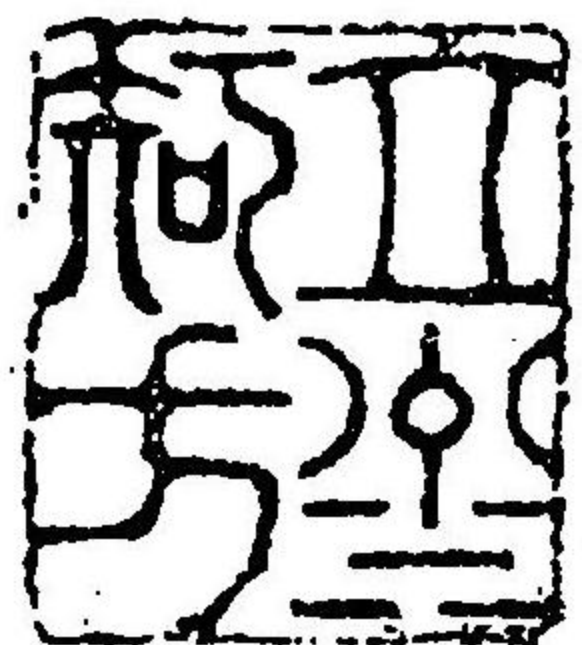


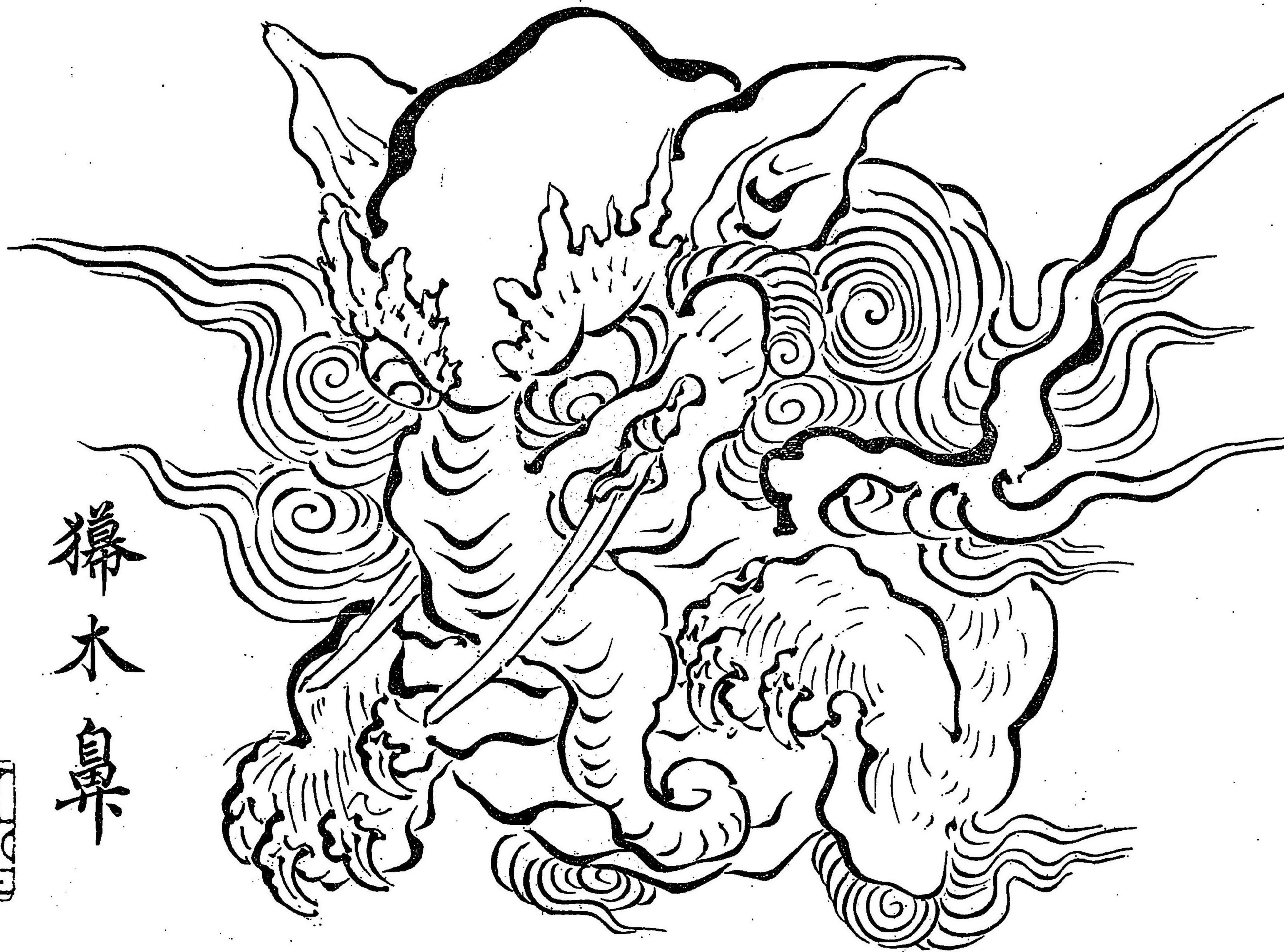
掛魚



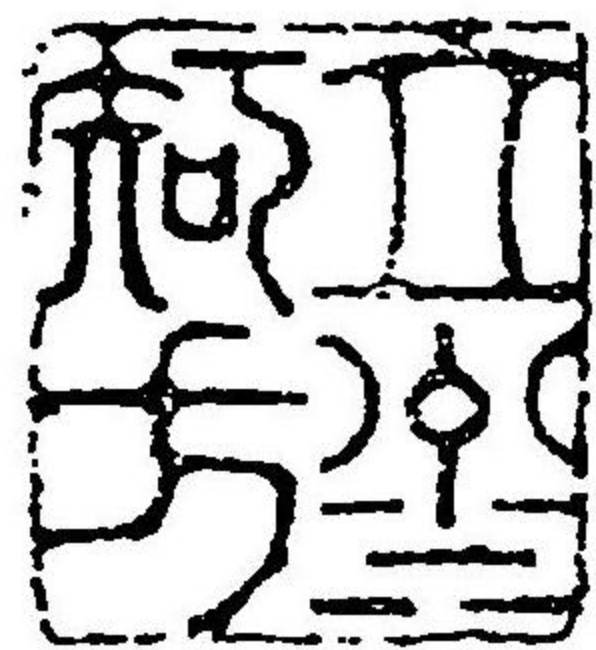


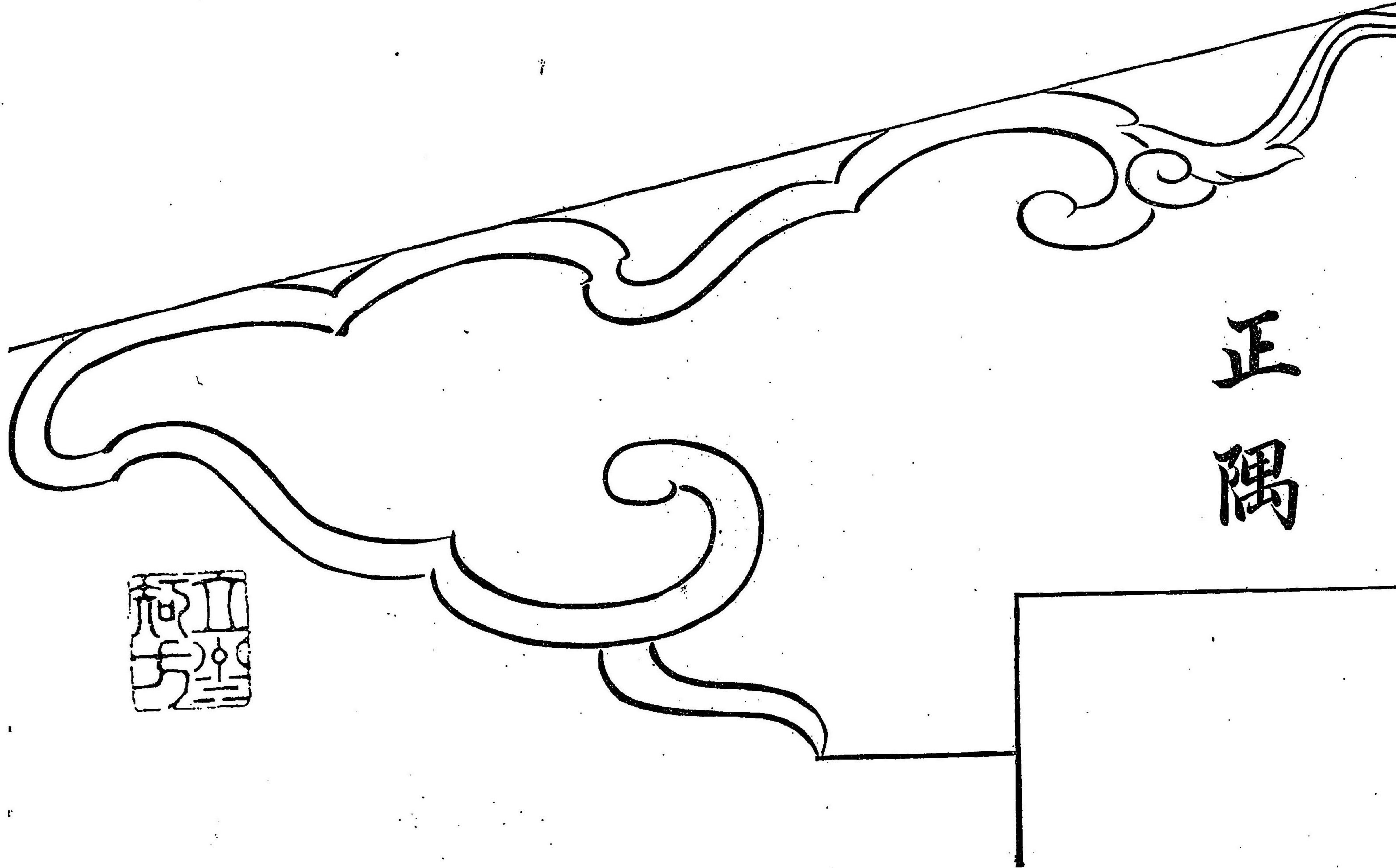
拳鼻





獬木鼻



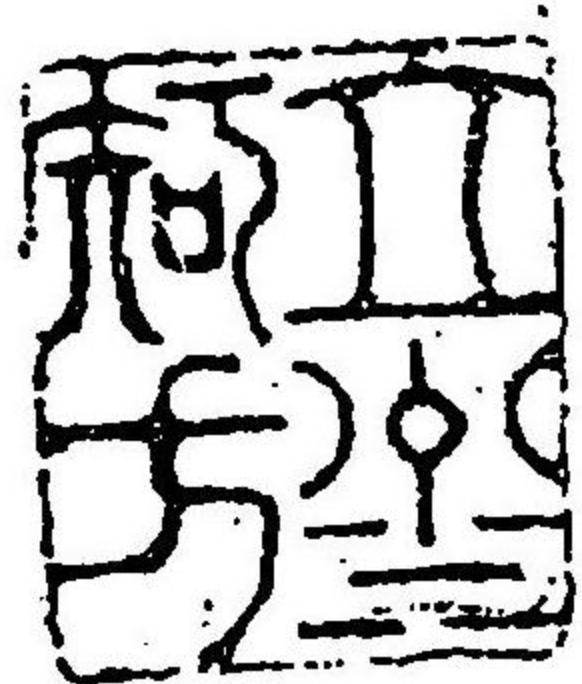


正隅

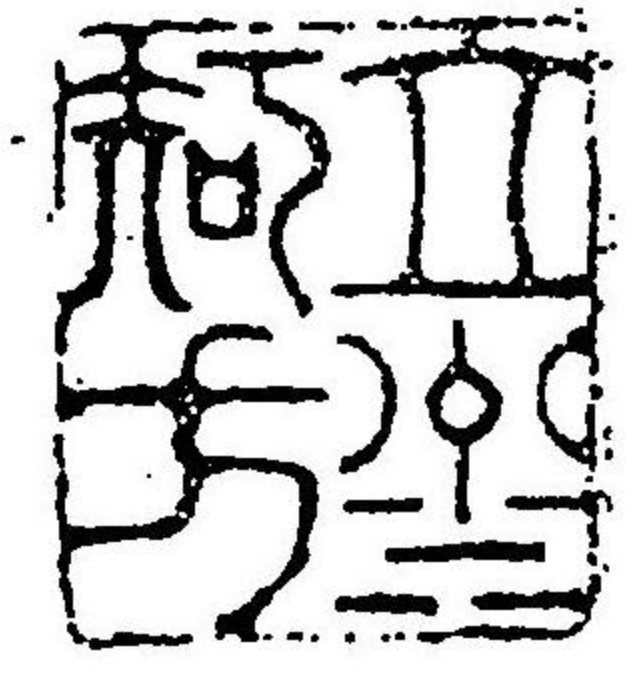
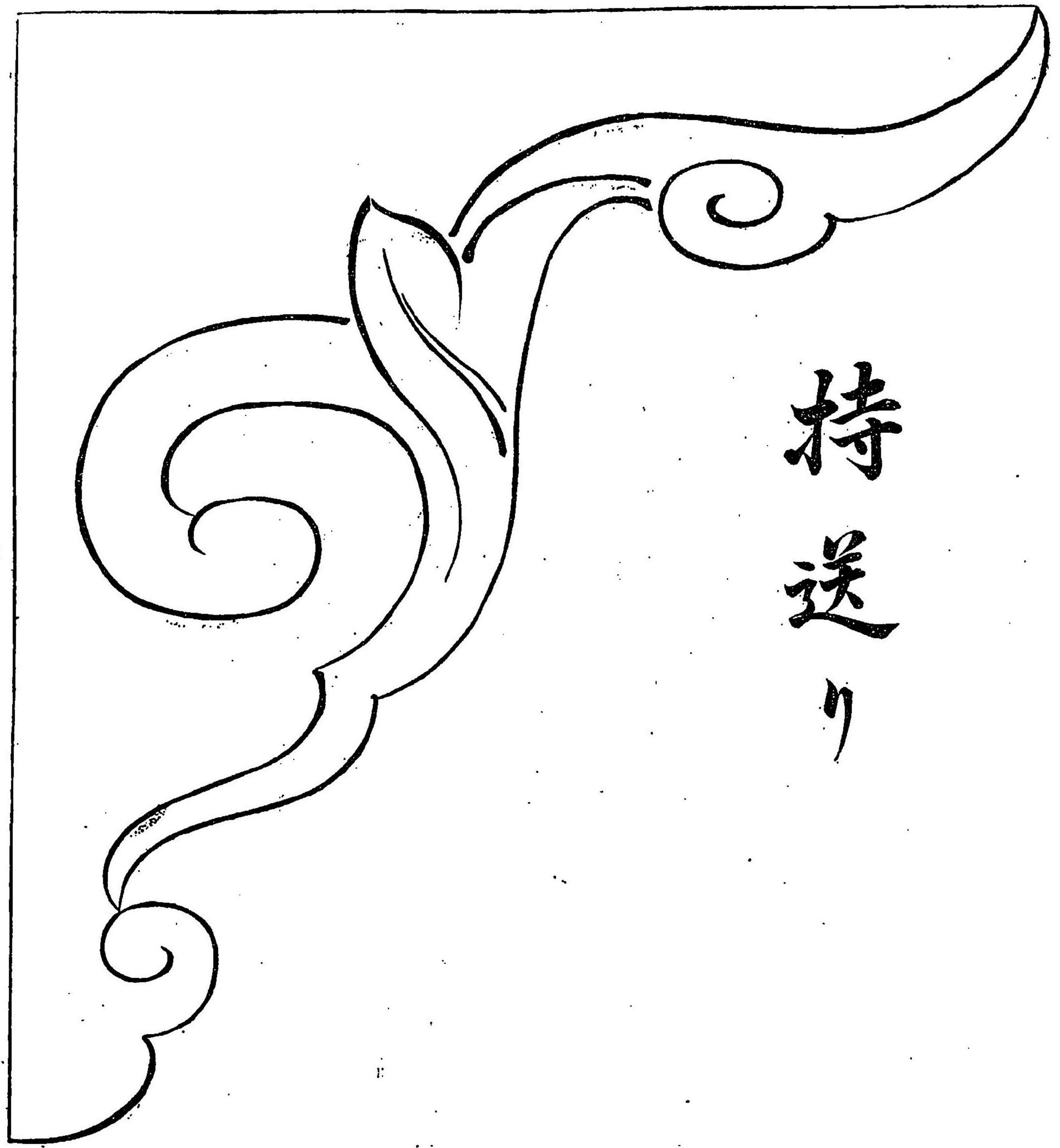




獠木鼻



持送



明治二十七年八月卅一日印刷

明治二十七年九月三日發行

定價金六拾五錢

東京市京橋區瀧山町拾壹番地

編纂者 故立川知方

全市全町全番地

發行者 立川通雄

全市全町七番地瀧關舍

印刷者 島田用定

全市全町全番地

印刷所 瀧關舍

64
253

立川流匠家雜術

倭繪樣集

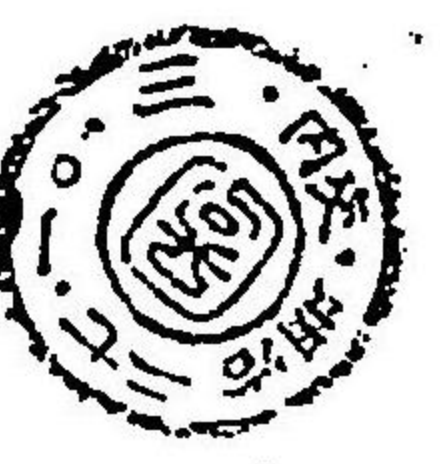
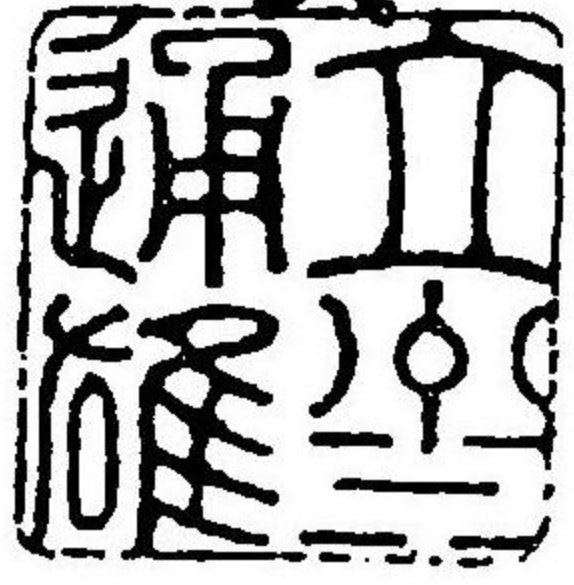
第一卷

けりかき

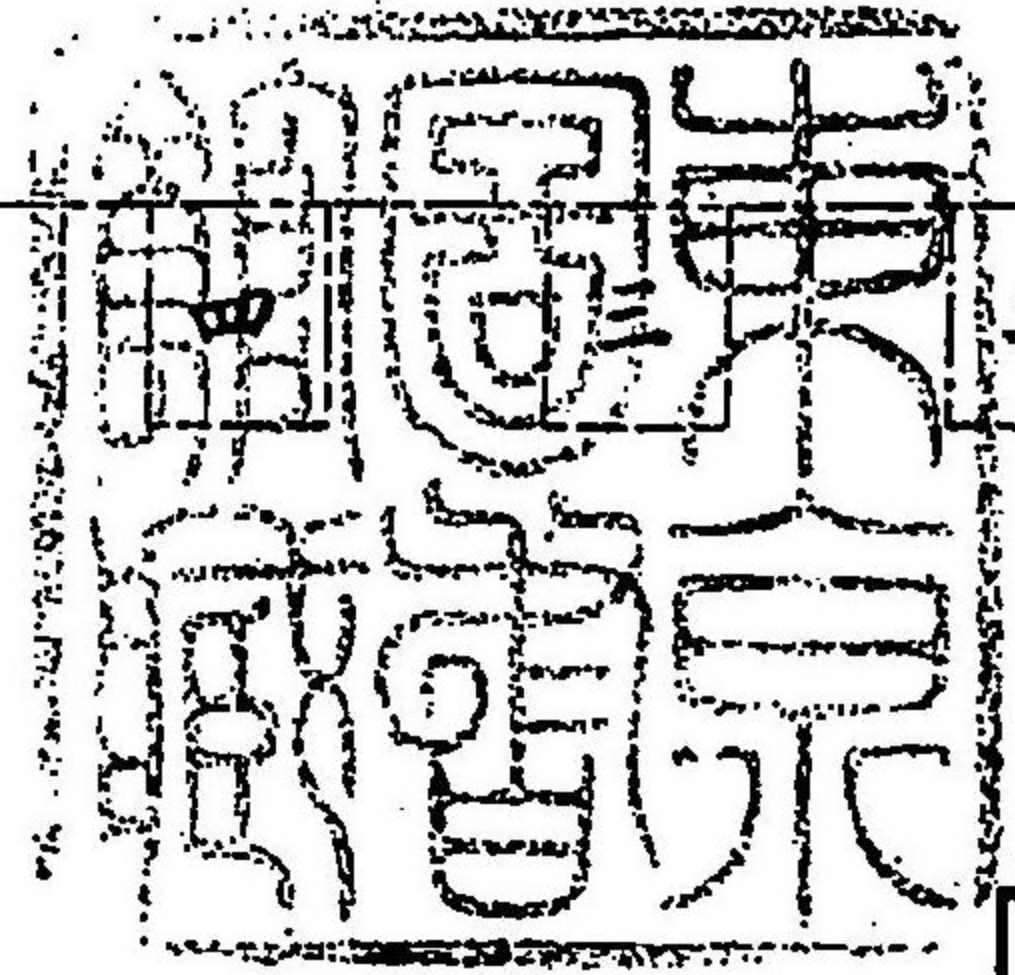
古く曰く良匠は規矩を離るるに能はずと宜るる哉凡そ物あり
 けは必し則ち規矩の常にして斯道に於ては殊然とす故を
 以て夫れ古くは本邦建築の業頗る進歩の域に達せし志あり
 せども多くは家傳秘訣と稱へ廣く人に傳へずしかば許す間種
 の著書ありしに非ざると雖も其載する所雜駁疎策にして唯其梗
 概を述ぶるに過ぎずしかば子弟の模範ありて完人後其力
 と勞と日字を費すとのみならず實際に便かるる甚だ稀か
 市井の庸人其限を越え我曾祖立川小五衛尉曆の昔に在り
 て其の精巧を所謂立川流を以て稱せし善き者傳へ
 ば其の遺傳の建築之の流あり一朝夕頃の如き震災
 に遭ふの不幸あるか其毀壞亦將に測れずんば故を以て
 因襲の久しき皆本造を單用せし今も其土氣候等に適
 合せる職由ら故に祖父知方後其の著書多くは簡略に
 失し且其形極小之が應用を計るに頗る難き業あり成
 憾み移年種々の繪様を上梓せんと欲し終に果せず
 て歿すや度予其意を承け大奉書及美濃紙に彫
 大して方圓曲直等墨繩を加順次出版せよ要は直之
 を印地に用ひしむを得るに在り庶幾其斯業後
 人の此須臾に闕く可ざるを鑑むるに於て益
 餘師ありん

甲午小暑号

立川通雄謹



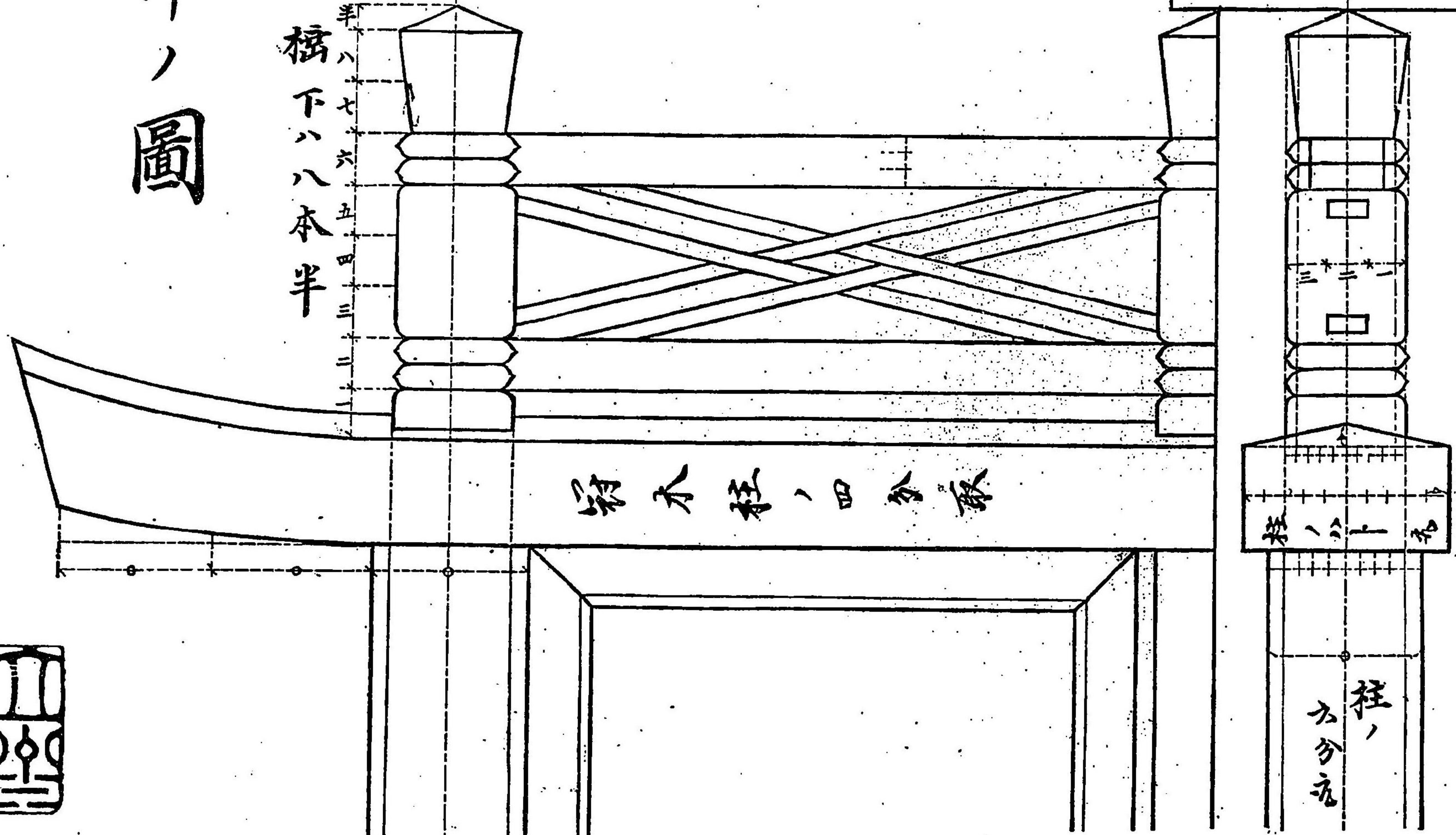
竹之節ノ圖



八 七 六 五 二 一

長押 六分

橋下八本半



取分目ノ柱木ノ節

橋ノ一ノ本

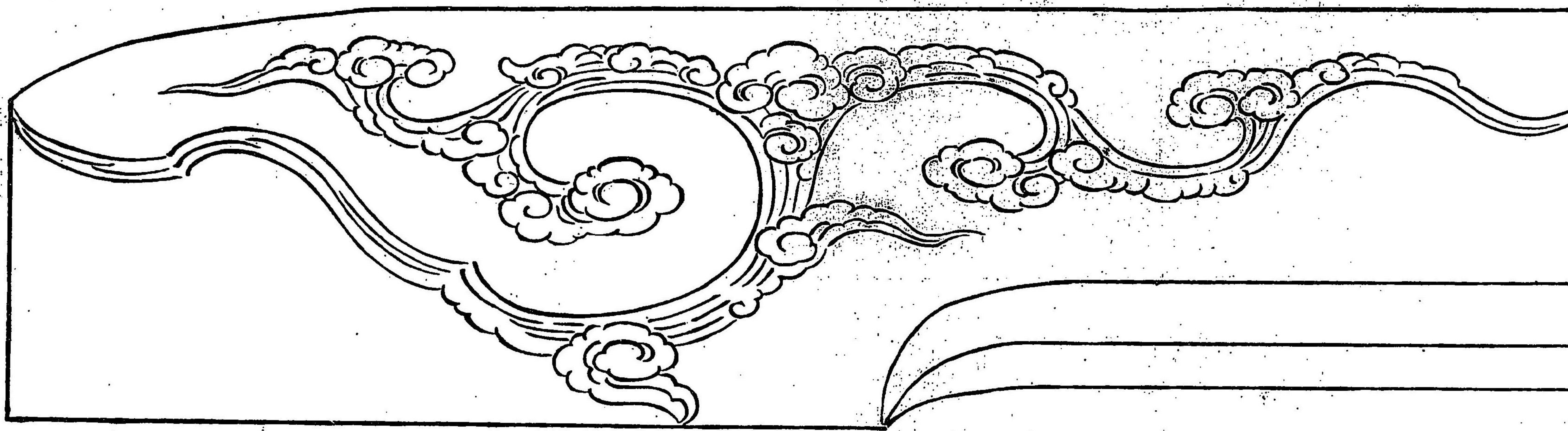
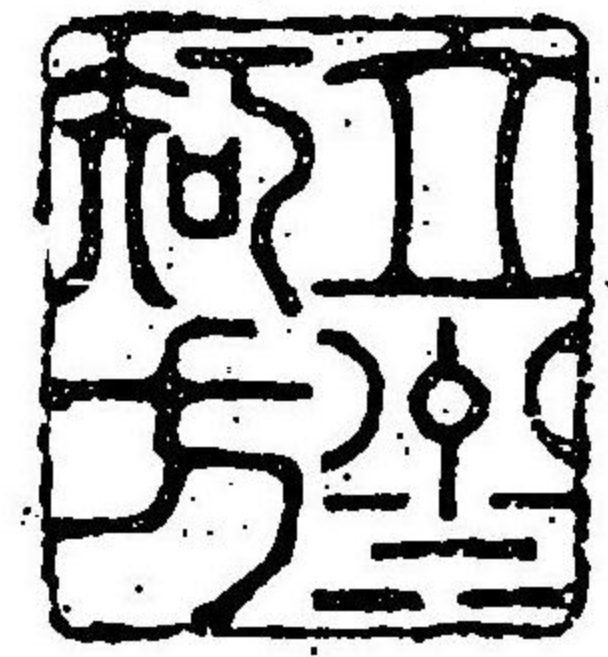
柱ノ
九分

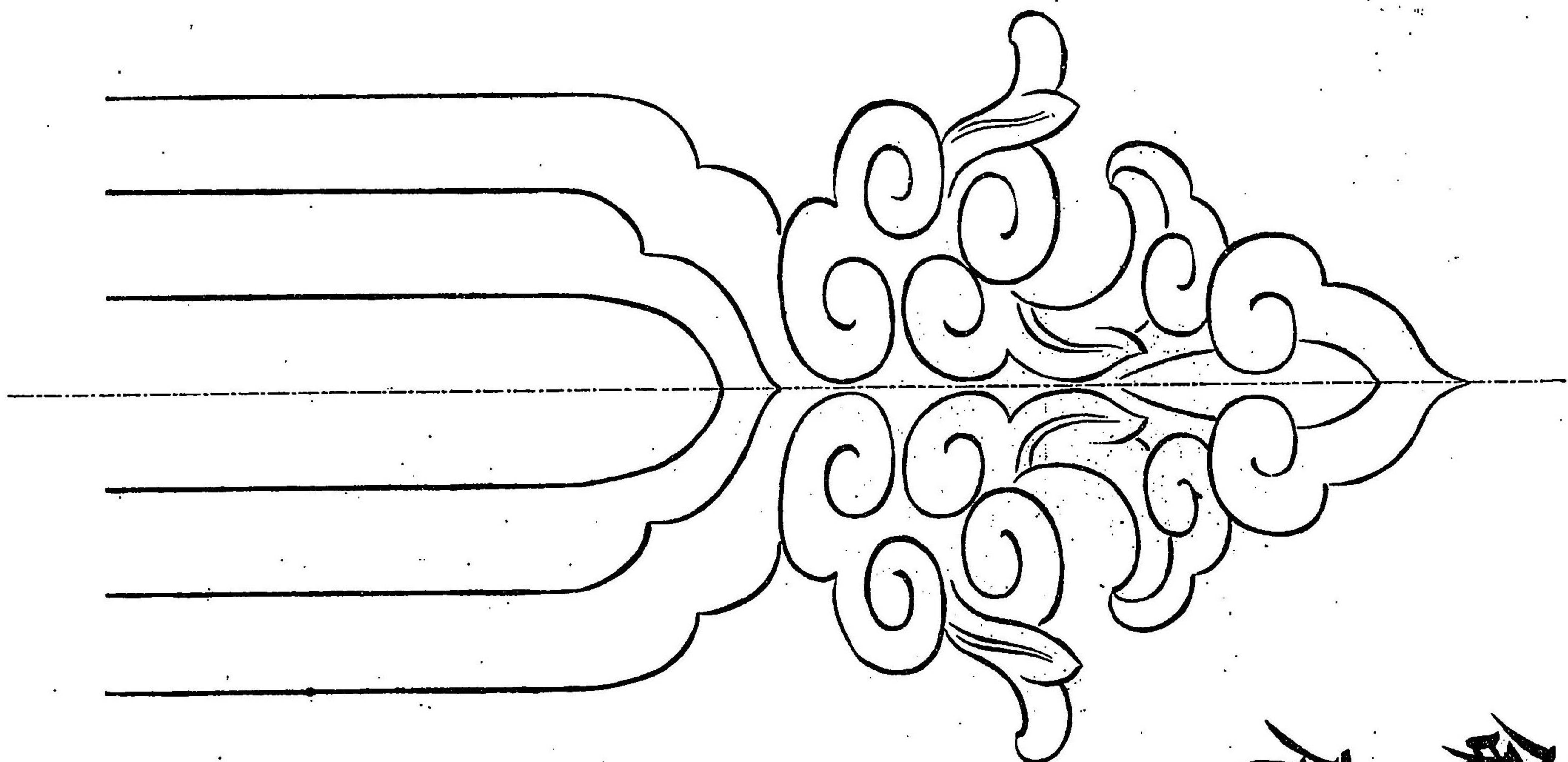
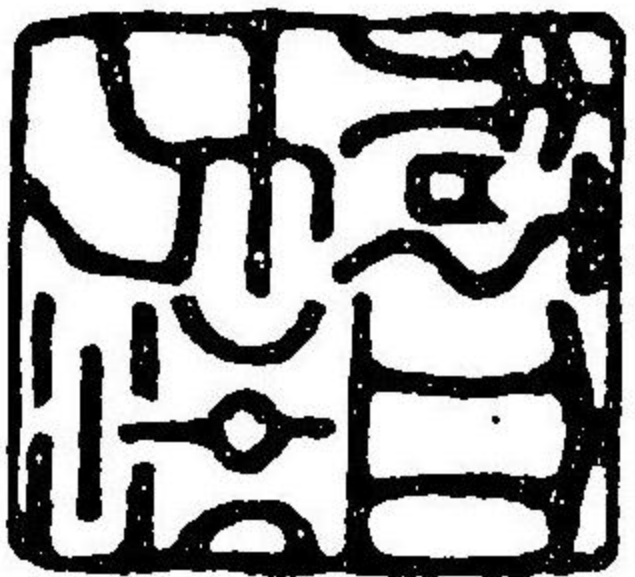


虹
梁



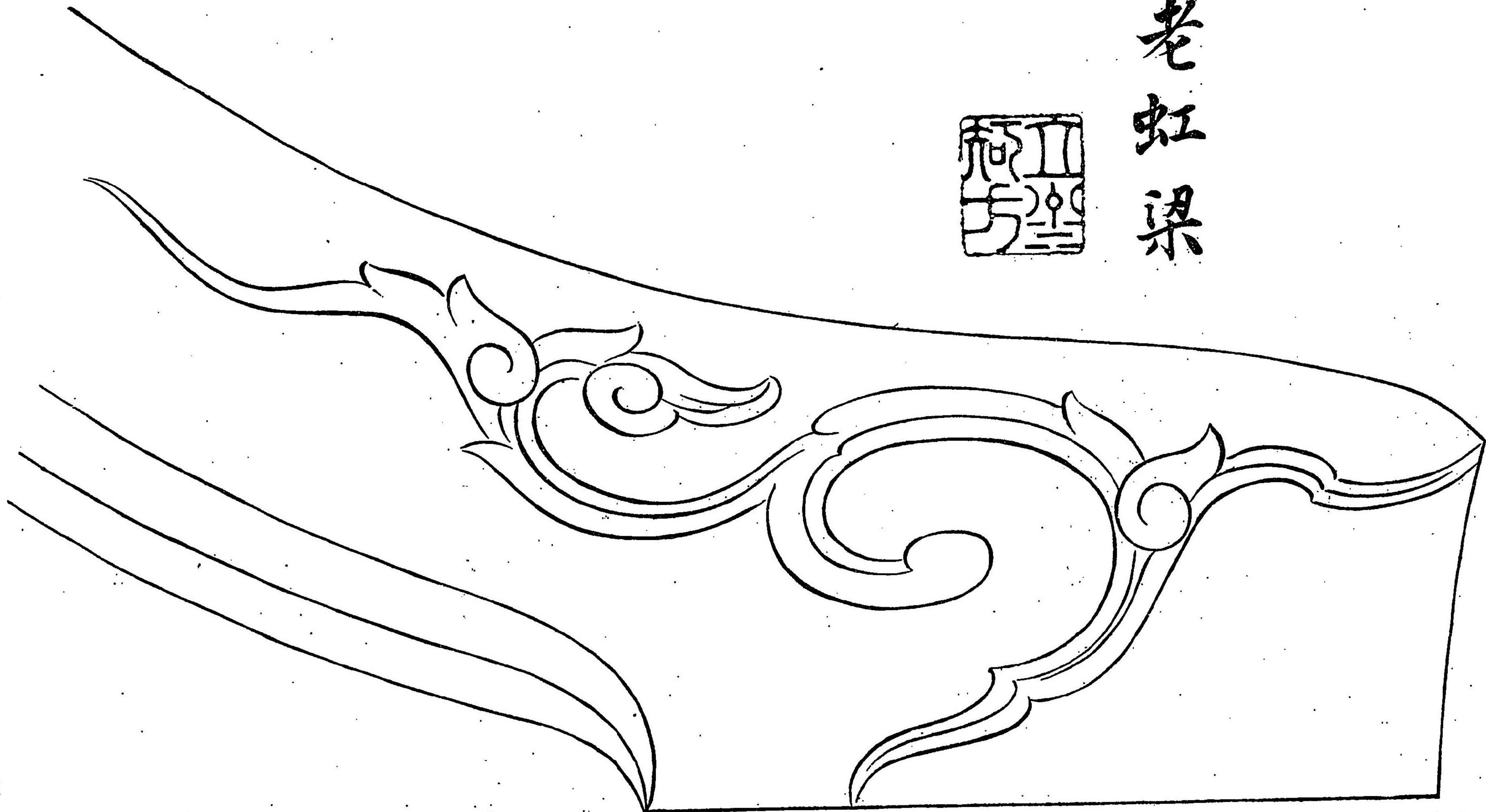
虹梁



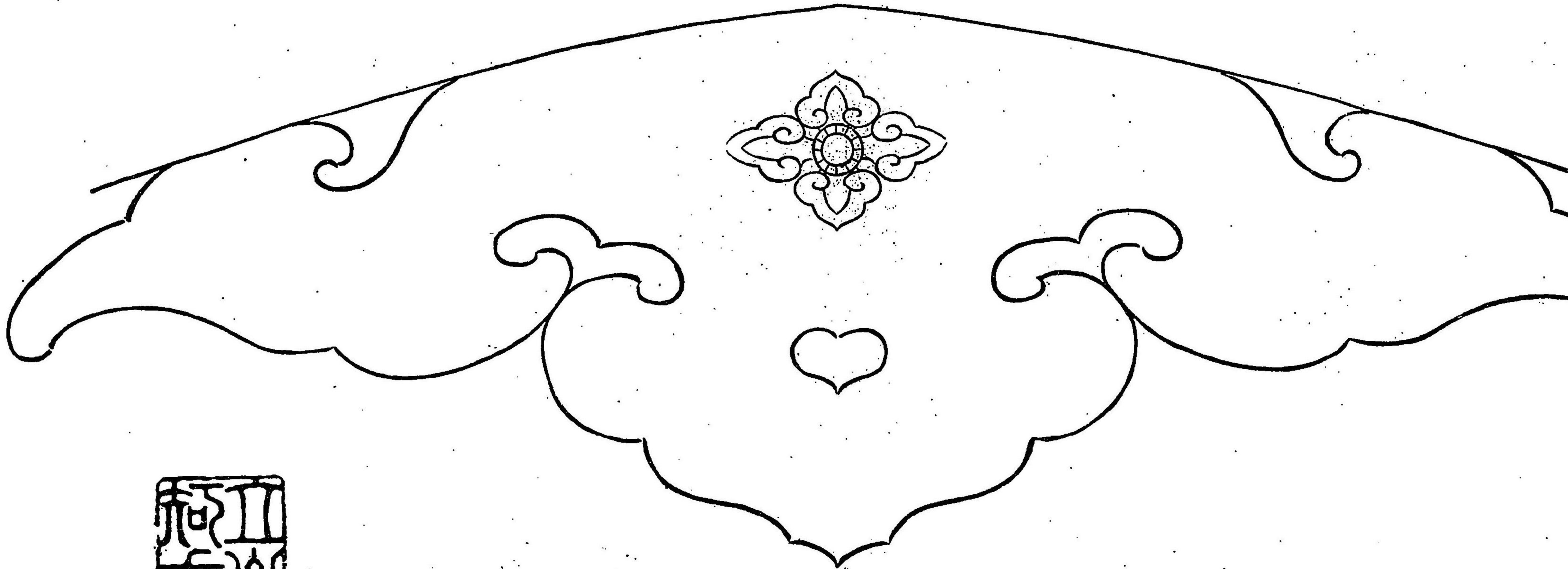


雙眉

海老虹梁

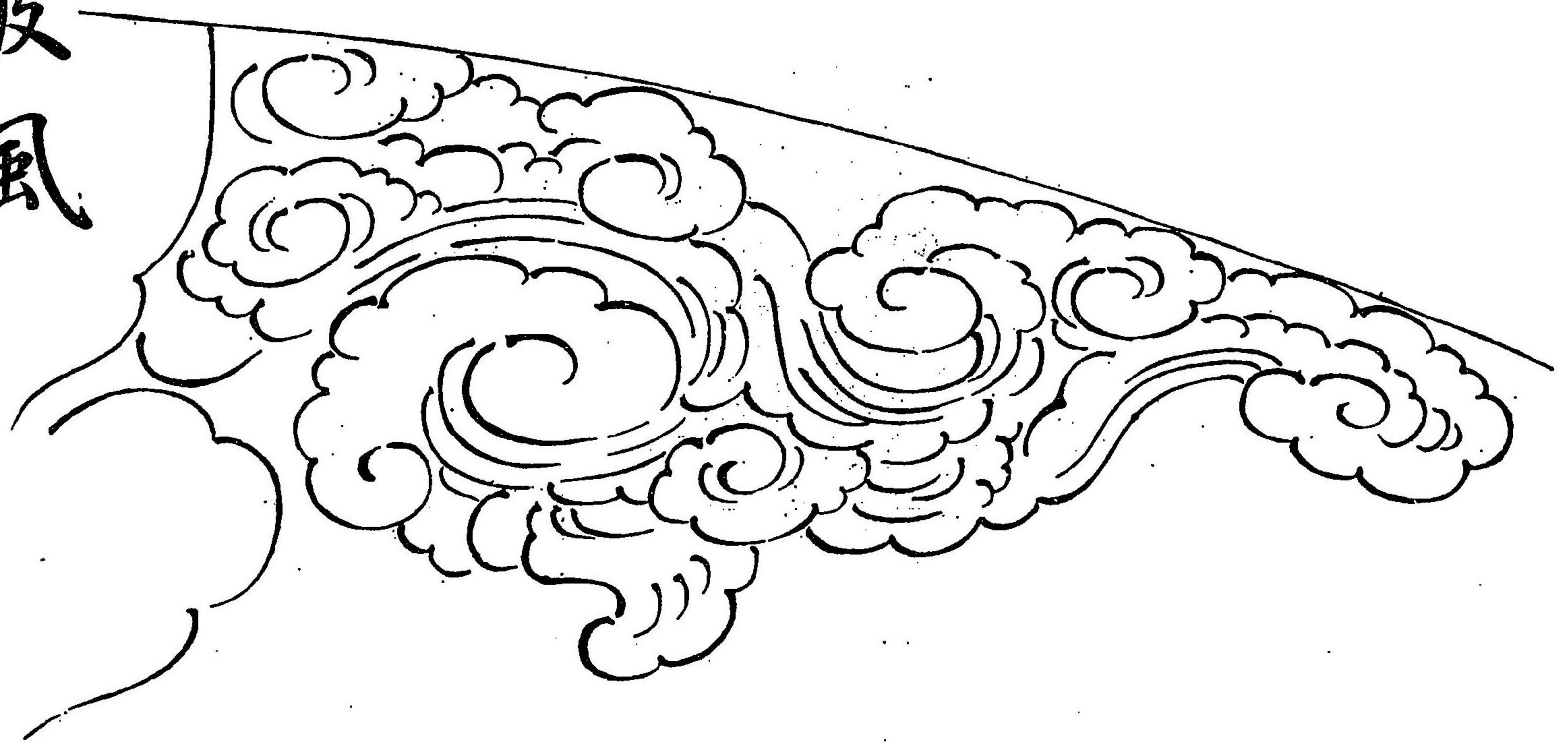


起
掛 破
真 風



起
破
風

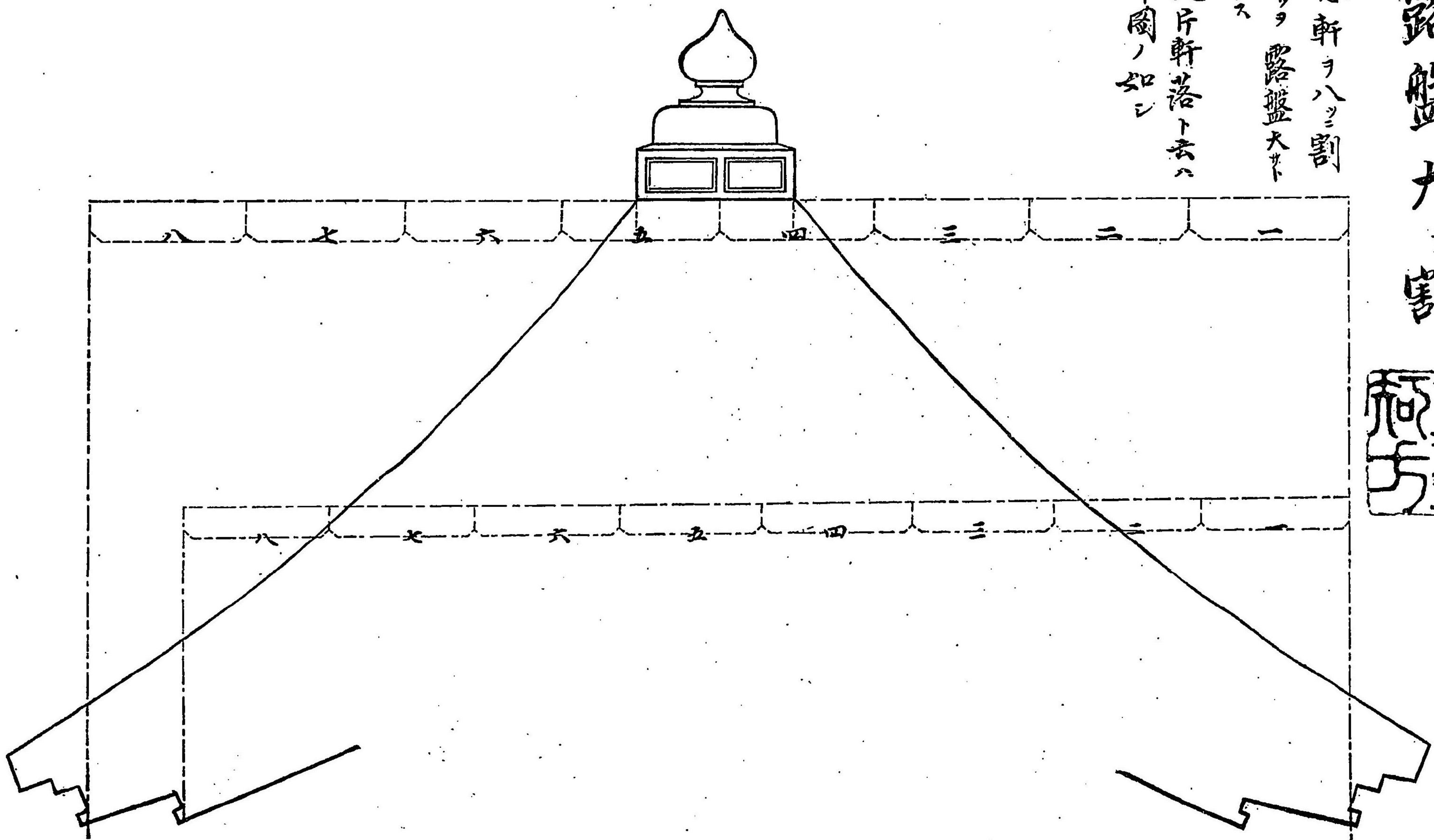
掛
真



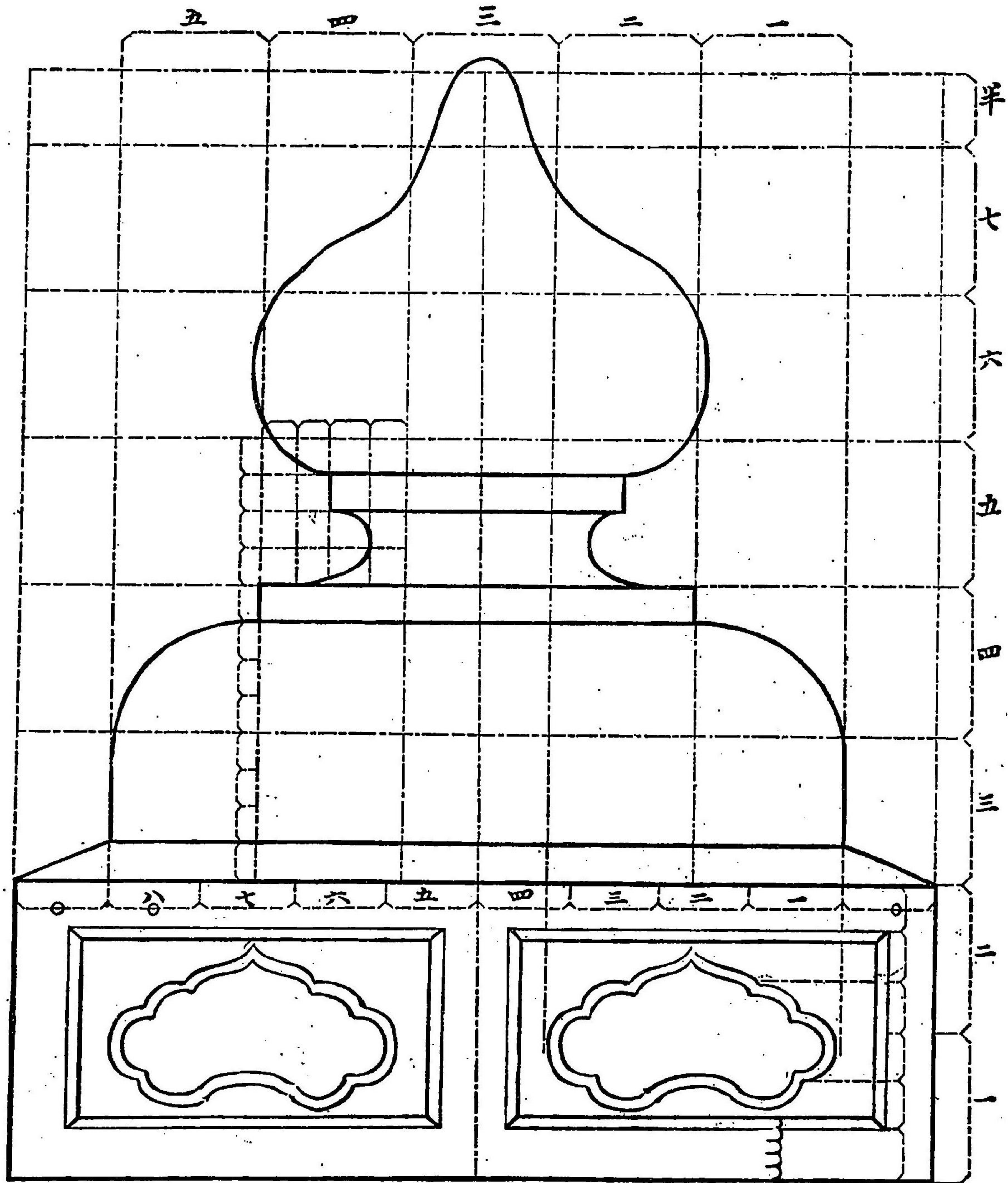
露盤大サ割



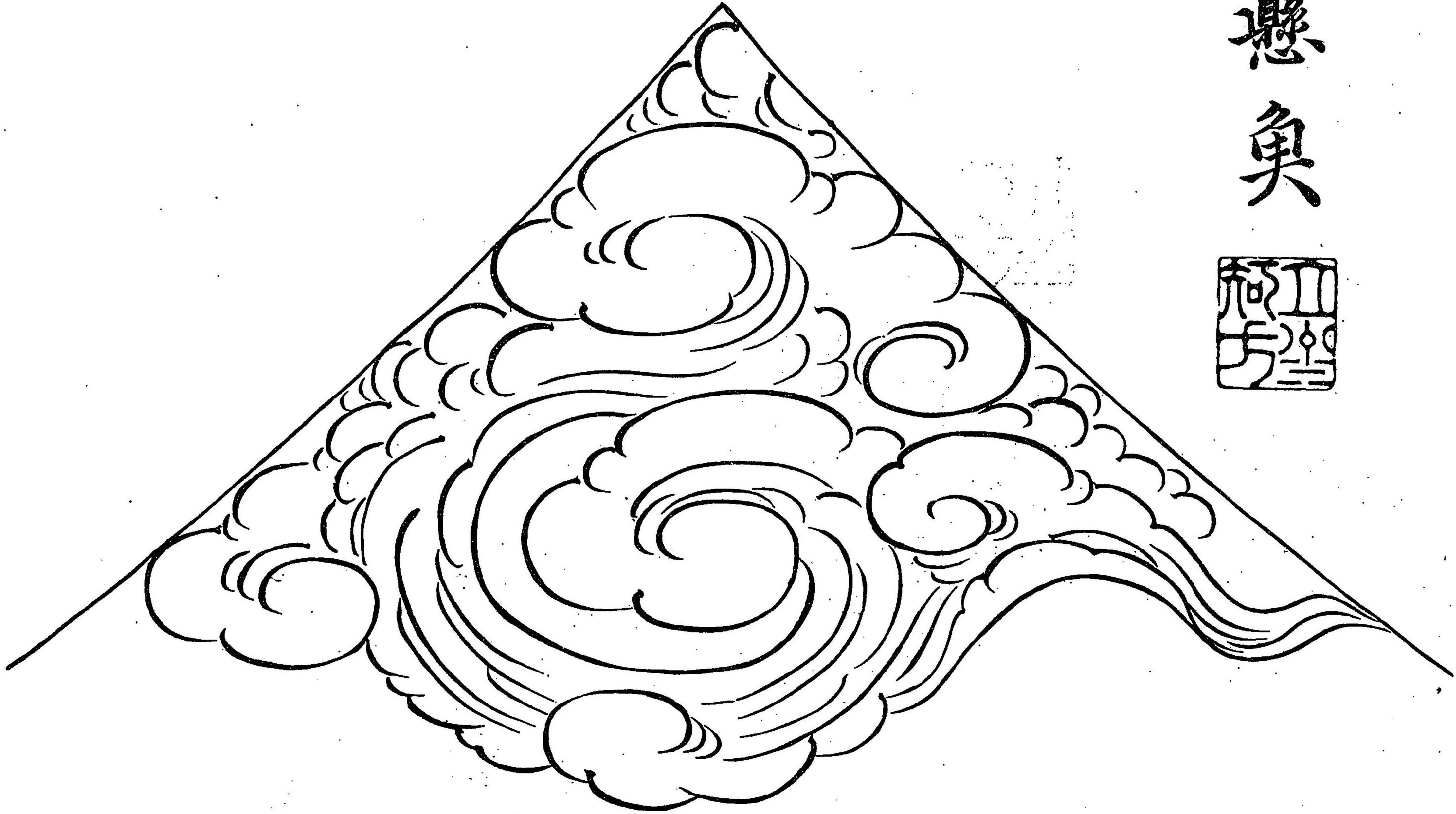
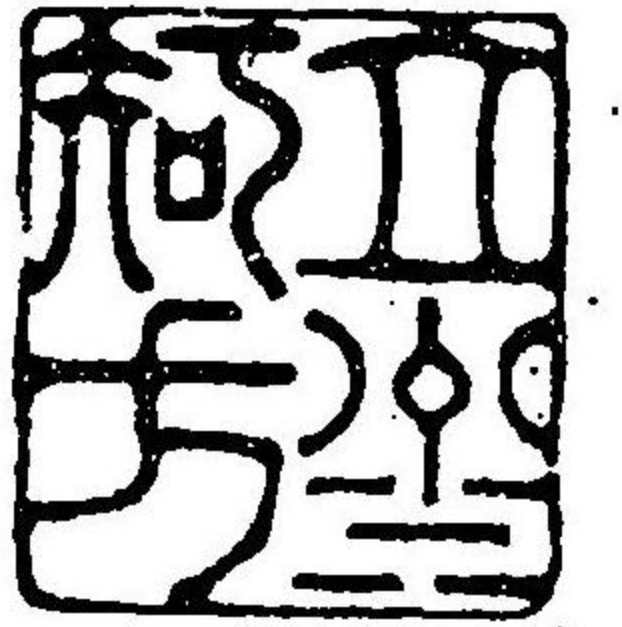
惣軒ヲハシ割
一ツヲ露盤大サ
ナス
又片軒落ト去ハ
下圖ノ如シ



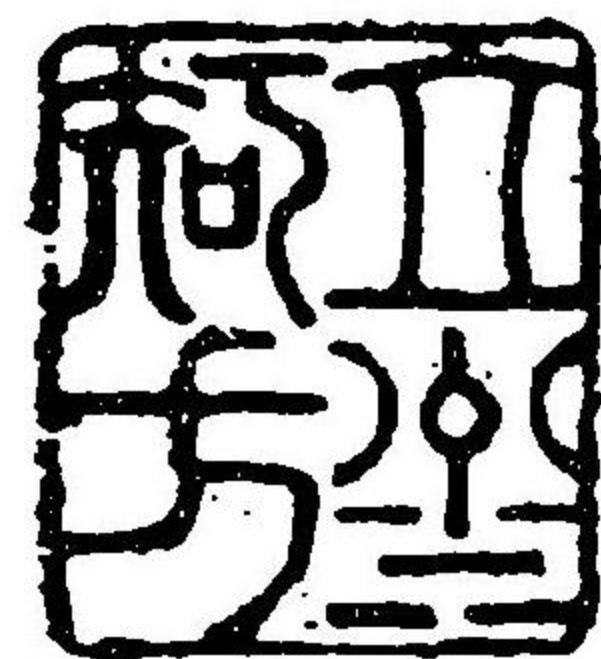
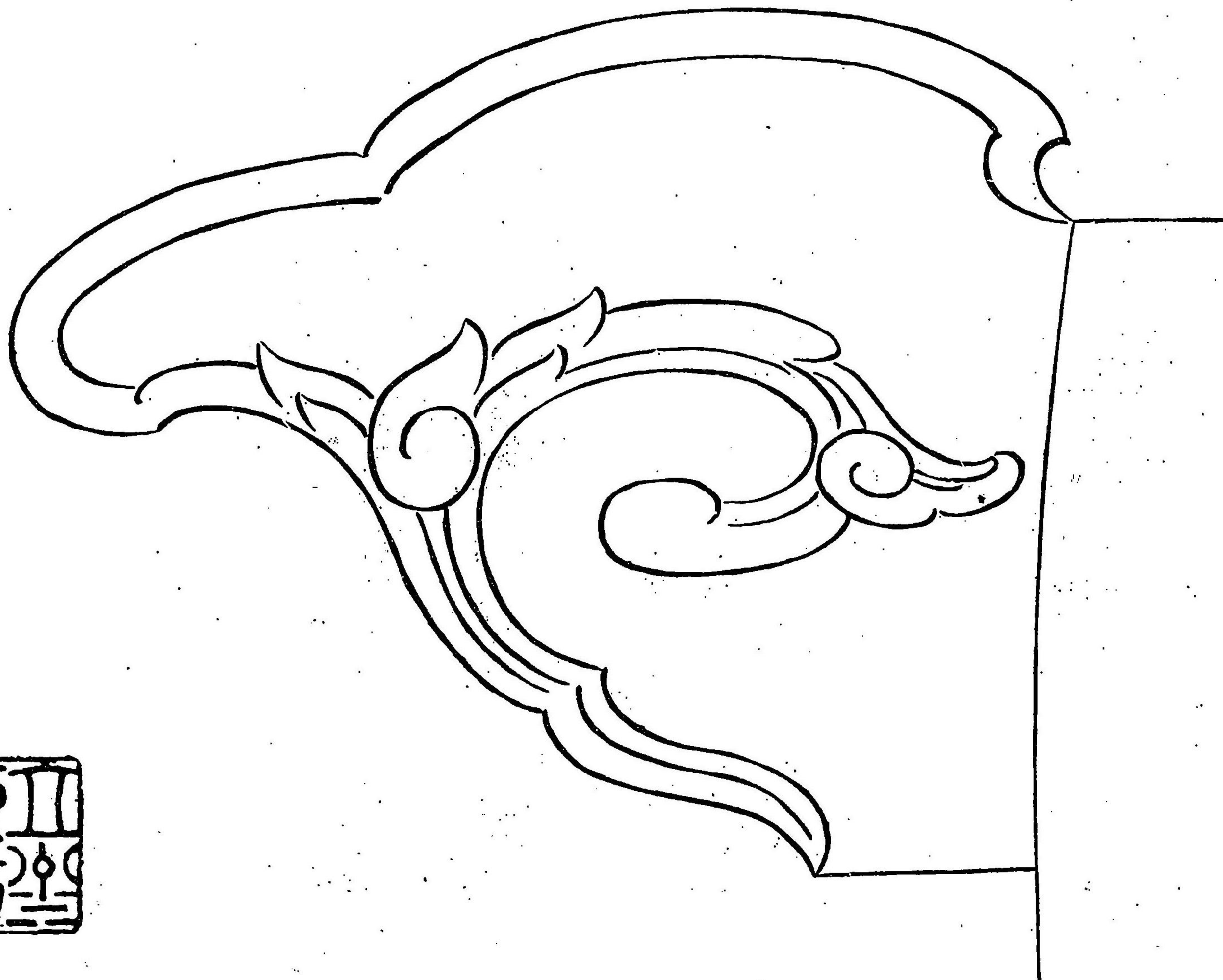
魯般盤



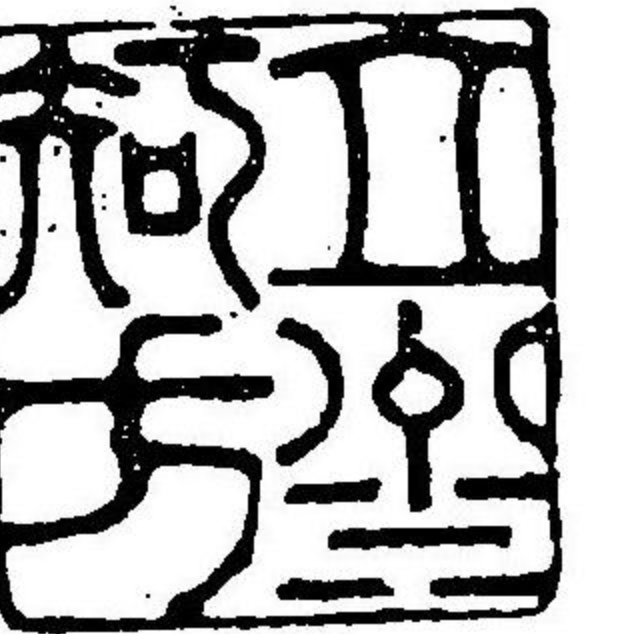
懸象



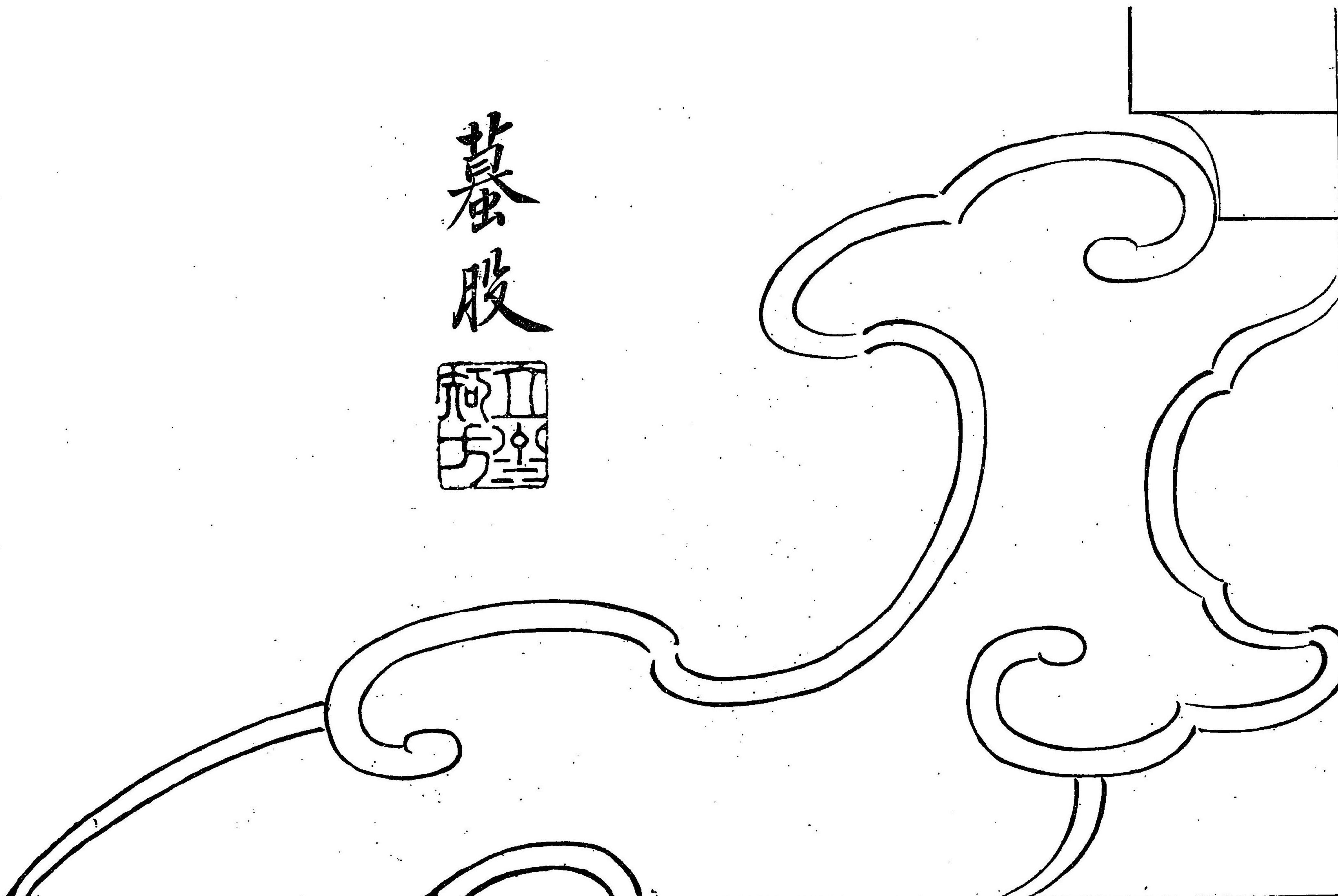
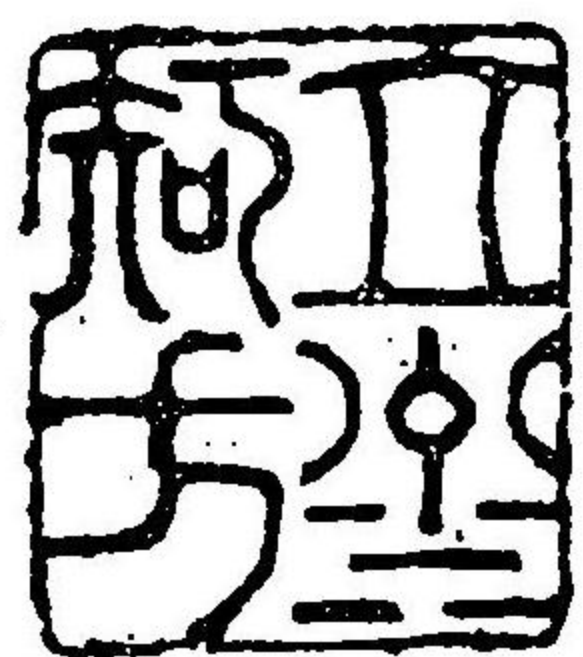
向
拜
虹
梁
鼻



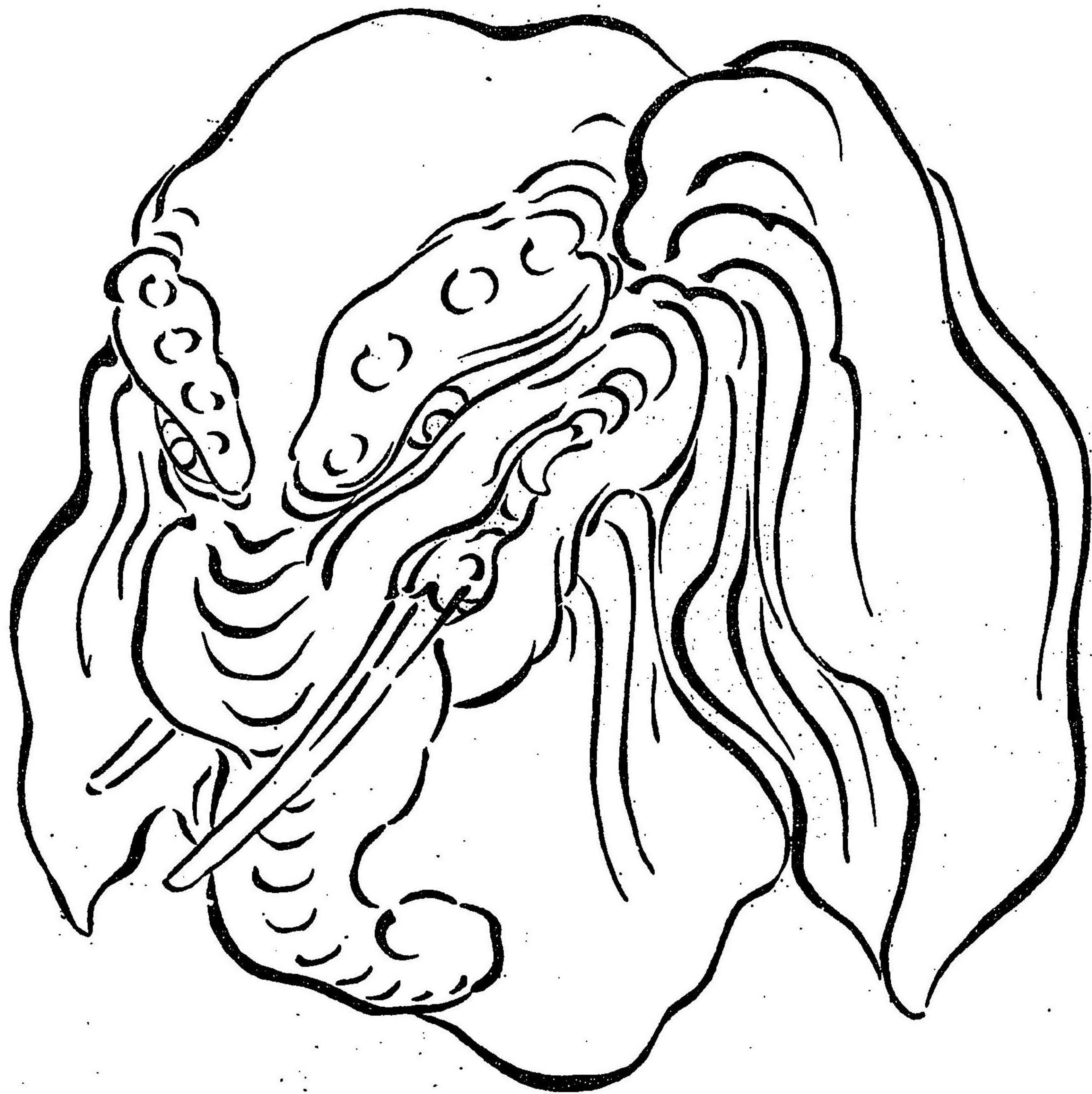
龍之暴股



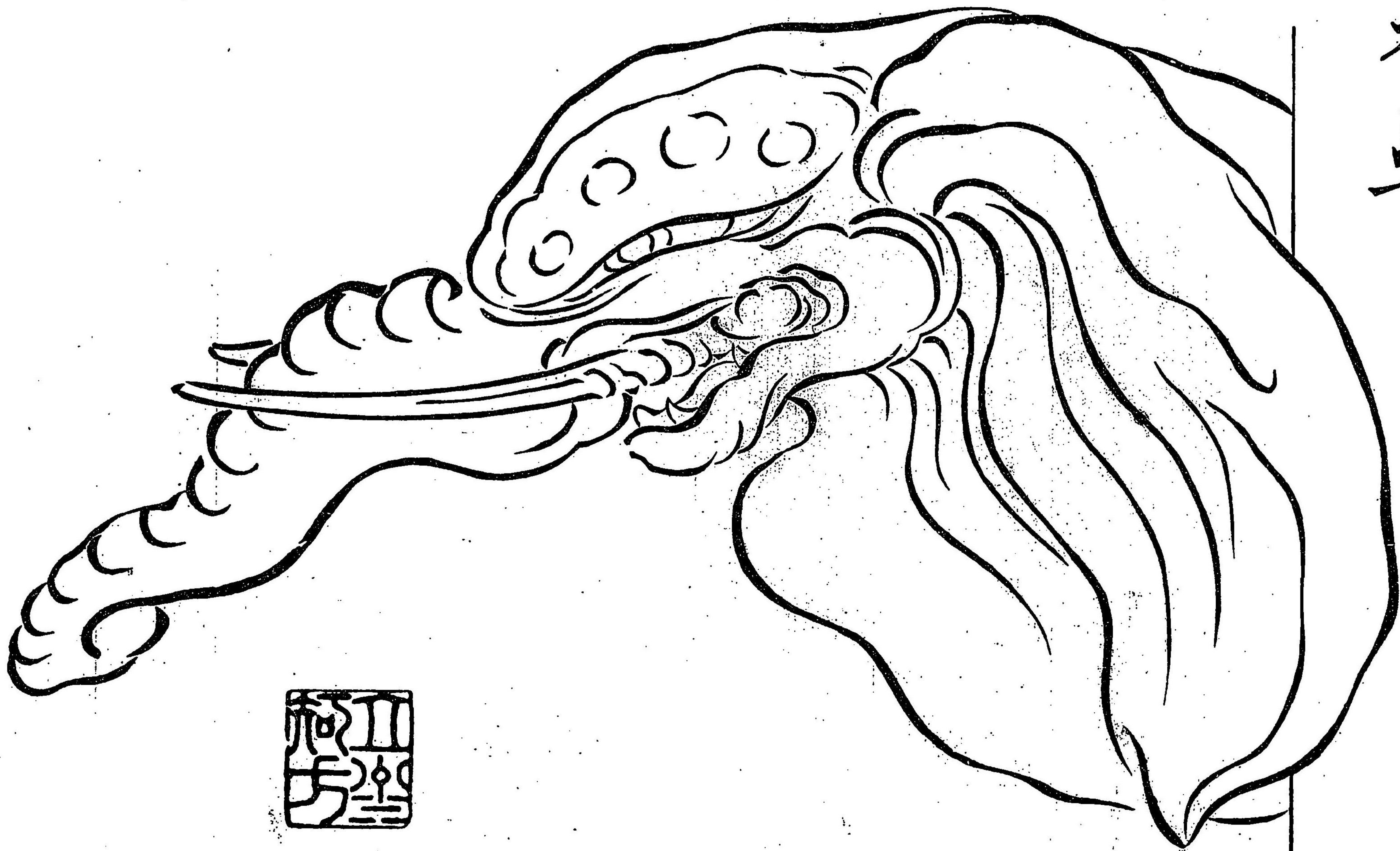
墓股



象木鼻

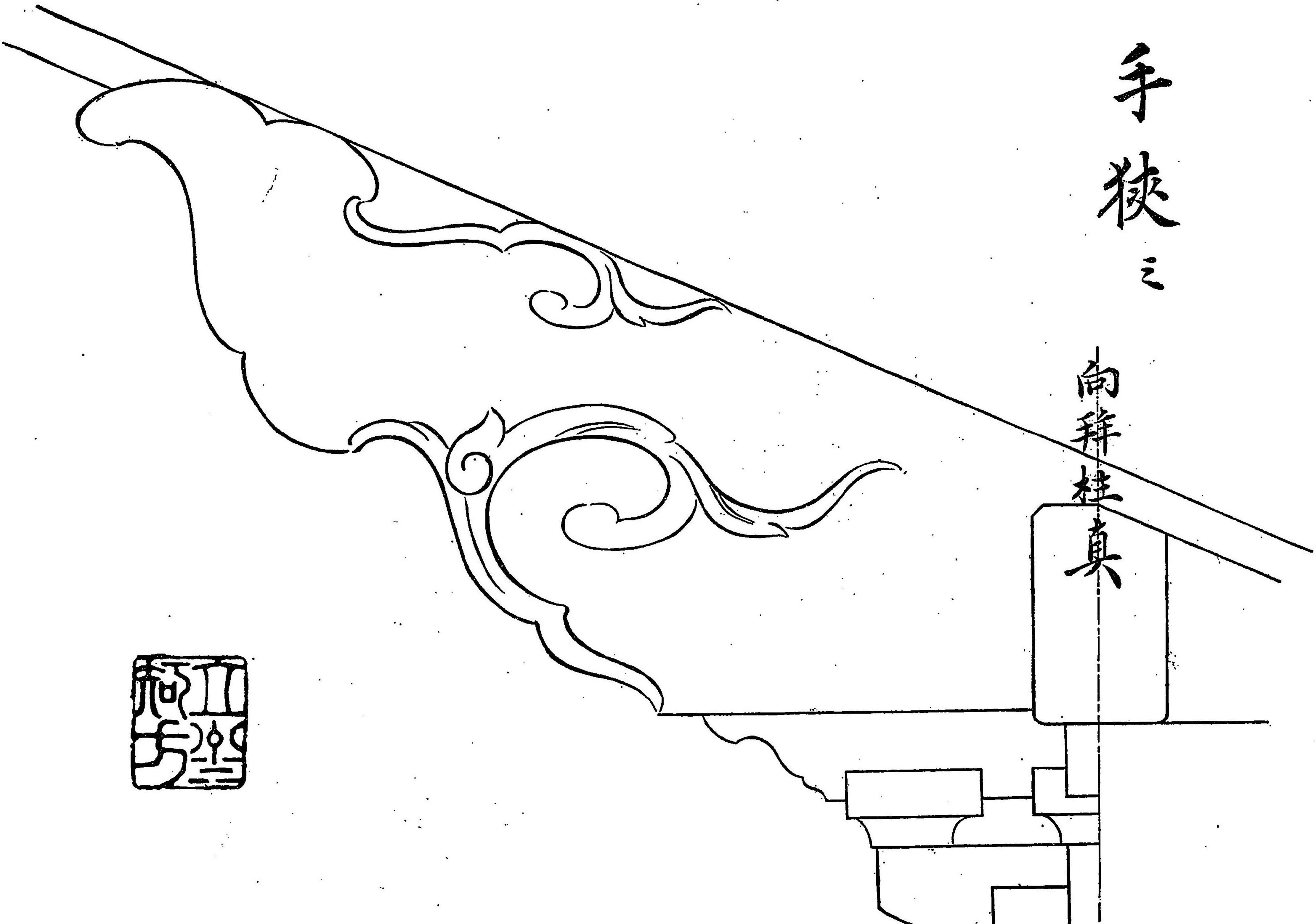


象水鼻

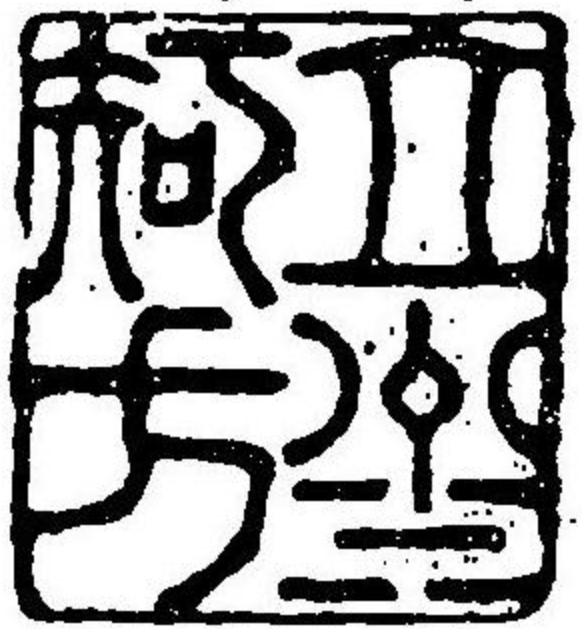
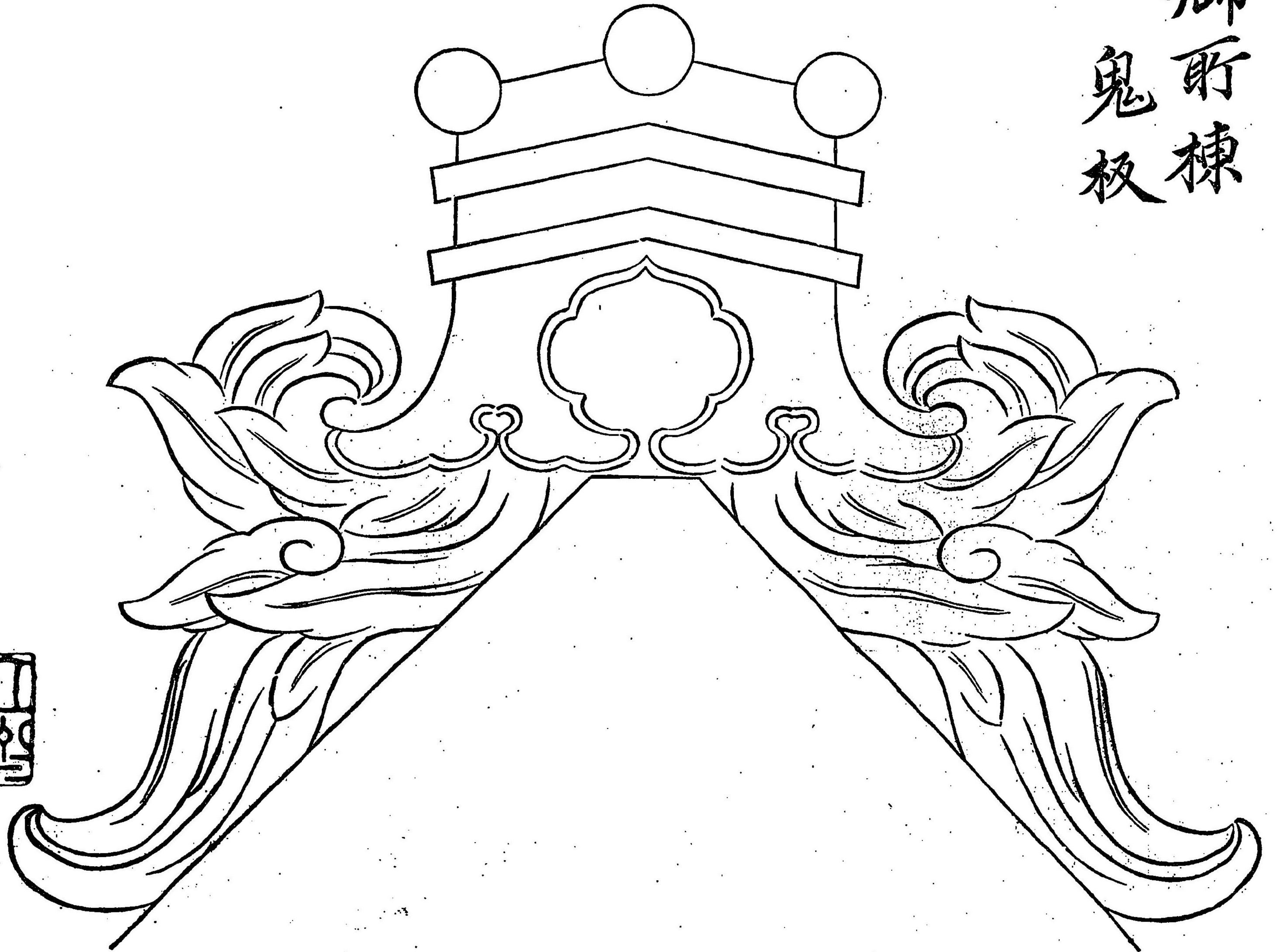


手
袂
之

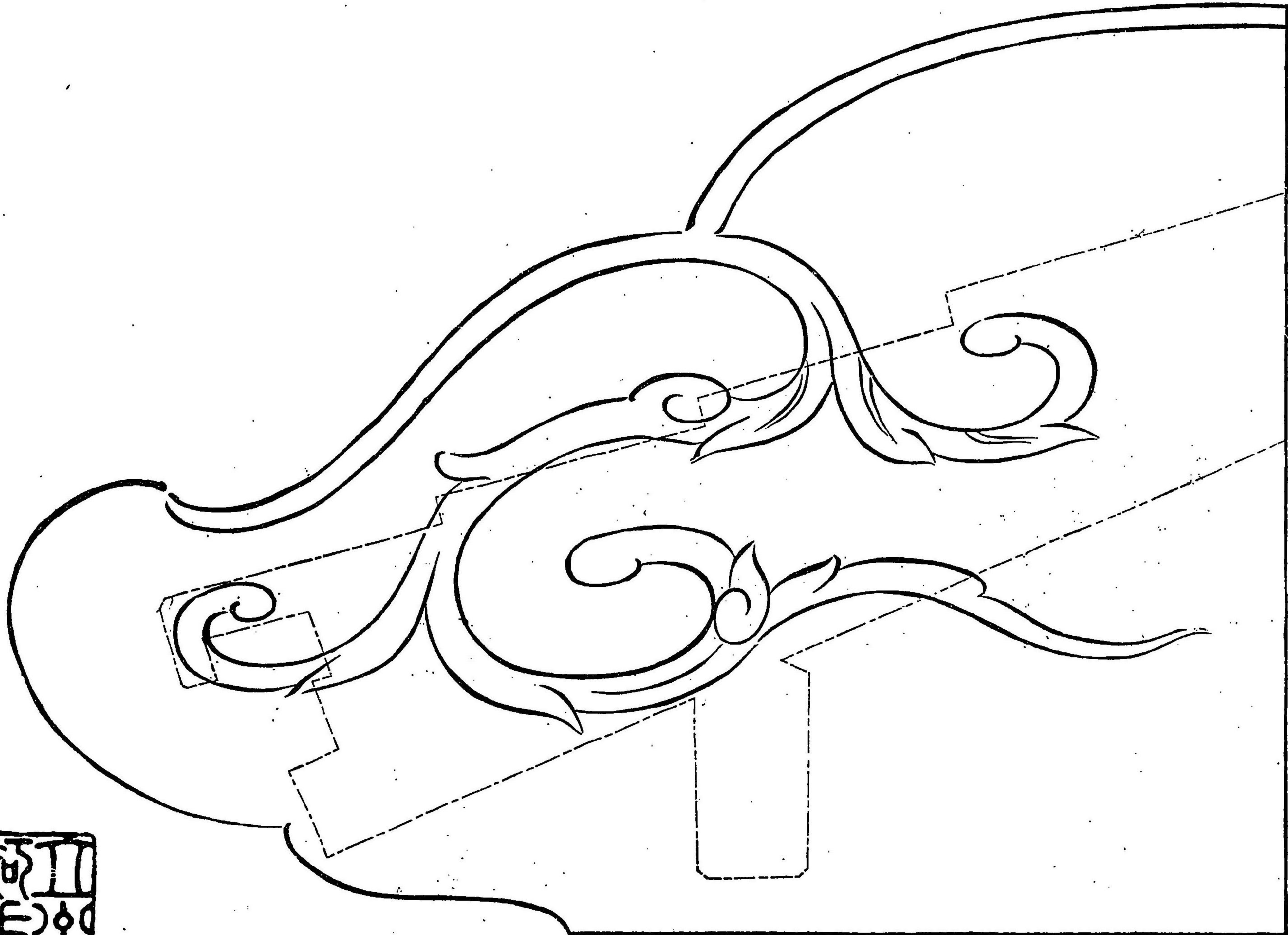
向
拜
柱
真



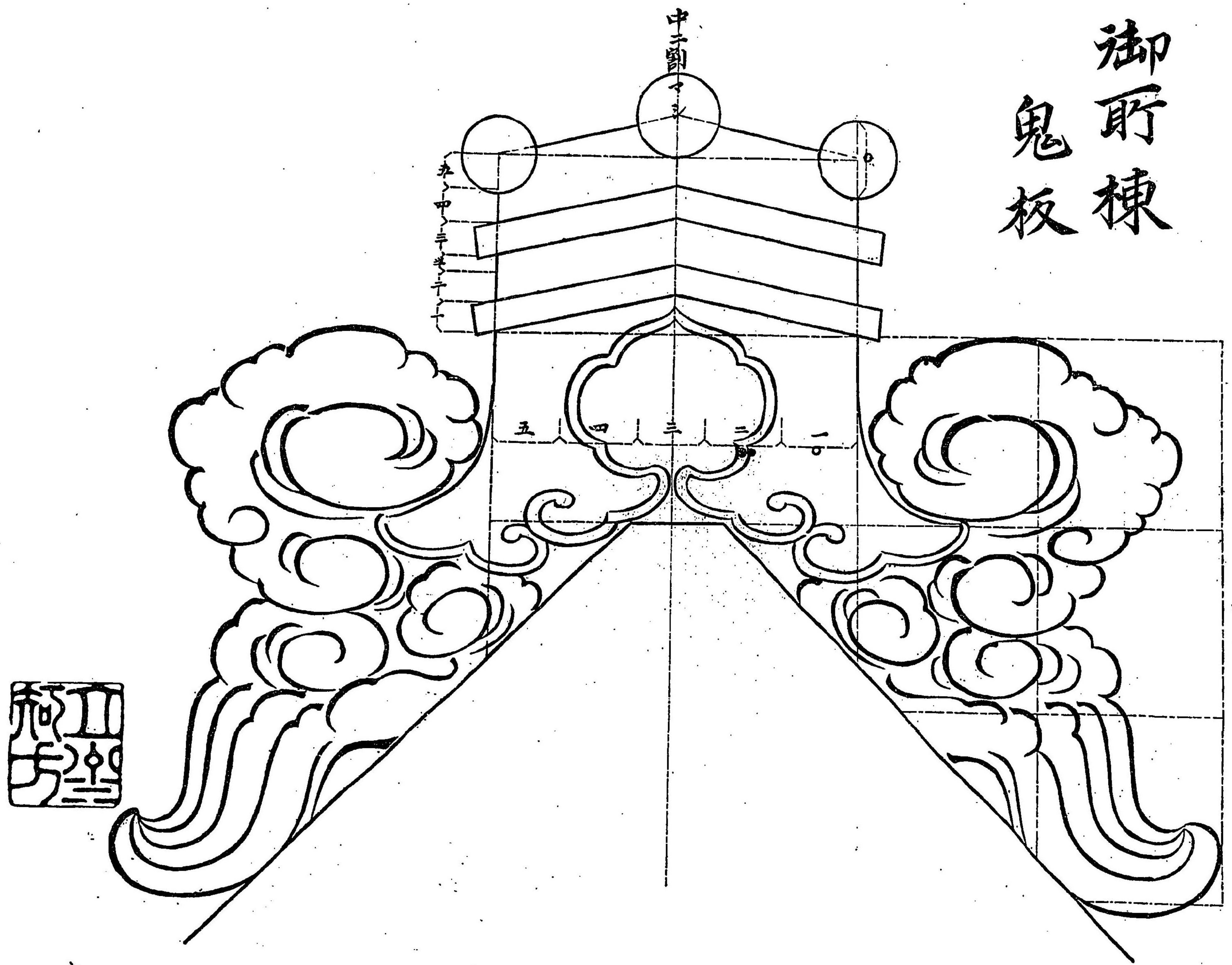
御所棟
鬼板



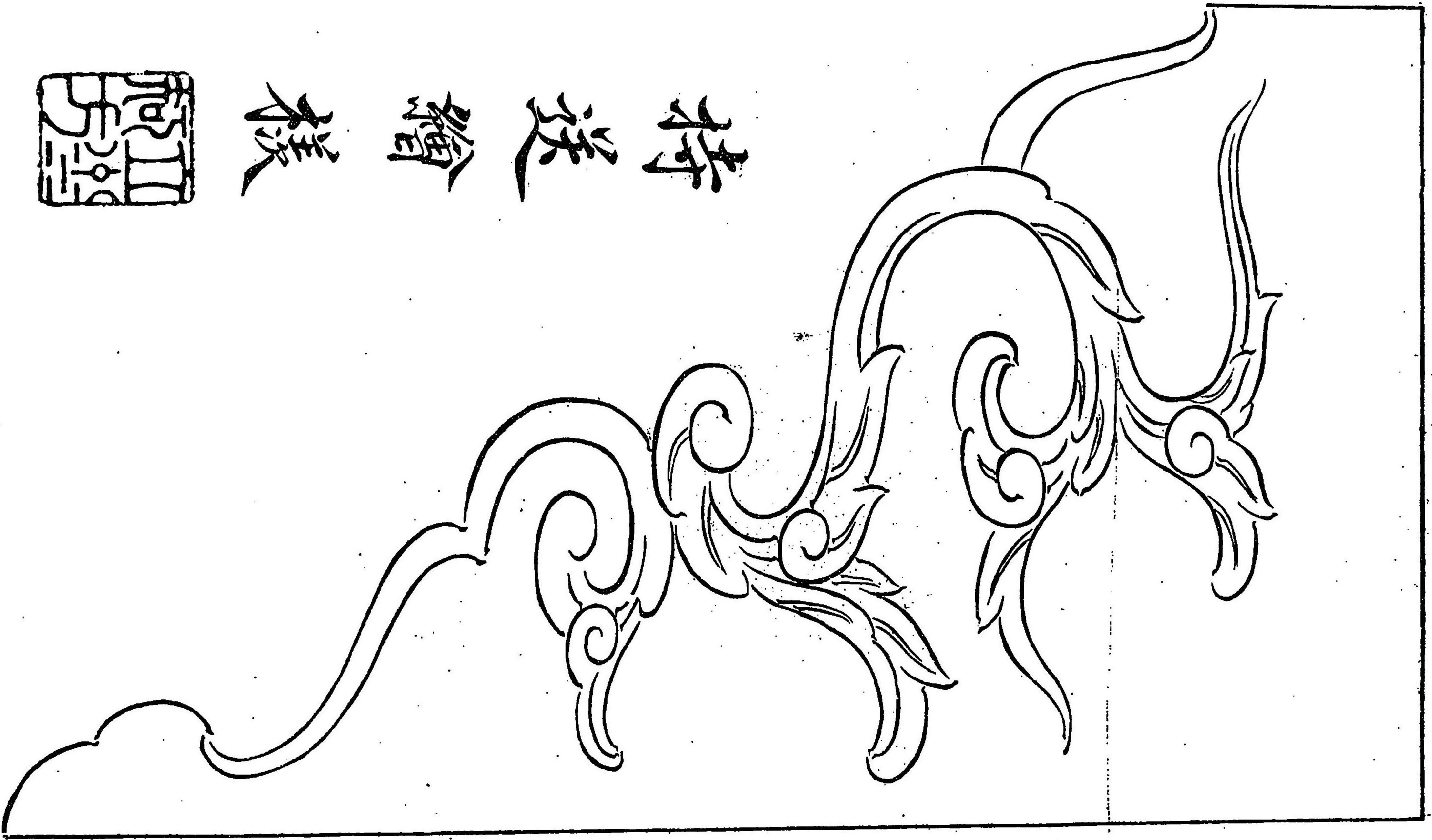
繪振板



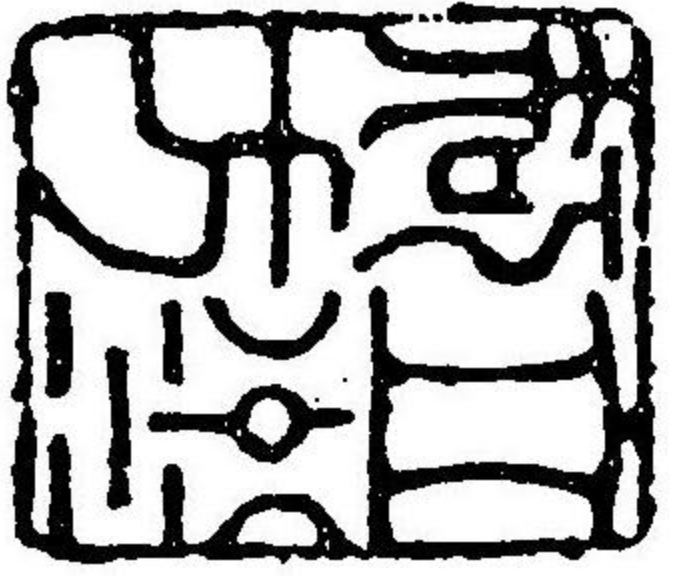
御所棟
鬼板



御所棟
鬼板



持送縵樣



明治二十七年九月廿七日印刷

明治二十七年九月三十日發行

定價金六拾五錢

東京市京橋區瀧山町拾壹番地

編纂者 故立川知方

全市全町全番地

發行者 立川通雄

全市全町七番地 瀧關舍

印刷者 島田用定

全市全町全番地

印刷所 瀧關舍

64
253

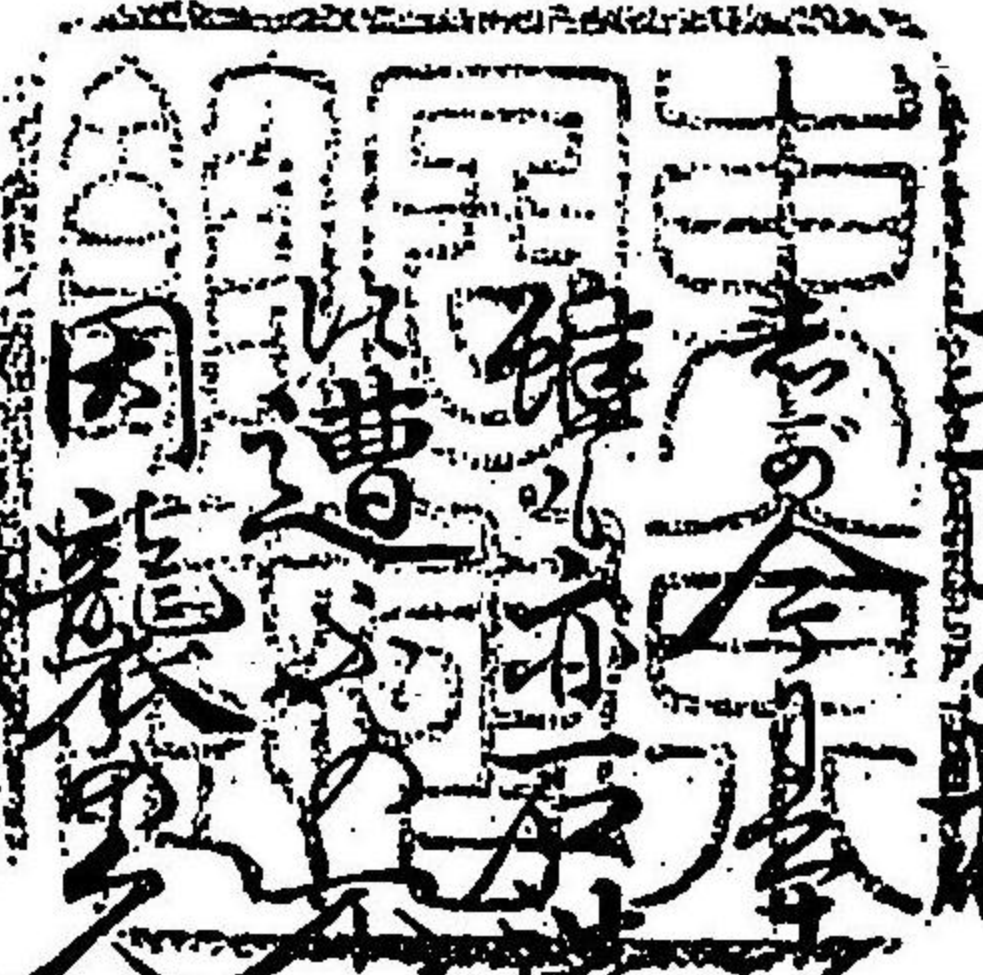
立川流匠家能術

倭繪樣集

第四號

けりかき

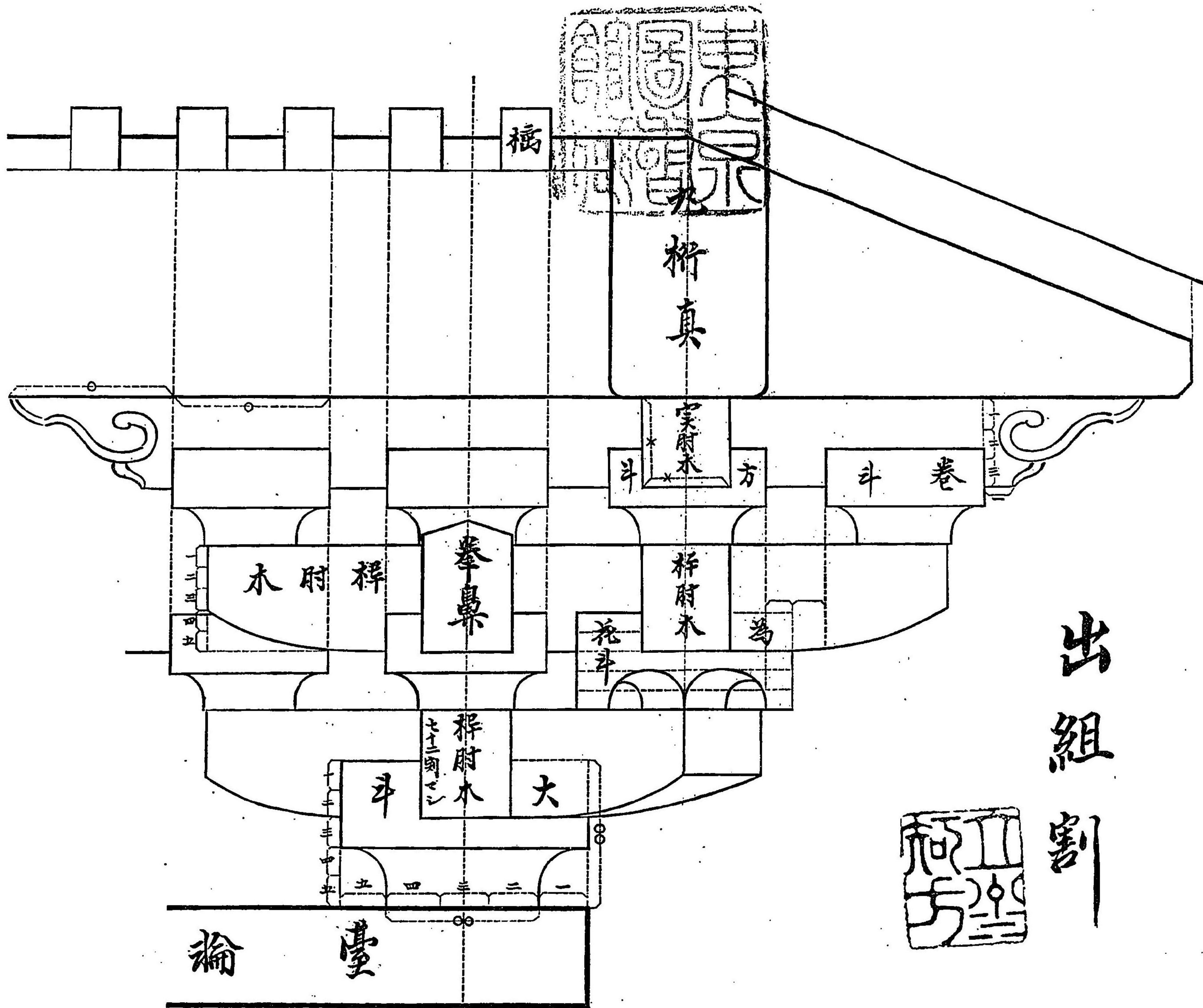
古く曰く良匠は規矩を離るると能はずと宜る哉凡そ物あり
 け必し則ち規矩の常として斯道に於ては殊然とす故を
 以て古くは本邦建築の業頗る進歩の域に達せし者あり
 其れども多くは家傳秘法と稱へ廣く人に傳へず許さる間種
 の著書あり其れに非ざると雖も其載する所雜駁疎略して唯其梗
 概を述ぶるに過ぎずしかる中子弟の模範ありて完ん後其力
 を勞し日子を費すもの多しとて實際に便かるもの甚だ稀しか
 るは最可惜き限りとして我曾祖立川小五衛尉磨の昔に在り
 正徳の故に精巧な所謂立川流を以て稱せり其傳へ
 たる者今も遺るは其の一人にきり及び猶隆盛を極む古來我邦と
 稱するべき建築の名家と流あり一朝先頃の如き震災
 に遭ひて其の業の衰へんか其毀壞亦將に測れざらんとは故を以て
 因襲の久しき皆未造を單用せし是れ今も凡そ氣候等も適
 合せり職由り故に祖父知方後輩の著書多くは簡略に
 失し且其形極小之が應用を計るを頗る難し業あり成
 憾み移年種々の繪様を上梓せんといふ終に果せず
 て歿すや度予其意を承け大奉書及美濃紙に廓
 大して方圓曲直等墨繩を加順次出版せし要は直に之
 を印地り用ひしむを得ず在り庶幾は斯業後
 人の此須臾の闕く可ざるを鑑むるに於て益
 餘師ありん



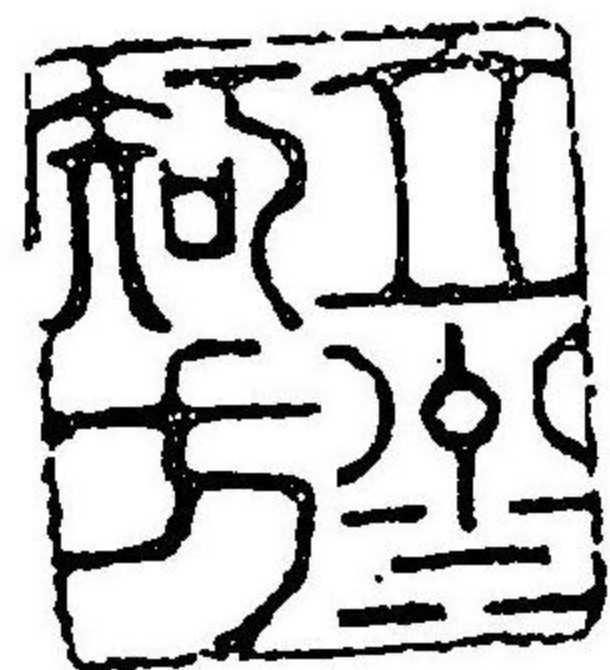
甲午小暑序

立川通雄談

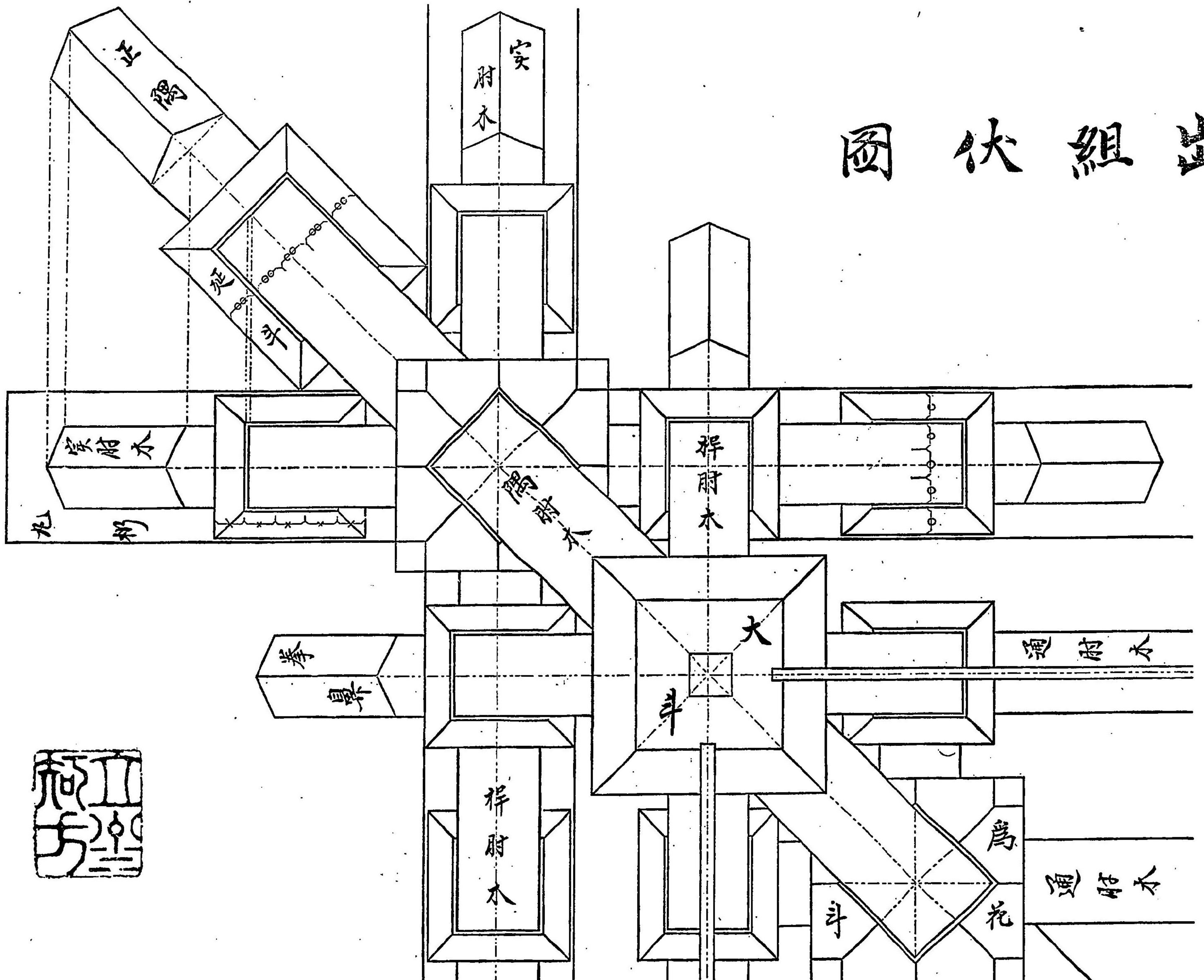




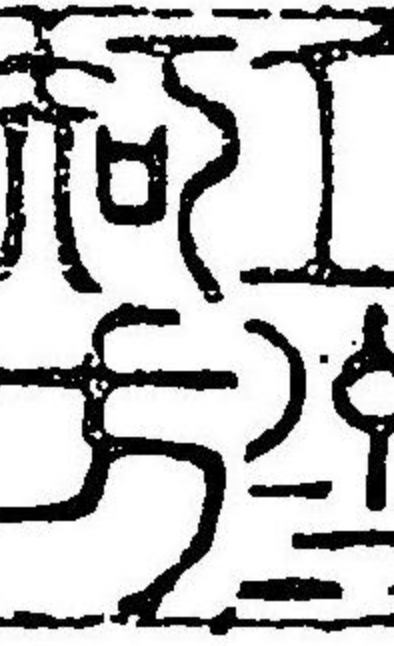
出組割



出組伏圖



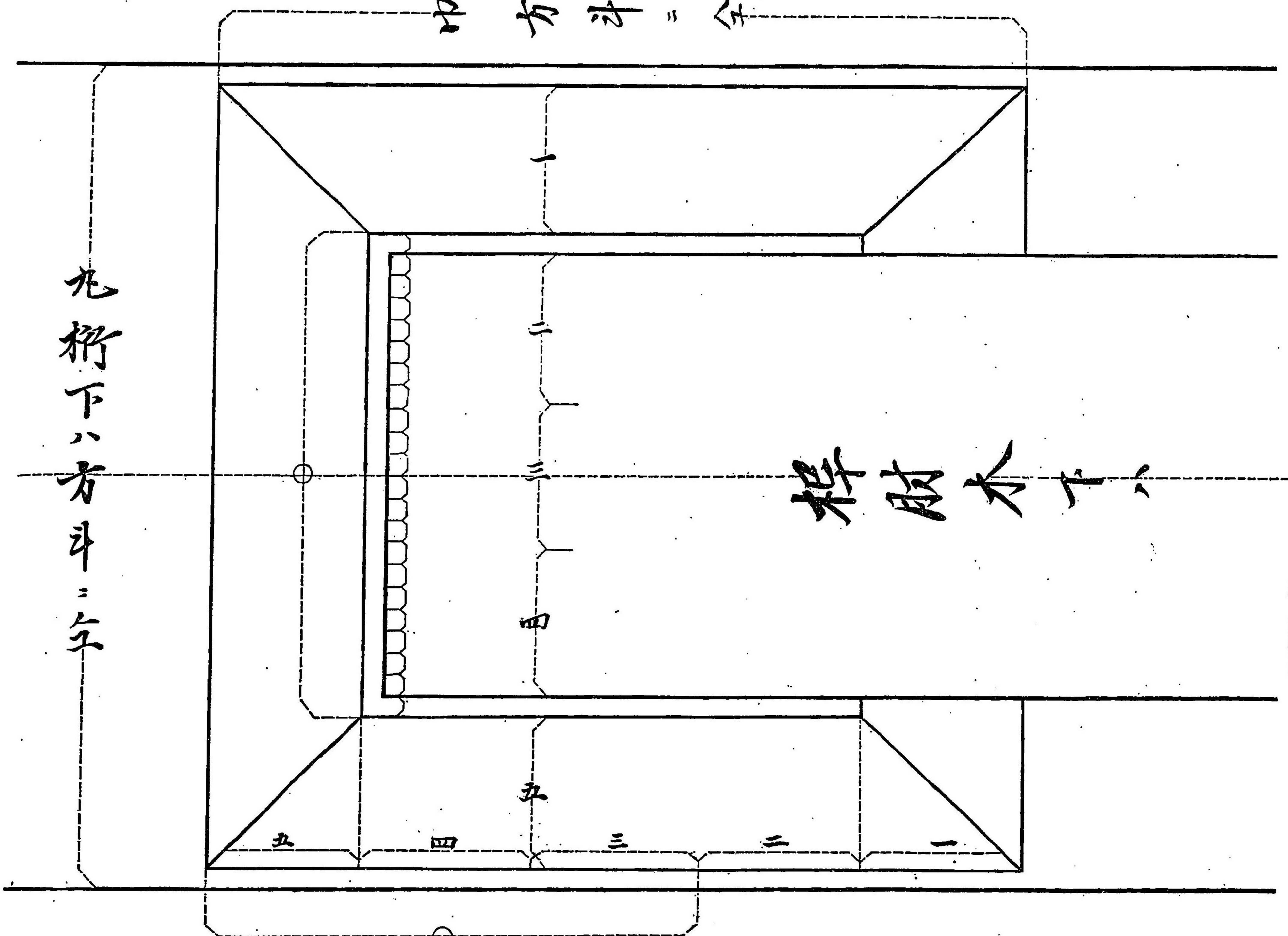
卷斗伏圖



枅肘木下六

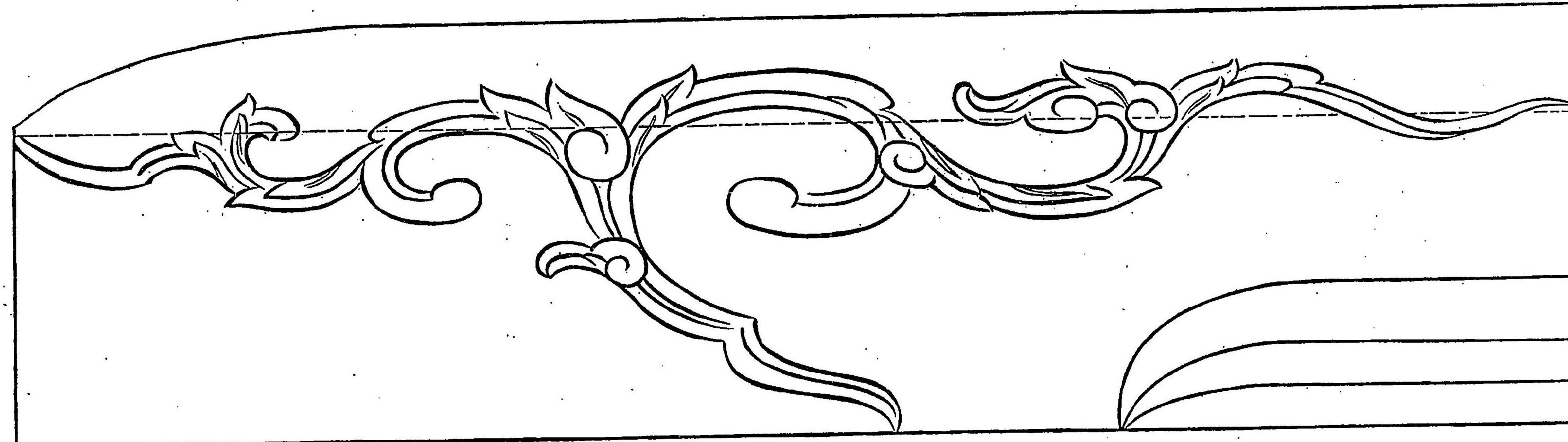
中 方 斗 = 全

九 枅 下 八 方 斗 = 全



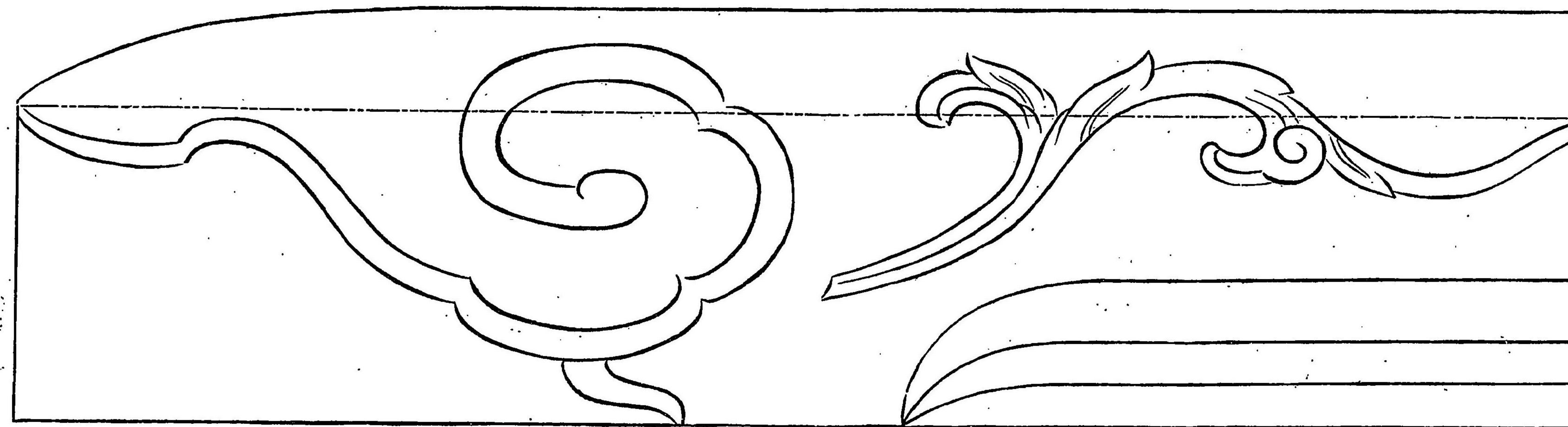
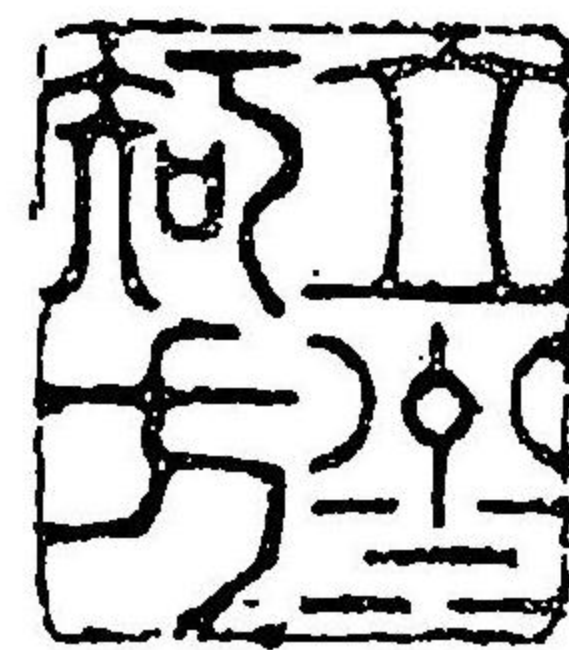
虹

梁

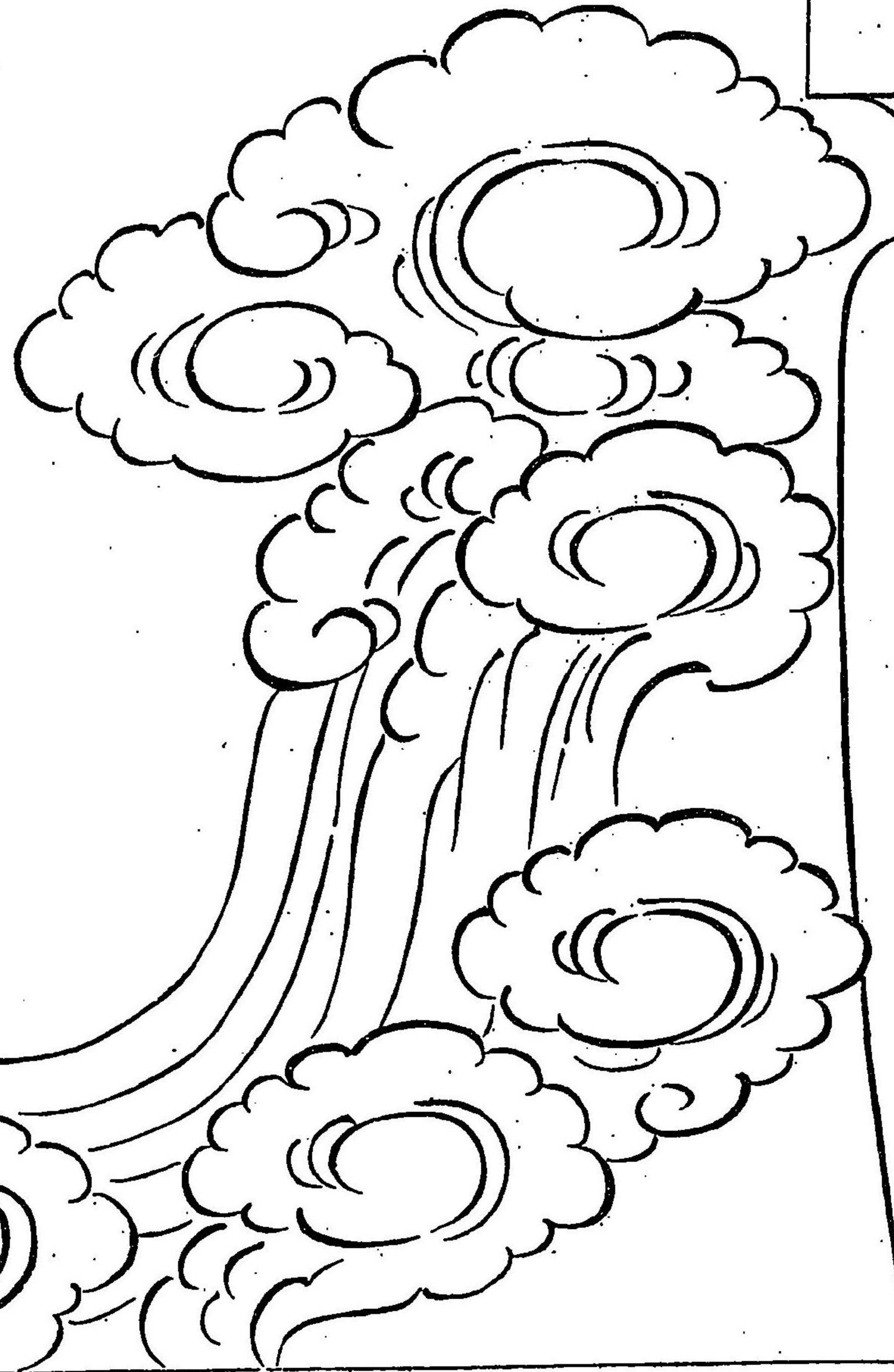


虹

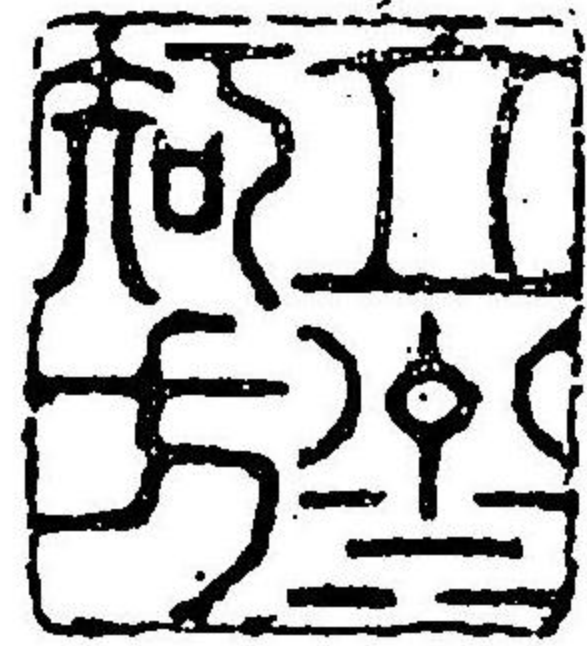
梁



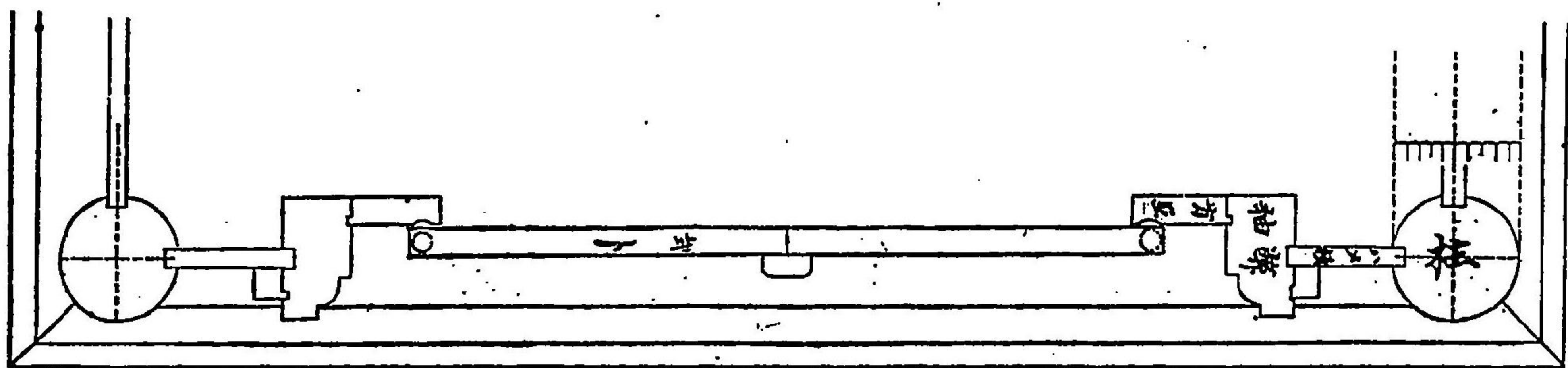
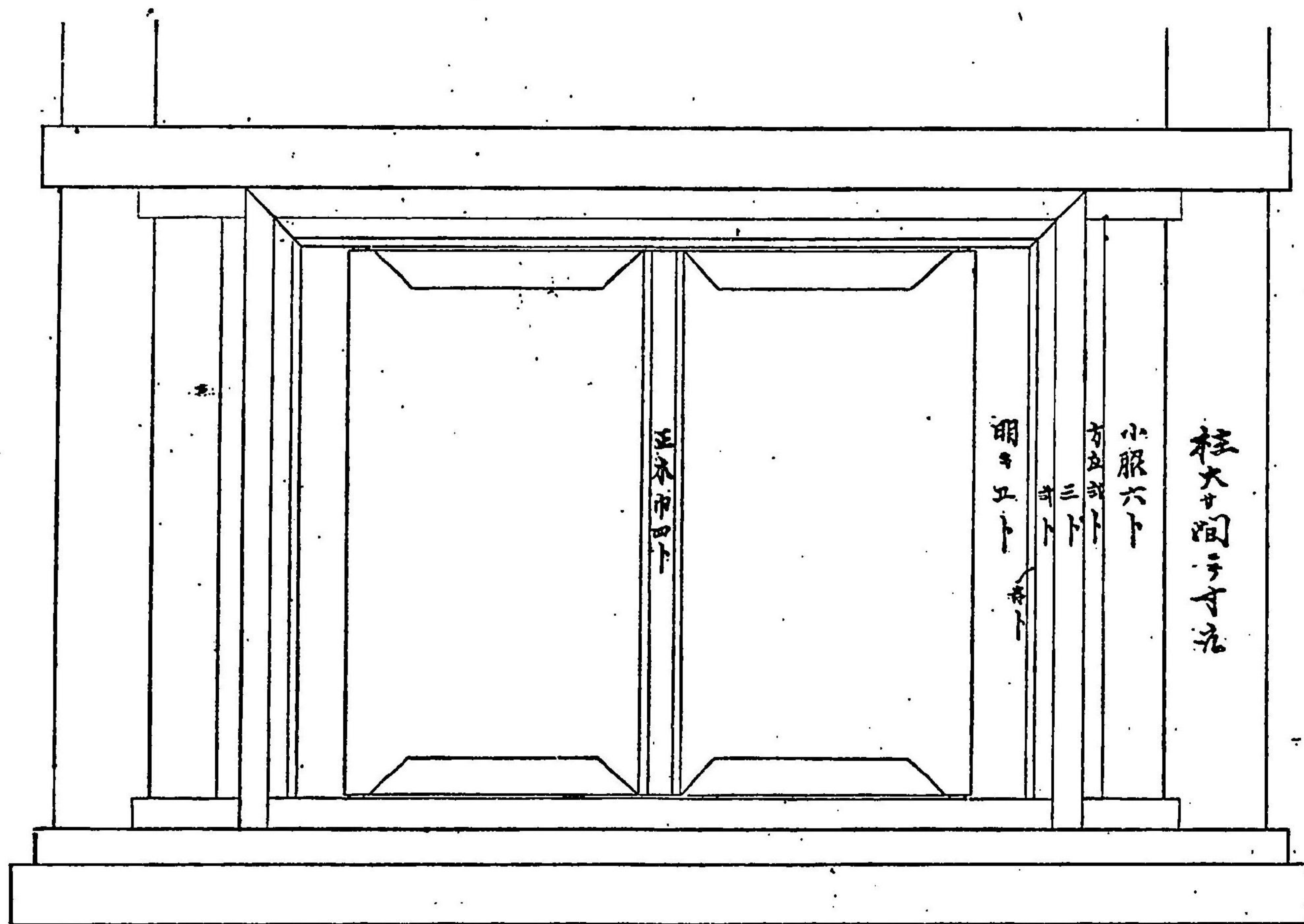
大平束



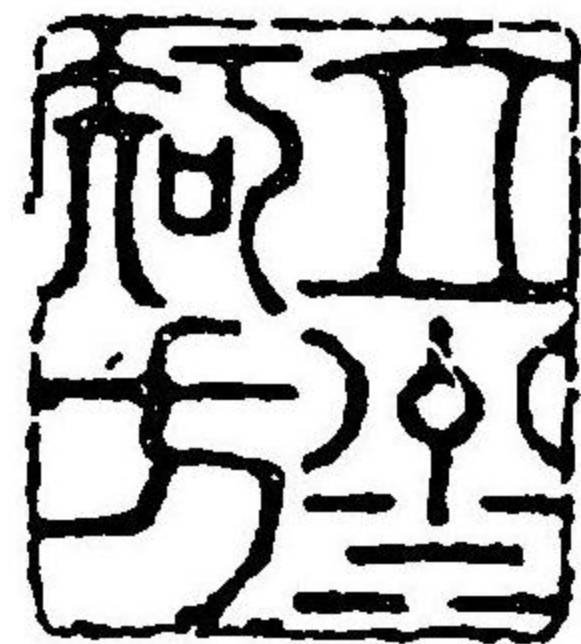
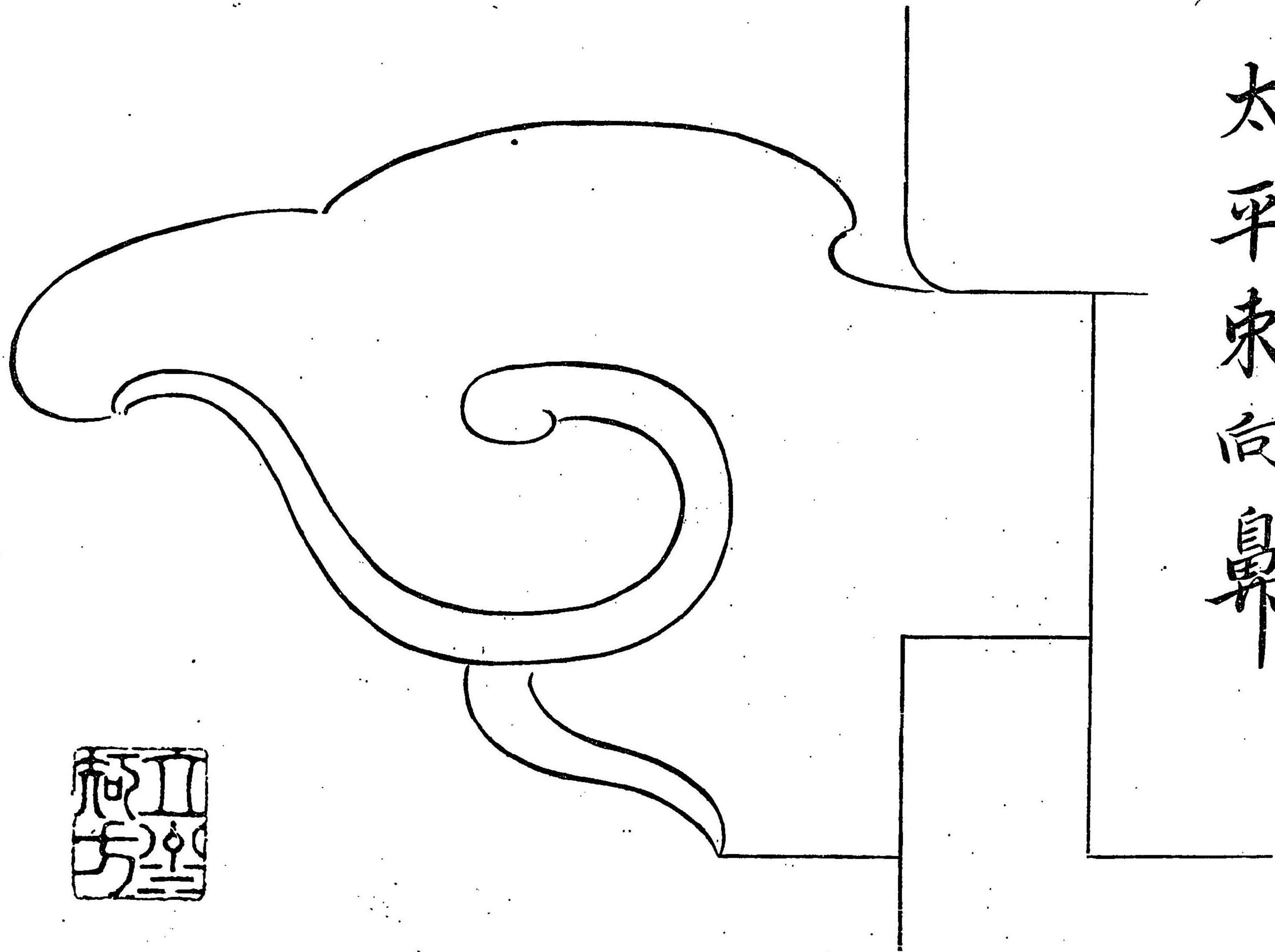
雲台掌籍



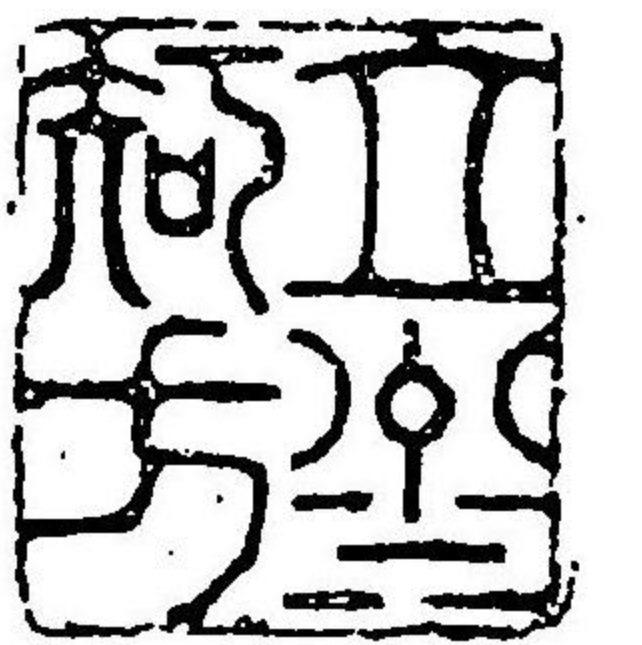
板唐戸帶軸割



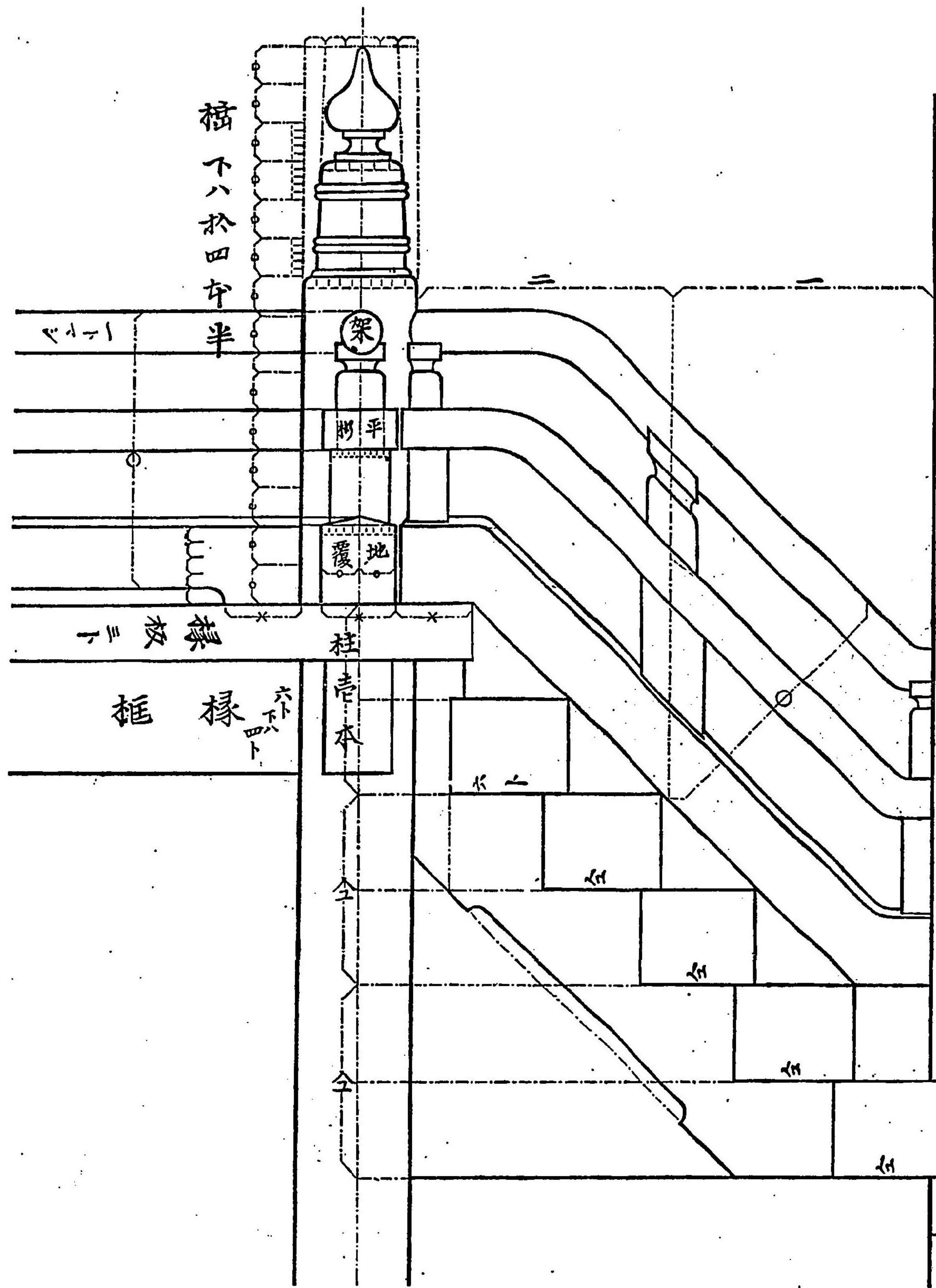
太平東向鼻



登リ高欄之圖

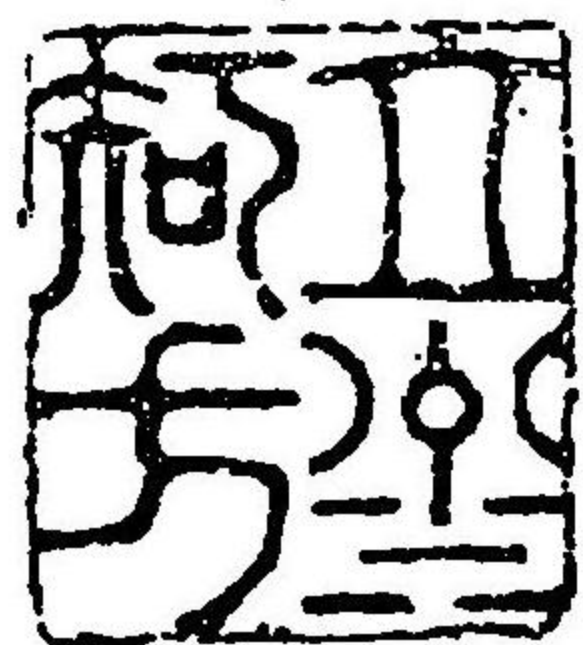
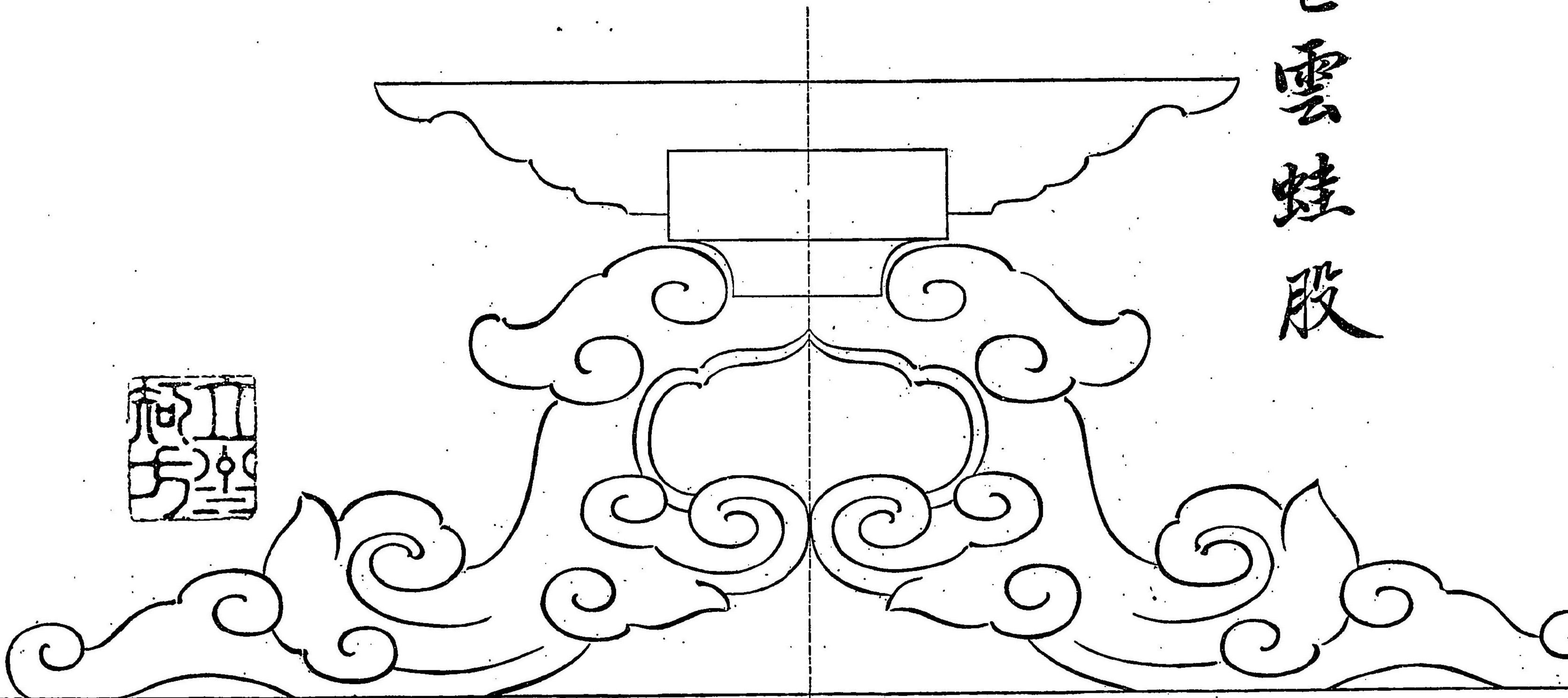


向拜柱本柱之八分

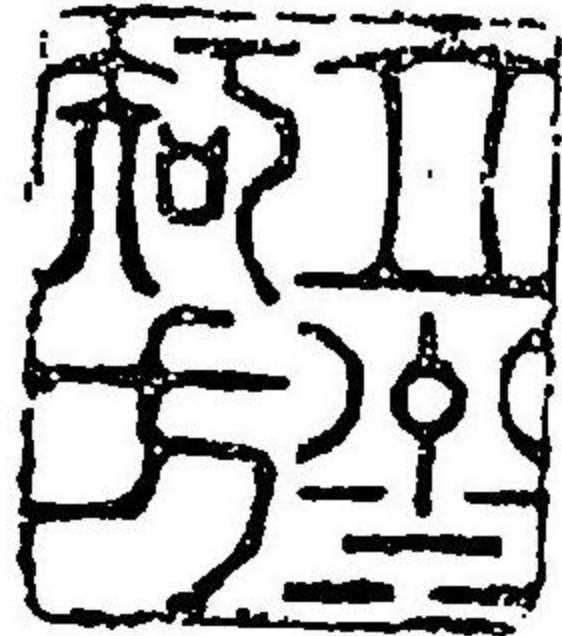


目下

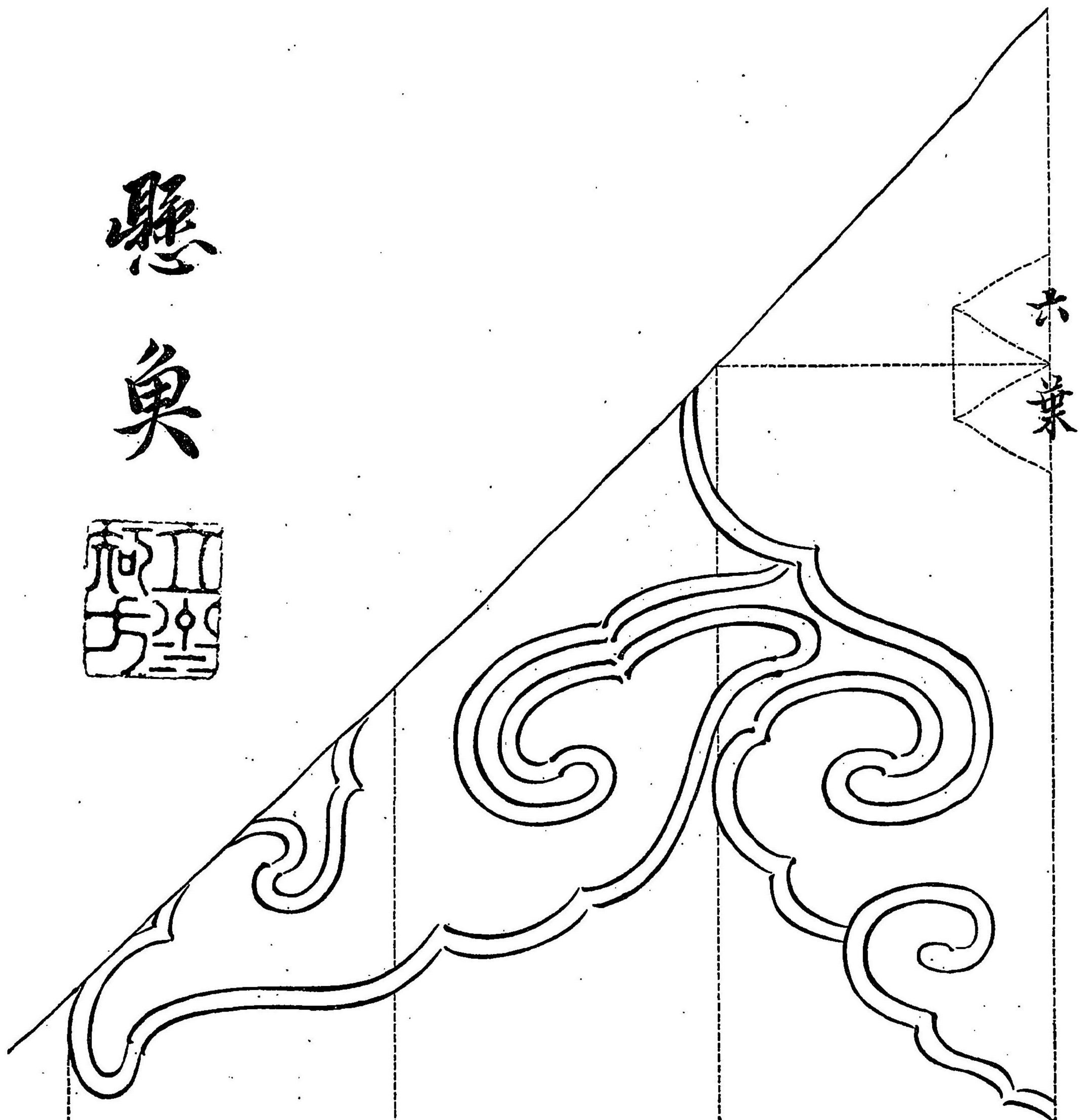
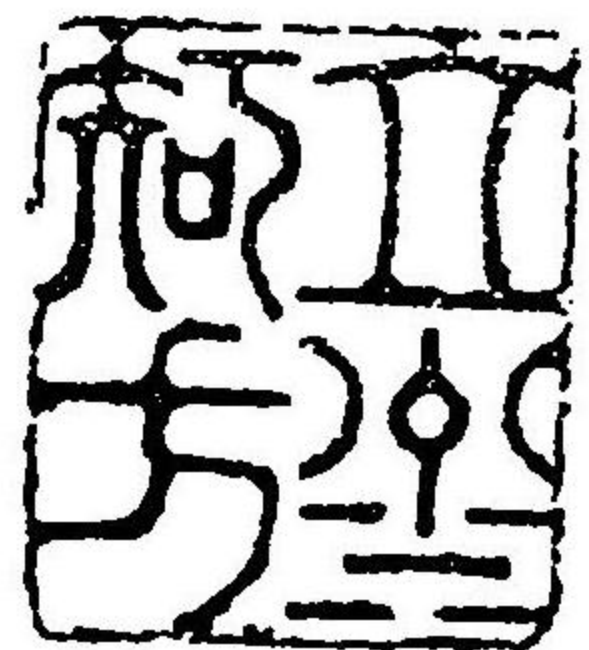
卷雲蛙股



暮
股

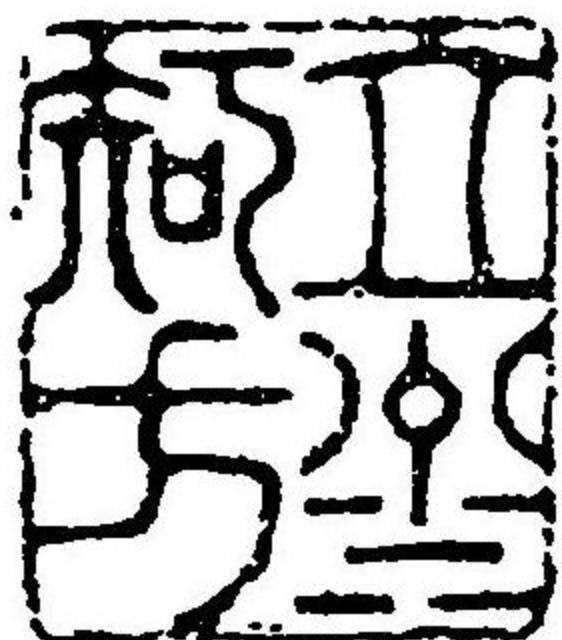
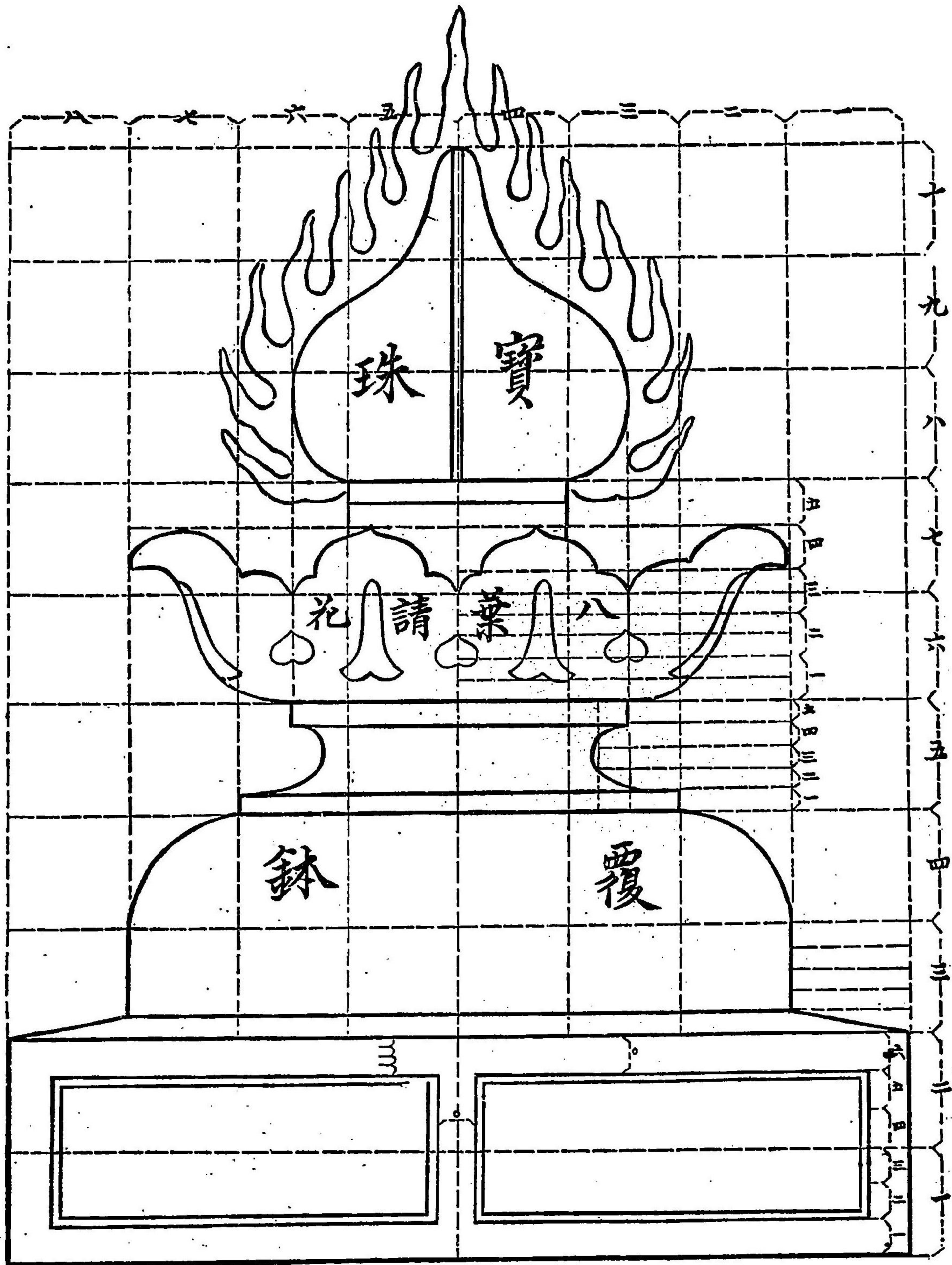


懸
魚

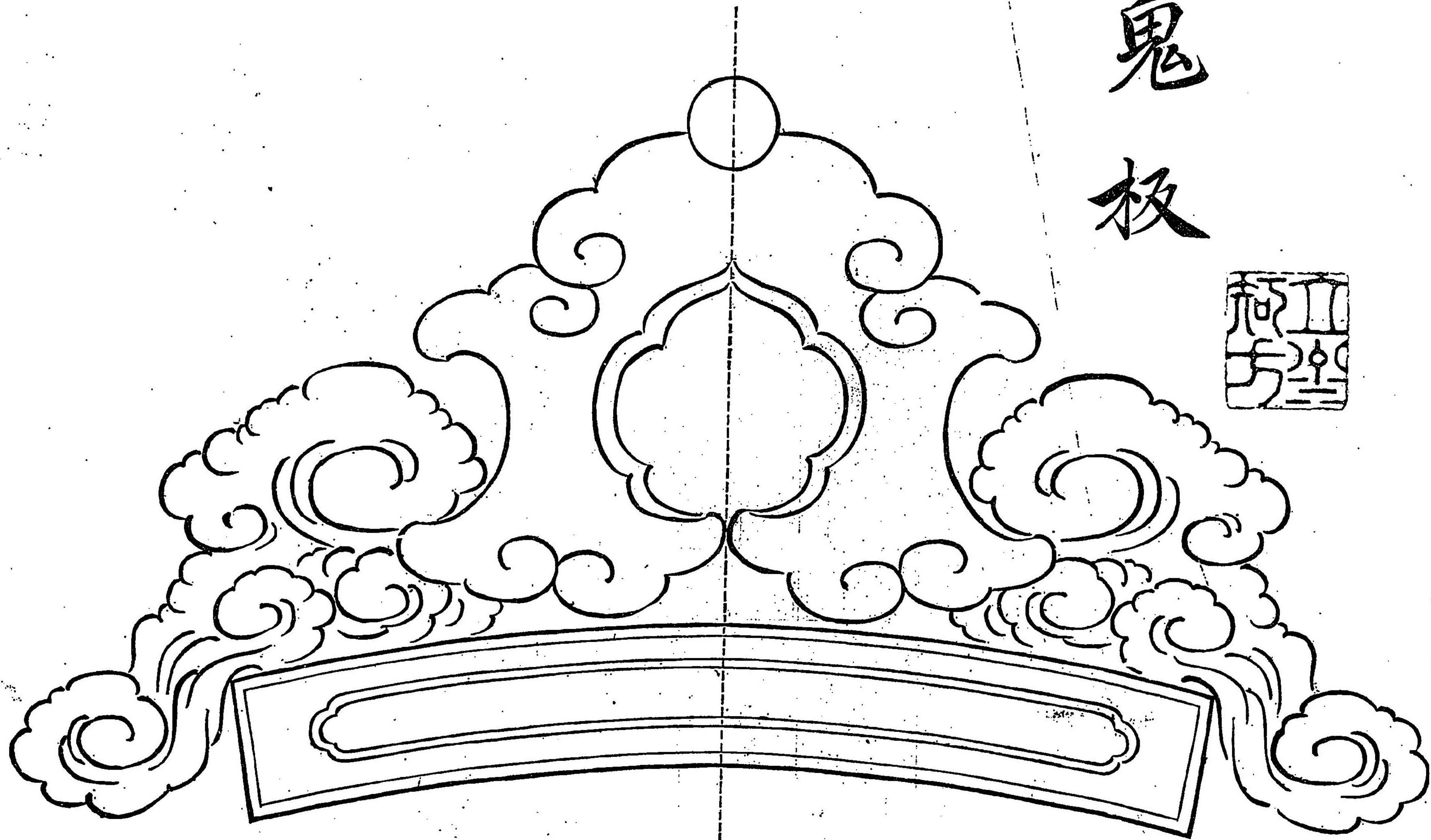


六
葉

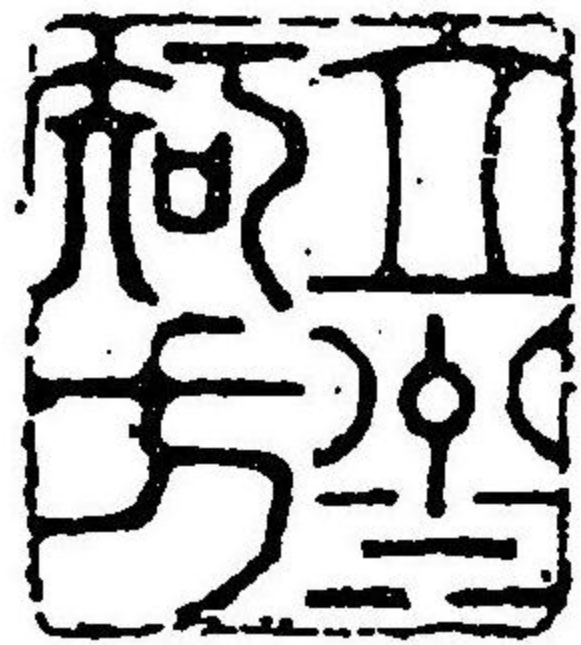
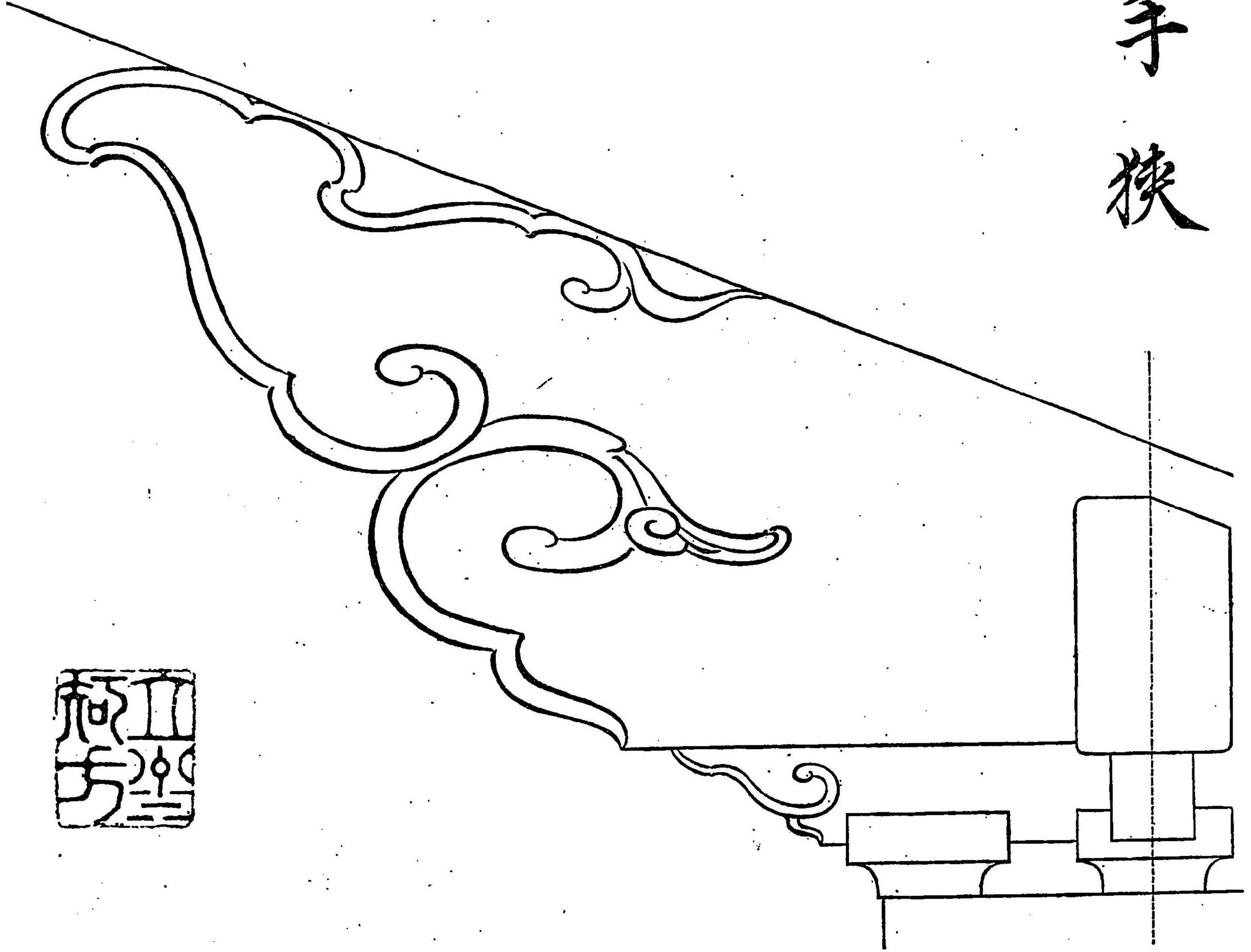
露盤



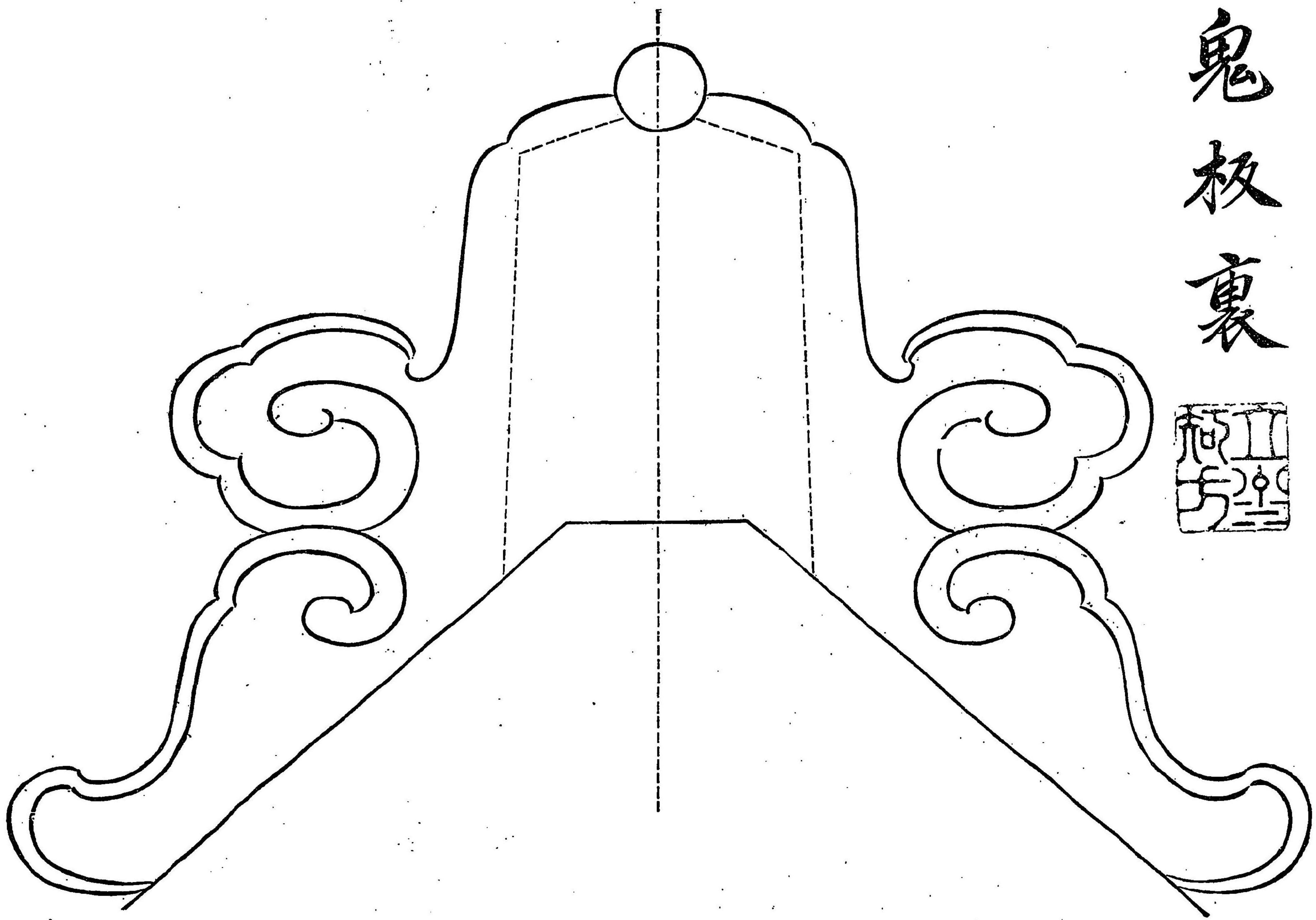
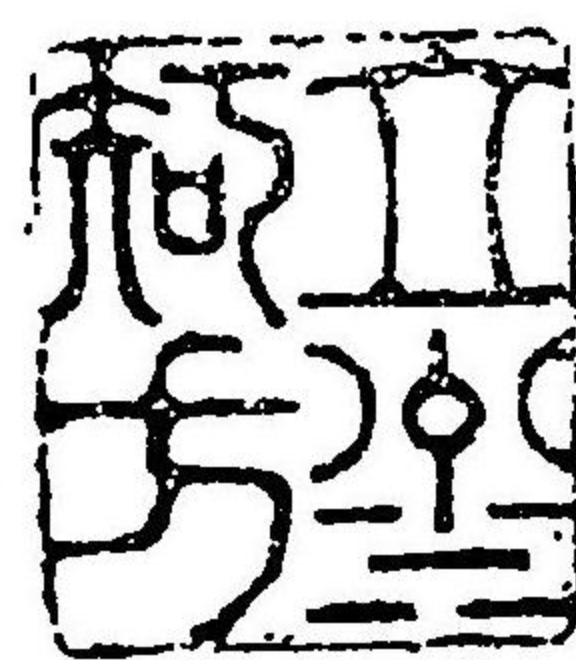
鬼板



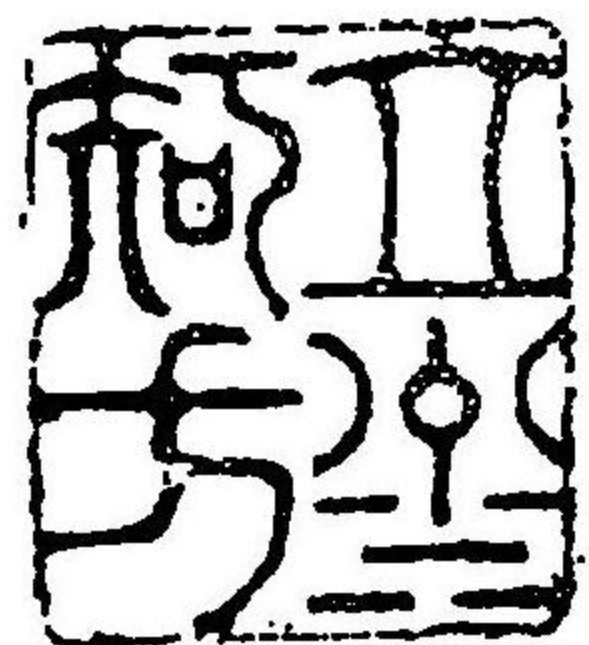
手
狹



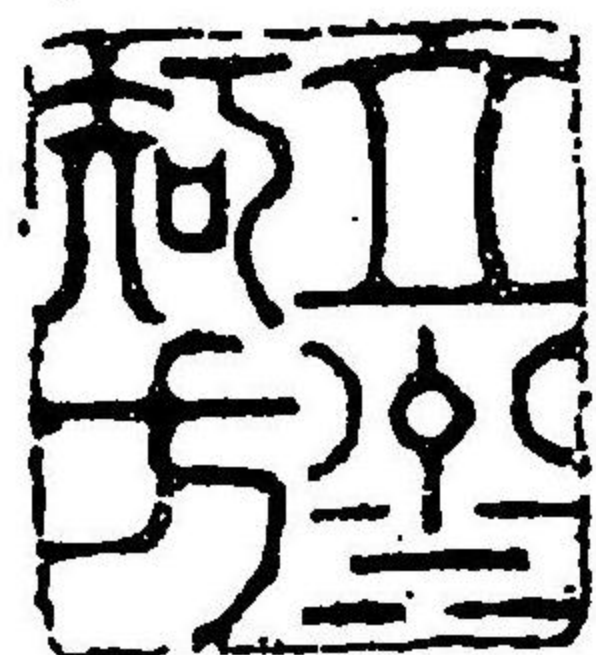
鬼板裏



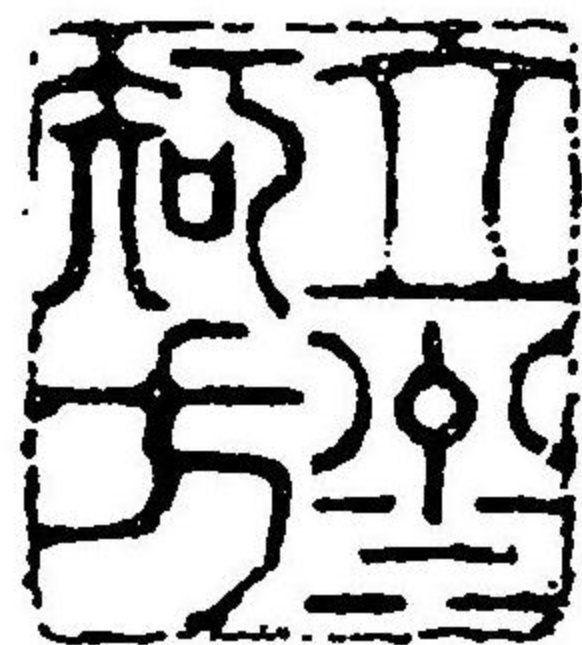
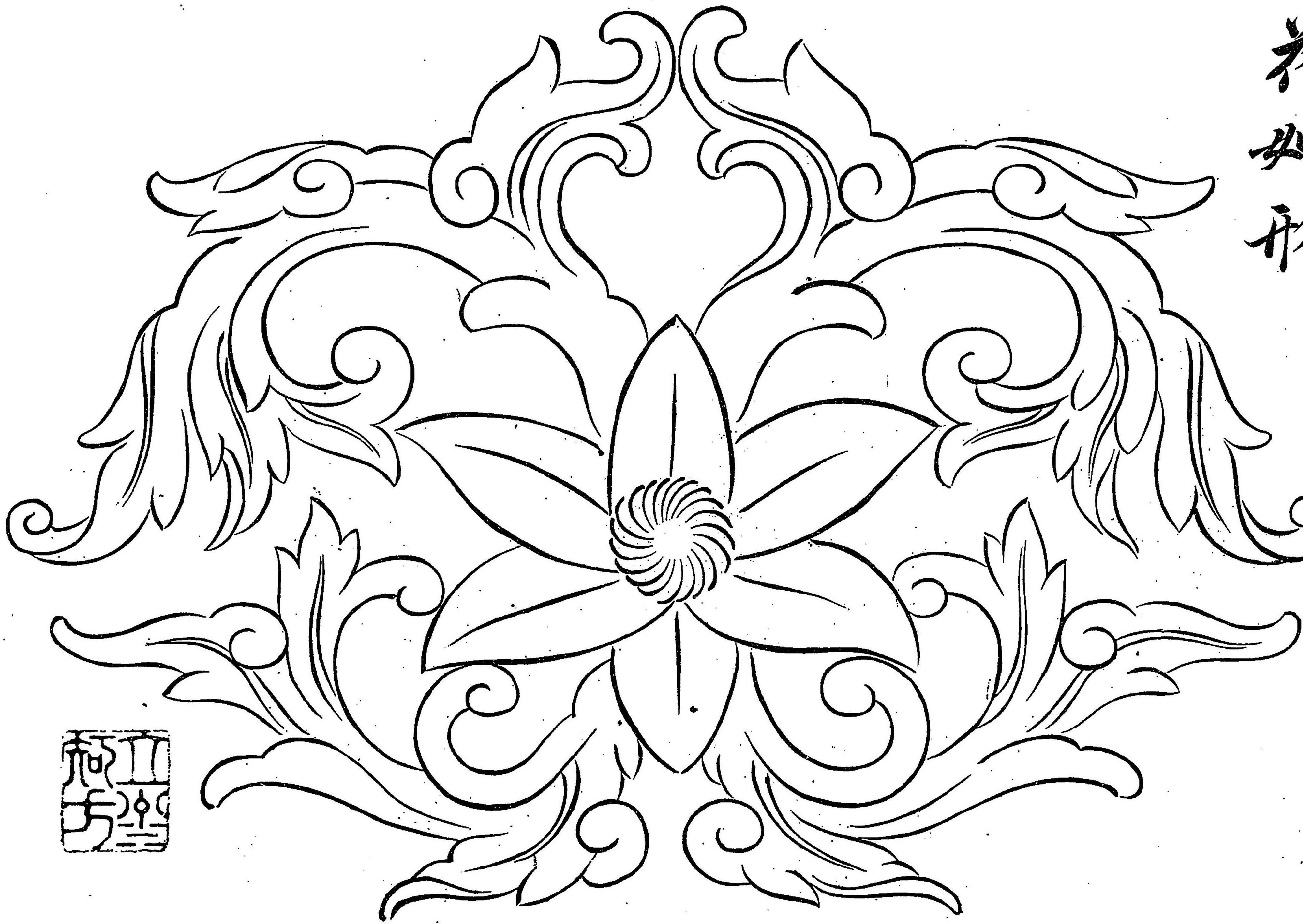
下リ掛魚

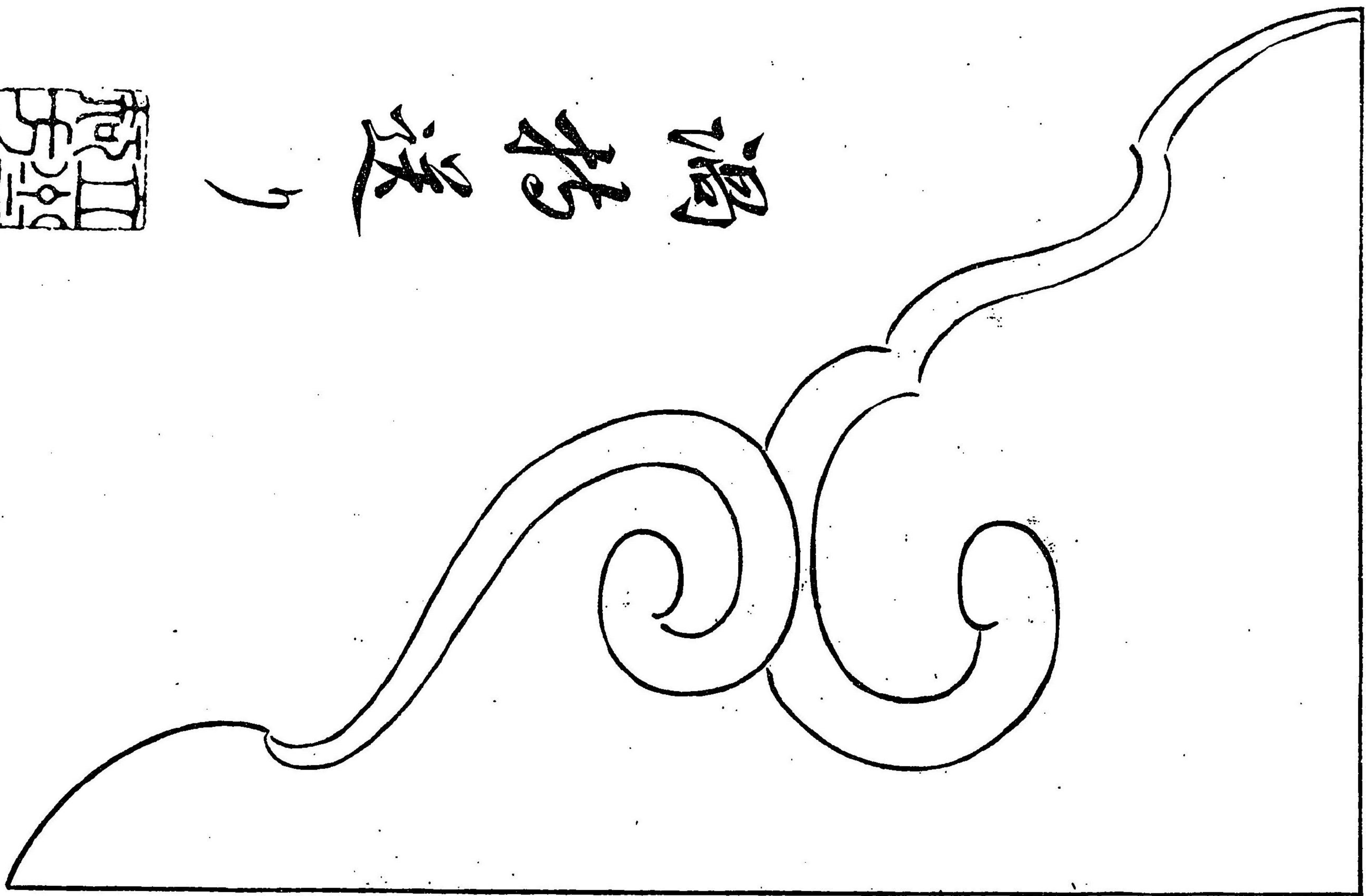


腕木鼻

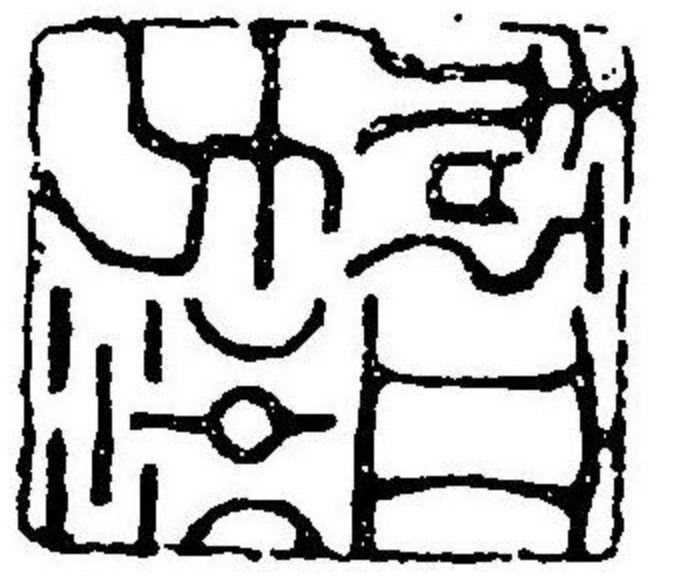


卷之五





濁物送



明治二十七年十月廿九日印刷

明治二十七年十一月一日發行

定價金六拾五錢

東京市京橋區瀧山町拾壹番地

編纂者 故立川知方

全市全町全番地

發行者 立川通雄

全市全町七番地瀧關舎

印刷者 島田用定

全市全町全番地

印刷所 瀧關舎

64
253

644
253

術 雜 家 匠 流 川 立

集 樣 繪 倭

第 五 號

けしかき

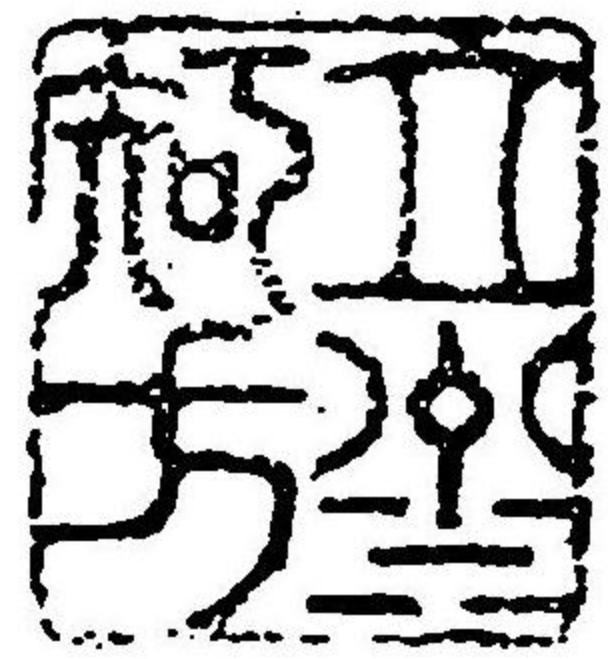
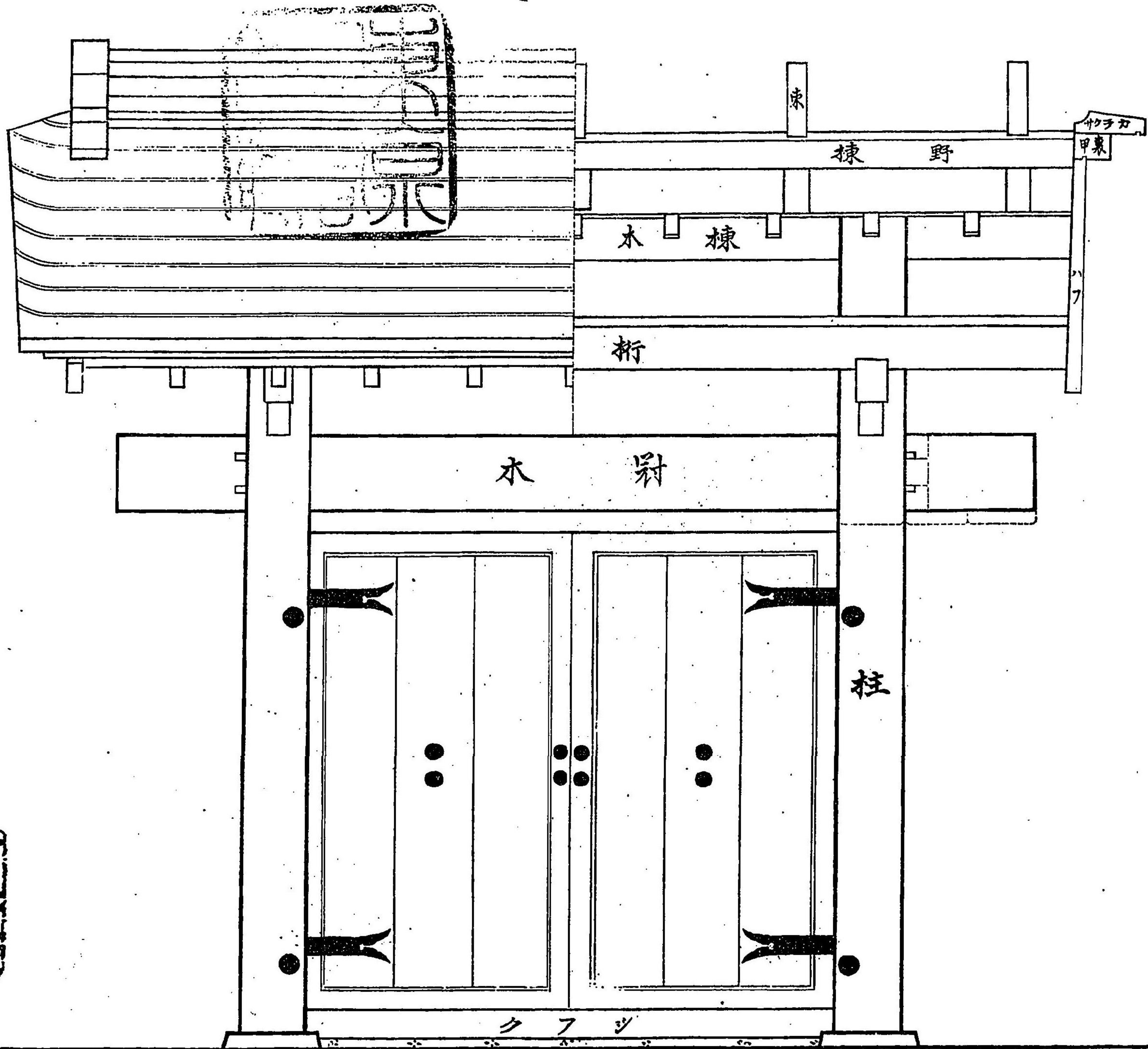
古く曰く良匠は規矩を離るるに難はずと宜る哉凡そ物あり
 けしき則ち規矩の常として斯道に於ては殊に然りと故を
 以て古くは本邦建築の業頗る進歩の域に達せし者あり
 せし多きは家傳秘訣と稱し廣く人に傳ふるを許さず同種
 の著書も乏しく非ざると雖も其載する所雜駁疎笨として唯其梗
 概を述ぶるに過ぎずしかるも子弟の模範として完ん後其力
 を勞し日子を費すもの多しとて實際に便かると其甚く稀か
 るに最可惜き限りといふ我曾祖立川小兵衛賢厩の昔に在り
 工匠の技に精巧な所謂立川流を以て稱せし者も亦傳へ
 ざる今に至るに母の之をきき及び猶隆盛を極む古來我邦と
 雖も亦石造等の建築の業に非ざりしに一朝先頃の如き震災
 に遭ふの不幸ありんか其毀壞亦將に測られざるに故を以て
 用棄るるに皆木造を單用せし是れ今も凡そ氣候等に適
 合せるに職由ら故に祖父知方従来の著書も多きは簡略に
 失し且其形極小之が應用を計るを頗る難し業ありんか
 憾み移年種々の繪様を上梓せんと欲し終に果せず
 大して方圓曲直等墨繩を加順次出版せよ要は直之
 を地にて用ひしむを得るに在り庶幾は斯業に
 及ぶ人これ須臾の闕く可らざるを鑑みしむるに於て蓋
 し餘師ありん

甲午小暑節

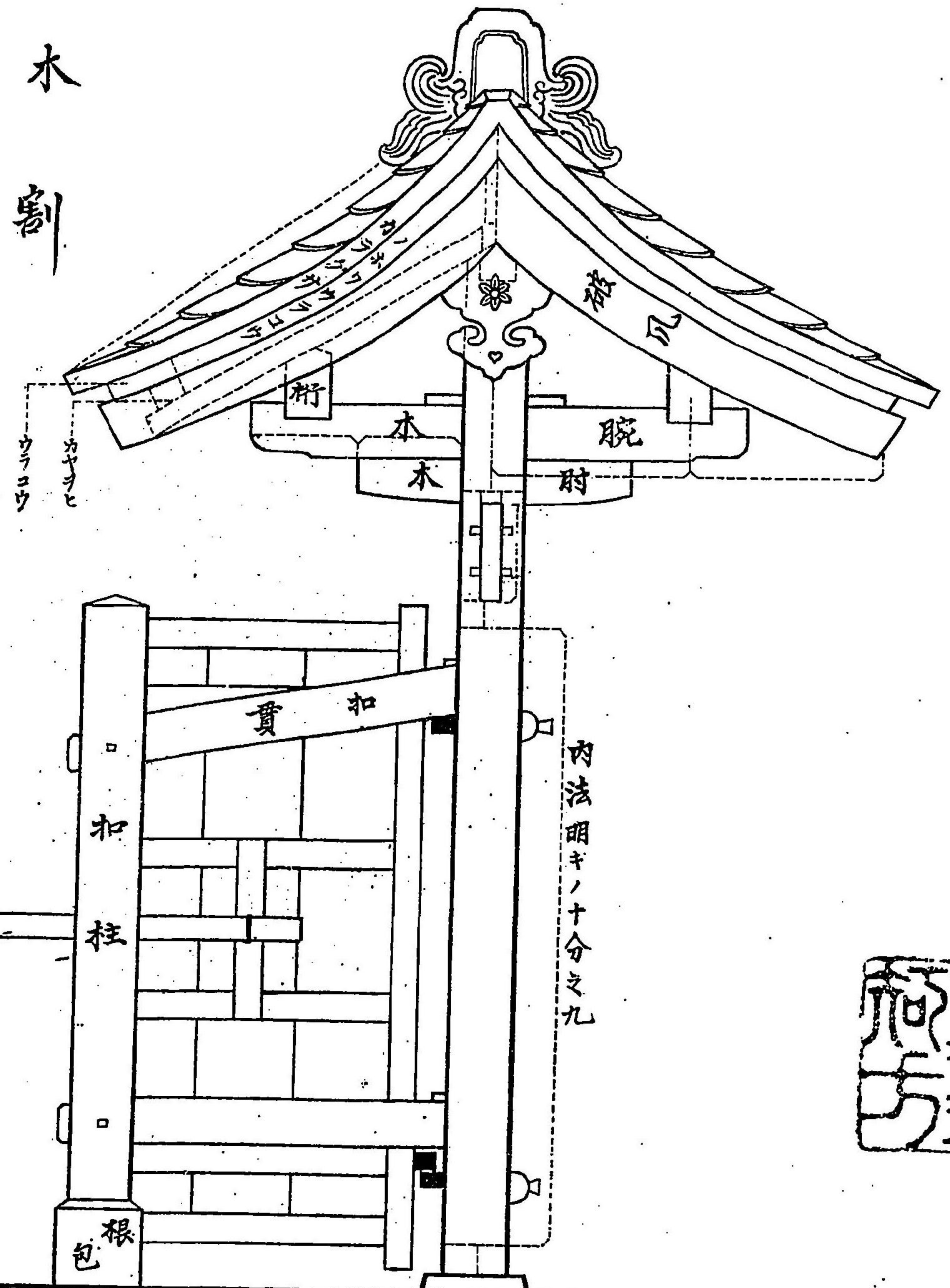
立川通雄謹



腕水門正面之圖



腕木門側面之図



一柱 見付明キ十分六分二見込柱ノ十分八

一肘木 柱ノ二分マシ

一附楣 全 十分ノ三

一地覆 全 十分ノ四

一肘木 七一柱ノ十分五下ハ全ノ十分五

一腕木 全全 六分五全全 四分

一桁 見付柱ノ十分六分五七一全ノ五分

一棟木 全全

一檣 下ハ全ノ五分一七一全ノ五分マシ

内法明キノ十分之九

一茅負 出岳水ノ下ハ二倍七一全ノ倍半

一裏甲 七一タルキ七一ト全下ハ全ノ二倍

一唐草 出全上

一破風 流レノ十分八ヲユレ巾トス上ニ三分マシ厚タルキ七一全

一登裏甲 平ト全レ上ニ二分マシ

一和柱 柱ノ十分ノ七

一和貫 全ノ十分ノ六

一根包 和柱ノ三分マシ四方

